特 53
266

本小說文庫

日輪

後篇

三上於菟吉

91

春陽堂

始

164

特263
266

日本小說文庫
—91—

日輪

後篇

三上於菟吉

春陽堂

昭和七・四・一
小倉

340-274

日輪　後篇

落花の如く

病室に引返した徳惠子は、すぐには咲子の枕邊に近づき兼ねた程驚愕に打たれて、棒立ちに突つ立つた。

咲子は激烈な喀血に襲はれて、赤インキをドカリとこぼしたやうな眞赤に染まつた枕の上に、その血潮の溜りに、鼻口を押しつけるやうにして呻いてゐた、――もう意識は喪ひつくされたらしく、呻きには苦痛は伴はず、それは呼吸と一緒に斷續して、口ばたに、小さい泡を作つたり消したりしてゐた。

徳惠子は身顫ひをして、近づいて呼びかけた――

『咲子さん！　しつかりなさいよ』

咲子はもとより耳聾ひてしまつてゐるらしかつた。睜かれたまゝの瞳は、どんよりと濁つて、何の表情もなかつた。何よりも徳惠子の胸を打つたのは、ベッドからだらりと落ちてゐる痩せ衰へた右手に、握りしめられてゐる一通の手紙だつた。それはいつも枕の下に祕められてゐた、あの西口からの最後の

たよりに相違なかつた。

徳惠子は鈴の紐をたぐりよせて、急變を醫局の方へ知らせてから、病人を抱き起して、横向きにしてやつた。身動きの拍子に、赤いあぶくがだく〳〵と口尻から流れた。彼女は自分のハンケチで、血によごれた顔を拭つてやつた。

まづ看護婦が、つゞいて醫院主が駈けつけた。

『こりや、ひどい喀血だ――』と、若い、神經質な醫院主は呟いて、瞼を裏返して見た。そして耳をぢかに心臓のあたりに押しつけた。

徳惠子は不安に滿ちた目で、醫者に注目した。醫者は徳惠子を見返した。

『若いといふことはやつぱり力です』と、彼はいつもの癖で頭を振るやうにしながら囁いた。

『肺が大抵破けて出てしまつても、まだなか〳〵生命は亡びない。心臓も思つたより強いからね――しかし――』

手早く注射が施され、枕も替へられた。

看護婦は溫湯でぐしや〳〵に濡らしたガーゼで、血にまみれた髪を拭いてやつた。が、ベツトリとこびりついた血潮は、なか〳〵鬢からとれ切らなかつた。

間もなく、咲子はほんのりと醉つたやうな顔色になつて、やがてだん〳〵と意識を回復した。瞳に怪しみの色がうかび、物問ひたげに枕邊の人たちを見まはした。

醫者はあわたゞしく、自分の唇を二本の指で押へるやうにしながら、誨へるやうにいつた。

『喋つてはいかん！　喋つてはいかん――おとなしく眠りたまへ』

さういはれずとも、咲子は堪へがたい疲勞に壓迫されて來たらしかつた。彼女は非常な努力で、徳惠子に微笑をもらして見せて目を瞑つた。

徳惠子は哀れでならなかつた。その上、自分の差出がましい好意が――强ひてあの青年と逢はせたといふことが、却つてこの病人の鋭すぎる神經と官能とを搔き亂したため、こんな結果を持ち來したのだと思ふと、いひ知れぬ自責を感じるのだつた。

『先生、どうぞ出來るだけのことをして上げて――』と、病人への詫の言葉のかはりに、彼女は醫者に哀願した。

『勿論、出來るだけ手はつくしてゐるのです――大凡近代の醫學が持つてゐるだけの力は――だが、人間に出來ることは大てい底が知れてゐるのだから――』

醫者は、最後の言葉を申しわけのやうにいつて、看護婦に、小聲で二三の注意をあたへて出て行つた。

――夕方が近づいて、一度小降りになつた雨は、またまるで夕立のやうな激しさで窓玻璃を打ちはじめた。徳惠子は、けさ咲子がさし示した櫻の花片が、同じところにびつたりと張りついてゐるのを眺めてゐるうちに、いつにないはかなさを感じて、人知れず瞼の裏が熱くなるのを覺えた。

――でも、この人はまだ私よりも仕合せだわ――やさしいあきらめと許しの世界を夢みて死ぬことが

出來るのだもの――。

咲子はその後五日ばかりの間、昏睡と短い覺醒との二つのさかひをさまよつた揚句、ある靜かな深夜、格別の苦悶もなく、咳の發作さへもなく、二三度息がつかへたあとで死んだ。

咲子の死は一應鄕里に知らされたが、肉親が大抵死につくしてゐるらしく、從兄といふ人から、御好意ついでにそちらで始末をして下されば忝けないといふ、いかにも田舍人の自己主義と、その癖禮讓とをふくめた、カチ〳〵な文體の手紙が屆いたにすぎなかつた。

若し誰か駈けつけるかと、緣者を待つ間、病院の一室に横たへられてゐた、若く美しく死に亡びた不運な少女の死骸は、のんびりと春日がかげつて、高い夕映が大空に流れるたそがれ、郊外の火葬場に送られることになつた。

あんまり侘しい葬列だつた。德惠子、死水を取つた看護婦、それにアパートメントの未亡人、事務員がつき添つた。

いざ自動車が出ようとする間際、醫院主が手術着を脫ぎ〳〵玄關へ出て來た。そして白い着物をクルクルと押し丸めて、後に從つた若い醫員に投げつけるやうにした。

『僕もお見送りしよう。綺麗なお孃さんの葬式に、男の見送りがないのは淋しいや』

侘しい戲れであつた。その戲れた言葉の底に、この純粹な科學者のある氣持が感じられるやうな氣が

した。

『有難う』と、德惠子は死者に代つて禮をのべて、醫學士のために席を讓つた。

『出せ！』と、醫院主は號令した。

乏しげな金色の飾りを見せた棺車が先發した。あとから四人の會葬者をのせた自動車がつゞいた。

細い、ごみ〳〵した巷を、どこまでも乘りものは走りつづけた。夕ぐれで行人は群がり、穢らはしげた荷車は混雜してゐた。時々、棺車に向つて帽子を取る老人や紳士がゐた。德惠子は、さうした人達に、相手には氣づかれぬ會釋を返しながら、心の中で、あの白狐のやうにやさしく愛い表情をした美青年西口有男のことを思ひうかべてゐた。彼は德惠子から凶事の通知を受け

て、隨分鄭重な悔み狀をよこした。それは、まるで死者が德惠子に有緣のもので、彼自身には何の關係もない人を弔ふやうな文意だつた。彼は死者の生前の美と、しとやかさと、病者だけが持つ不思議な生活への理解に對して滿腔の讃辭を呈した。德惠子はそれを棺車の中にはをさめなかつた。遺骨と一緒に郷里に送るには、大層恰好な弔辭のひとつであると冷たく考へたのである。

火葬場は、もうとつぷりと暮れた春の夕ぞらを背景に、赤煉瓦の平べつたい姿を見せて横たはつてゐた。散りかけた鬱金櫻が、ぼうと夢のやうなほの黄色で咲いてゐた。そしてその鬱金櫻の向うから自動車の響きを聽きつけてか、荒くれた二人の男が、淺黄色の、職工服に似た仕事着の腕をまくつて出て來た。

『特等さんですな――昨日お電話の――』

白布で丁寧に卷かれた細長い棺は、荒けない腕で舁ぎ下された。

四人は默々としてあとについた。

『よう、いゝ寄だ。こんな晩に燒かれて死ぬのも惡くはないね。どこまで行つたつて別に變つた世の中でもないからなあ』

この若い醫院主はたしかに變り者の一人だつた。彼は敢然として無妻なのは、別に他に理由があるからではなく、大學時代にある淫賣婦に失戀したゝめであることを誰にも告白してゐた。淫賣婦についての描寫は、いつも科學的適確を示してゐた。それだけ他人を笑はせもしたが、彼自身に取つては憂鬱を

强める種になるらしかつた――

『別に死ぬことが惡くもないよ』と、彼はもう一度呟いて、大股に歩いた。

煙にまみれた竈の鐵扉が開けられた。白布に卷かれた細長い棺が、ガタンと手荒く投げ込まれ、鍵がガチヤリと突き込まれた。その鍵を、荒くれ男は德惠子に突き出した。

四人は默つて頭を下げた。

骨上げはさびしい朝だつた。たつた一人、德惠子は出かけた。細い骨格は竈の抽斗の中で黒味を帶びた石灰色に小さく碎けてゐた。

『細そりしたお孃さんだつたから、手間ひま入らずに燒けましたよ』

隱坊は例の荒くれた手先に箸をあやつゝて、骨の一部を壺の中に拾ひ入れた。

『やあ、金齒だ』

生きてゐるうちは分らなかつたが、奥齒を埋めてゐもしたらしい。金の義齒が黑くくすぼつて殘つてゐた。

德惠子は若くして死んだ美しい友達のかたみに、その小さい金の塊りだけを受け取つて紙入れにをさめた。

何も彼もが、これでおしまひだつた。

もう散りかけた鬱金櫻が淺黄色の朝ぞらに、ぼうと匂つてゐる下を、德惠子は骨壺を抱いて歸つた。

歸りの自動車の中で、彼女はもう咲子のことは考へてゐなかつた。すべて務めをすましたあとの氣輕さに似た氣持が、むしろ彼女を晴れ〴〵させた。

――私は何のために瀕死の一人の娘をかうまでかばつたのだらう？

そして、自分自身の心の空虛を充すための、小さな冒險に過ぎなかつたのを思ふと、何となく苦笑がうかんで來た。

その日、咲子のための一切の事務を彼女はすませた。アパートメントの支拂ひをすまし、病院の方をすますと、かなりの失費だつた。一人の若い娘を死なせるために、彼女は家出の時持ち出したもの〻殘りを、殆ど全部失つてゐるのだつた。

『ほ、ほ、これで完全なプロレタリアートの仲間入りをしたわ。これからは腕次第――』

德惠子は少しも失望せずに、たゞ、多少の愚しさを感じて自ら笑つた。彼女は黃金の價値について今更のやうに考へた。彼女は持ち出した金を殆どすべて氣まぐれに費ひ捨てゝゐた。何人もがそれによつて心からの幸福を感ずるでもなく、みんな煙のやうな詰らないかたちで消え失せてゐるのだつた。

――やつぱし、思つた通りお金なんか詰らないわ。何にもなるものぢやあないわ。

彼女は女性の權威を以て自ら呟いたが、しかし、孤獨な身にとつて貧窮は心細いものに相違なかつた。得ることのいかに難く、失ふことのいかに早きよ！

彼女はアパートメントの生活に歸つて、毎日食堂の片隅に貼り出される求人の掲示を讀んだ。目星いものは少しもなかつた。毎日々々、心當てにして朝食に出かけては、失望して部屋に歸つた。

――ところが、咲子の骨を鄕里に送つてやつてから、十日ばかりしてのある夕方のこと、突然、まるで思ひもかけぬ難儀が彼女を脅かした。

その日彼女は、小さな職業の口をたづねて夕景までさまよつた末、宿所に歸らうと本鄕眞砂町の停留場で電車を捨てたのだつたが、春のたそがれの薄明りの中で、突然、何人かの目が、ぢつと自分をみつめてゐるのに氣がついて、不思議な暗い豫感を感じて立ち止まると、つい、目の前に、一人の男が、外套なしの背廣姿で、ぐいと彼女を睨めつけるやうにして突つ立つてゐた。

誰か見覺えのある人間だと思ひながら、小背な、頰骨の立つた、瞳の鋭い男に限りない不快を覺えて、急いで目を反らして立ち去らうとすると、その男は、なほ更いかつい眼付になつて、その癖にたりと笑ふのだつた。

『長沼のお孃さん、お待ちなさい』

德惠子はさすがにぎよつとした。家出をしてから、本姓で呼ばれたことは、新東京社の中での思ひがけない老寫眞師との邂逅の場合だけだつたが、あの時は相手が相手でうまく誤魔化したものゝ、今の相手はその手では駄目な人間らしかつた。と、思つた瞬間、彼女はすべてを思ひ出した。

この男こそ、いつぞや矢來の住宅へ、靑木に呼ばれて出現した、祕密探偵社の今野にまぎれもなかつ

た。

『さう吃驚なさるには及ばない。僕はかつて拜顏の榮を得た今野ですよ』と、彼は皺枯れた聲でいつて、帽子に手をかけて、再びにたりとした。

徳惠子は今野だと認めると、突然毛蟲が背筋に落ちでもしたやうに、何がなしにぞうつと惡寒を感じて、踵をかへして立ち去りたく思ひながら、負けぬいかつさでいつた——

『あゝ、今野さんでしたか——私、只今急ぎますから失禮を——』

そしてすり拔けようとするのを、相手は瘦せこけた肩をいからせて、彼女が行かうとする方へ通せんぼをして、

『お孃さん、實は、ある重大な用向きで先日からお行方をたづねてゐたところです。ちよいとお待ち下さい。』

『しかし私は急ぎますし——私の方では別にお目にかゝる筋もないやうな氣がいたしますから——』

『いや、あなたにはまことに御迷惑なことです。それは知つてゐますが——でも、私の話をお聞きになつたらちよつとの時間をお割きになつたのをお悔みにはならぬと思ふのです』と、今野はテコでも動かぬ姿勢で、

『それにしてもお住居はこの御近所なのですか？　それならすぐ御同行したいが——』

『いゝえ——この邊にちよつと訪ねたいところがあるので——』と、徳惠子はさへぎつた。

『ではかうしませう』と、今野はぢつと彼女をみつめたまゝ、

『ついそこに私のよく知つてゐるカフエがありますから、そこまで御同行願ひます。別にお手間は取らせません——まあ、おつき合ひ下さい。ほんの十分か二十分で濟むことで、それであなたにも非常な利益を齎すのですからな』

徳惠子は面倒なことに思つた。が、相手の蠕のやうな表情を眺めると、到底このまゝ別れることは出來ない氣がした。なまじ強ひて逃げようとすれば、この鐵面皮な惡黨は、しつツこく尾行して來るに相違ない。結局、この手合がどれ程のことが出來るだらう——深夜といふわけではなし、何を怖れるにも及ぶまい。

『では、ほんの十分間——』と、彼女は答へた。

今野はがらりと態度をかへて、にやりと笑つて、丁寧に帽子をとつた。

『相濟みません。折角御訪問の御途中を、私のやうなものゝために妨げられて、さぞ御迷惑でございませう。さあ——』

彼は自分の右に徳惠子を歩ませた。眞砂町の停留場から、すぐ左に切れて、細い横丁に導くのだつた。

もうあたりは夕闇に包まれて、むかうの小洋館の大きな前窓がぱつと灯に輝かしく見える。近づくと、

今野はその明るい家の扉を押した。

灯ばかりが徒らに眞白に輝いてゐる酒場には、よごれた白布をかけたテーブルが並んでゐたものゝ、客らしいものは一人も見えなかつた。今野は出迎へた骨ばかりのやうな女給には目もくれず、默つて突き當りの階段を上つてゆく。

徳惠子も塵埃まみれな、危なつかしいその階段を踏んで行く外はなかつた。

二階の、青ペンキの剝げ落ちた扉の前まで來て、今野はコツ〳〵と痩せた拳でノツクした。そして答へがないと知ると、ぐいとその戸を開けて、徳惠子に腰をかゞめた。

小さい、天井の低い、たつた一つ十燭の電氣がついた部屋だつた。三方は灰茶色によごれ切つた壁で、一方だけに窓があつたが、その窓の外はすぐトタン塀になつてゐて眺めも何もなかつた。

テーブルが一つ、それをかこんで曲木の背を持つた粗末な椅子――その一つを指さして、痩せ男は、紳士らしさをよそほつて徳惠子を招じた。

『さあ、どうぞ――』

徳惠子は掛けた。

今野はついて來た女給に、コーヒーと菓子を命じて、自分も坐つた。

『お話を承はりませう』

徳惠子は、相手がいやに落着き込んでゐるのにいら〳〵しながら口を切つた。

『ようございます。しかし、まあ、コーヒーでも召し上つて――この家は密談には恰好の家ですから御安心なすつて下さい』

まあ、落着きなさい――と、嘲るやうな今野の顏を、徳惠子はまともに見返して、

『ですけど、何度も申し上げたやうに急ぎますから――』

『實はね』と、今野は相手にはかまはぬやうに、女給が置いて行つたコーヒー茶碗に匙を入れながら、『實は、僕はかうして一人であなたにお目にかゝつては義理の悪い友達を持つてゐるのです。われ〳〵は――つまり、その友達と僕はですな――あなたにめぐり會ひ次第、二人列座の上でお話をすることに約束してある。で、僕は、その男に、この家から電話をかけて、來車を求める義務を持つのですが、何分、あなたは急いでゐらつしやる――それに、あなたにしても、たゞ今ではその男に逢ふことをさまで喜ばれまいと考へるので、あなたに對する僕の好意上、かうして僕一人でお相手をしようといふわけなのです。ですから、その邊を酌んで下すつて、あなたも僕に好意を持たれてもいゝやうに思はれますが――』

今野は皺枯れた調子で話した。徳惠子は今野のいはゆる『友達』なるものが、誰を意味するかを了解した。あの執念深い青木は、恐らく全力をつくして自分の居所をさがしてゐるであらう――あの男は一度見込んだら、貪婪な狼のやうに骨の髓までしやぶらずには飽かぬ男だ！　徳惠子は、青木のあの餌

ものにうかゞひ寄る蛇のやうな眼付を思ひ出すと、その目が扉の外にもう迫つてゐるやうな氣がして、さすがは女氣で思はず身ぶるひをした。

『何しろ、僕の友達はます〳〵不幸に落ちたゝめに、ます〳〵辣々しくなつてゐます。何分、さう明るい人格の人間ではないのですから、怨みを抱く人に對してはどのやうな殘酷な復讐をも、敢て憚かるまいと思はれますのでな』

と、今野は匙を、チリンとかすかな音をさせて、皿に置いて、碗を口に持つて行つた。

『僕としては、たしかに、その友達に義務を負うてはゐるが、しかしですな、義務は義務として、また別に風情もある――』

今野はさう言ひかけて、にたりとして、

『僕だつて探偵社になんぞ勤めてはゐるものゝ、やつぱし人間だ――血も涙もある人間だ――だから、美しい、たをやかな淑女に對してはなか〳〵無限の同情を――同情と申して失禮なら敬意を抱かざるを得ないのです。ですから、何も無理に友達に義理立てをして貴婦人を苦しめたくはない――端的にいふと、青木君があなたをつかまへてかれこれと、彼一流の筆法で苛むのを見たくはないのです。そこで、僕はことによればあなたと只今偶然途上で邂逅したことを、あの人に内密にして上げてもいゝといふ考へを抱いてゐるのですよ。どうかそんな目で僕を辱かしめないで下さい。ね、僕を多少信用して下さい。僕だつて、あなたのやうな方から、鬼畜のやうに蔑すまれたくはないですからな』

今野は再び匙の悪い唇に薄氣味惡い微笑をうかべた。

德惠子は出來るだけ靜かな聲でいふのだつた――

『兎に角、あなたのお話といふのを伺はせて下さいましな』

『思ひ出すと微笑せざるを得んですよ』と、今野は彼女の言葉に耳を貸しもせずいつた。

『いつぞや矢來の家で、青木君と僕とが外出する時、あなたの番人にあの無骨な青年を殘して置いた。所が、あなたが彼にどんな魔法を用ひたか――恐らくあんな青年はあなたのちよいとした涙か笑ひによつてさへも軟化したものでせうが、われ〳〵への義務を忘れて、あなたを逃がしたばかりか自分までも行方をかくしてしまつた――は、は、あの時は僕も烈火のやうにあの小僧を怒つたものです。併し、今にして思へばですな、決してあやつを責めることは出來ん。僕自身が、かうしてあなたと對座して見るとあなたのために計つて上げたくなる。あなたを青木君のやうな執拗な人の呪ひの火から救つて上げたくなる。といつて、僕はこれでもう年を取つてしまつてゐますから一片の微笑や一滴の涙を見せて戴いても、有難い報酬とは思はないが――は、は、そこはよみとうたでな――は、は――』

『報酬と、僕が申し上げたのを、おいやしみになりますか？』と、今野は恥を知らない眼付で、明らさまにいつて、冷たく笑つた。

『現代ではわれ〳〵はすべてにこの問題を閑却するわけにはまゐらんのです。僕のやうなものでも、こ

れでもある藩の家老職をつとめてゐた先祖を持つのです。その當時は、恐らく物質的報酬の問題はいやしめられて當然だつたでせう――傳來の秩祿を持つて、豐かに暮してゐたのですから――ところが現代では、われ〳〵は働いて食ふ外はない――あなたのやうに富豪の令嬢として生をお享けになつた幸福なお方は別ですが――』

『今野さん――たしか、今野さんと仰しやいましたわね？』と、德惠子は冷然として口をはさんだ。

『富豪の娘も、その富豪の家を捨てれば、世の中の一ばん貧しい娘でございますわ。恐らくどんな工女よりも、現在の私は貧しいのです――私は職にも離れましたし、宅から持ち出したものもいろ〳〵な事情で失つて、只今では、まるで無一物なのですもの――』

『は、は』と今野は笑殺した――。

『あなたが無一物でゐらつしやるつて？　は、は、は。さういふ形容詞は、現代のやうに貧窮者の多い時代では許されません。無一物といふのは、さういふお帽子も、着物も、靴さへもない人間にしか許されない言葉です。あなたは長沼家といふ富豪の家をお捨てになつても、なほ依然として分限でおゐでだ。立派なブルジョアだ』

『まあ、どうして――』

『どうしてと仰しやつて、あなたはそんなにお美しくお裝ひになつておゐでだ。手首にはプラチナの時計が輝いてゐる――』

今野は笑ひ續けるやうにいつた。

德惠子は默した。どこまで傍若無人な言葉だらう――このやうな人間をいつまで相手にしてゐる必要があらう――

『もう、冗談は大抵に遊ばせな、私も來職にさまよつてゐる身でございますから――今ではあなたの方が何倍か餘裕のあるお身の上です。お戯れのお相手をしてゐる暇がありませんの――』

今野は肩をゆすつた。

『まあ、六かしげに話し合ふのはやめにしませうよ。僕達は好意を持ち合はなければ――僕はすでに、どんなにあなたを敬愛してゐるかを、お示しした筈だと思ふ。現に、青木君をまぜずに、かうして二人だけではありませんか。これは確に友人には悖德だ。しかし、その悖德をあなたのために犯してゐるのです。そこを買つて下さい。僕はくどくはいはん――あなたが僕を買つてさへくれゝば、永久にあなたと青木君の問題から手を退く――どうか、ねえ、令嬢、僕を失望させずに下さい。僕の友誼を無視していで下さい――』

德惠子は煩はしくなつた。

――これが男性に通有する他の型だ。色か慾か、その二番目の型だ――。

うるさくなつて、彼女はいつた。

『では、さつきのお話の報酬といふのは、どうしたらいゝのでせう？　私は別にあなたにさういふ報酬

を拂ふ義務はないと思ふけど、一應内容を承はりたうございますわ』

『義務、權利の公けの問題は、まづ高閣に束ねやうではないですか。しかしですな――あなたは僕に今夜かうしてつかまつてしまつた――いはゞ、この賭博常習の祕密カフエの一室に監禁されてしまつた。僕はあなたを見つけ次第手ひどい事をしようとする青木と親交ある同盟者だ。電話をかければ彼はすぐ現はれる。彼の仲間には、どんなことでもしかねない連中が揃つてゐる――ね、そこを考へて下さると、さうした密室から無事に――まづ、名譽とか、操とか、美とか、さうしたあなたの財産の何一つに疵をつけずに出られるといふ點だけに對しても、五千や三千の黄金は、決して高すぎるとは思はれないですがね？　え？　どうです？』

徳惠子は唇をかんで、ぢつと見返した。

『何しろ、このカフエと來ては、どんな惡事が行はれても、外部に洩れたことのない不思議な家ですからな』と、今野は紙卷の煙をまつすぐに吹いた。

『それにもう一歩進めていへば――』と、今野は又話をもとに戻した。

『單に今晩あなたを見遁すといふだけの報酬として、それがあまりに高すぎるとお考へになるとすれば、僕の方でも多少の景物をつけて上げてもいゝのです。たとへばあなたの一生につきまとつて、絶えず脅迫がましいことを企てようとする蝮か狼のやうな人間がゐて、それがあなたにうるさくつてならぬやうなら、それをわれ〳〵の手で處理して上げてもいゝ――なあに、人間一匹を無活動の狀態にする位なことは、何でもないですよ。何もそやつを殺して退けずともね。まあ、ちよいと、後頭部に小さい打擊を與へたゞけでも、白痴にはなるのですからな――また暴力がお氣に召さずば、ちよいと二三年暗い檻の中に入てやるやうにしてもいゝ。蝮や狼はすべて自分の毒で何ものかを傷つけてゐます。齒を使はずにゐることは彼等には出來ないのだから――村正の刀を持つた浪人者のやうにね――だからみんな暗い殘忍な過去がある。われ〳〵はそれを、ちよいと官憲に密告すればそれだけで十分なのです。官憲といふものは始終退屈してゐるです。民衆がこぞつて惡事をしたところで、牢屋は決して狹すぎて來はしない。牢屋といふものは胃擴張になつた角力取の胃の腑の如きものだ。あとから〳〵罪人を呑みたがつてゐる。一つの惡事をする奴は百の古い惡事を持つ――ほんの一端を二三行の文章に認めて送れば十分です。牢屋の無數の手足は、貪慾な鉤爪を伸べて、惡事から惡事をたぐり出します。で、まあ、例へば青木君のやうな溫良な惡黨にしてからが、僕の一片の密告書で、五年位牢屋の中に呻吟することになるだらうと思ふ――また、それを彼も悲しみはすまい。隨分覺悟のいゝ人だからね――どうです？　こんな風な景物を、何かつけて上げますが、いかゞですか……』

徳惠子は相手の話から耳をふさがうとして、急いで口をはさんだ。

『私はなにも他人を牢屋に入れたり白痴にしたりしたくはありませんわ。私は早くこゝを出して戴きたいだけですの――でも、御要求になるやうな、三千の五千のといふ大金は私にはもうないのです。それ

どころか二百圓と纏つたものさへ――」

徳惠子はさう答へながらも、ふと自分の差し迫つた窮迫を思ひ出して、不安な、厭な氣持になつた。

『ふん。なる程、あなたは青木君の話では大分大金を長沼さんから持ち出したといふことだが、もうそんなに使つてしまはれたのですか――何といふ濫費だらう？　濫費はいけません。濫費は罪惡だ！』

と、今野は尤もらしい、教へるやうな調子でいつて、吐息をして、

『全く、あなたは無駄使ひばかりなさる側の人だ――しかもそれも性格だから仕方もない。だが、あなたはまだ〳〵十分僕に支拂ふことが出來ますよ。日用品の時計をおはづしになるにも及ばない。もつと不用なものでも、自由をおあがなひになることが出來ます――安いものですよ、あなたはまるで贅澤品であるところの、餘分な、つまらないものを僕にお與へになるだけで、青木君からも、從つて僕からも自由になれるのだ。まあ、僕がつまらない癇癪を起してこゝの女給に青木君のところへ電話をかけるなり、使を出すなりするやうに命令したとして御覽なさい。あの男はすぐに飛んで來る。その結果、どんなことになりますか？もう彼はこれまでのやうな生ぬるい態度ではあなたに對しませんよ。餓狼は一度牙を見せてしまへば、もう餌食の羊に對して體裁を作りはしない。今度は恐ろしい白牙をグサリと美しい肌に立てます。そして、一度毒牙にかゝつたらあなたの全身にもあの人の毒がまはり――もう遁れられない。恐ろしいことだ！　その恐るべきことから、あなたはいくらでも遁れられるのに、悧巧におやりなさらないとしたら詰らんぢやないですか？』

今野はこんなことを並べながら毒々しい、白光りのする細い目で、ぢつと徳惠子の手を見てゐた。手袋をはづしてテーブルの上にちよいと載せられてゐる彼女の右手の中指には、たつた一つの、大きな、素晴しい珠玉が――新東京社で寶玉通の杉戸を好奇心で苦しめたあのダイヤモンドが輝いてゐるのであつた。

全く見込んだら遁さぬ毒蛇の目だつた――今野は他事をいひながら、一瞬もそのギラ〳〵する白眼を徳惠子の指から放さなかつた。が、白い美しい指はそれを知らない。無心にテーブルの上にやんはりと佇つてゐる。そして中指のダイヤモンドは鈍い、赤茶けた十燭の光りをうけてゐるだけにも拘らず、時時七彩の虹を長く煌かしくあたりに投げるのだつた。

『あなたは墮ちはしませんよ。あなたはいつまでも依然として富豪の娘で、依然としてブルジョアだ――あなたは今夜、この場でも素晴しい分限だ、あなたが僕を喜ばせてくれようとさへすれば、何の手間ひま入らずに有頂天にさせ、永久に僕をあなたの奴隷にすることが出來るのです――お分りになりませんか？』

――徳惠子はこの氣違ひじみた眼付の惡黨が、何を考へてゐるかはつきりと知らなかつた。彼は操をも美をも、白い肌をも望んではゐないと自分でいつた。望むのは物質的なものだけだといつた。しかし、自分には何ももうさうした背景はない、財力はない――一刻も早くこの野獣の前から遁れたいが、それ

にはどうしたらいゝのであらう？　もう一分もこんな場所にゐるのはいやだ！　光りは鈍り、濕氣は頭を仰さへ、一種の惡臭が、まるで狼の檻にでもゐるやうにあたりに流れてゐる――とても辛抱は出來ない――。

『おやあ、どうしたらいゝと仰しやるの？』と、彼女はいつて、ちよつと今野を見た。

が――その瞬間、彼女はテーブルに載せた白い、やさしい手の指に、何ともいへぬ痛さを感じてあわてゝ膝の上に落した。彼女は初めて毒々しい白眼が、自分の中指に食ひ入るやうに、注がれてゐるのに氣がついたのである――。

『あなたは、あなたの富の一部分を、僕にわければよろしい』と、かつきりと今野はいつて、艶の惡い唇だけで笑つた。すると、どす青い兩方の口ばたに醜い筋が深く太く這入るのだつた――下顎がすべて獸になつた。

――この男は、ダイヤモンドを見てゐたのだ！。

徳惠子ははじめて自分の指に今でもかなりな財産がついてゐたことを思ひ出した。隨分貧乏なれはして來たが、それでも上流階級に何不自由なく、否、贅澤の限りをつくして人となつて來た彼女は指のダイヤモンドに物質的價値がどれだけあるか――それを賣り拂へばどれだけの大きな金が手に這入るかといふやうなことをば思つても見たことがなかつた。裝飾は裝飾だけの役目を持つにすぎないものとしか考へてゐなかつた。

だが、彼女は今はすつかり思ひ當つた。

彼女は左の指で、右手の珠玉をやさしくもてあそんで見た。愛撫しなれた珠玉であつた。珠玉は彼女の指に手さぐられることを喜び、指は珠玉を撫でさすることをいつも喜んでゐた――が、彼女は、別に大した愛着を持つてゐるとは見えなかつた。それどころか、今、不思議な發作的感情が長らく大事にしたこの指輪を、呪はしくさへ思はせたのである――。

――こんなものを身につけてゐればこそいつまでも〳〵、こんな獸どもがつきまとふのだ。獸どもはたゞ私の身についた物質をねらつてゐるのだ――それといふのも私が、父母の家を捨てながら、こんな下らない物質をすべて捨てることが出來ずに、自分と一緒に持つて出たからなのだわ。いゝわ、いゝ機會だわ――この指輪さへ拔いてしまへばもう何も後ぐされは殘らない――。

『あなたは、指輪のことをいつておゐでなんでせう？』

落着いた、迫らぬ聲でいつて、彼女はもう膝の上で指輪から裝飾品を拔きとりかけてゐた。

『いや、あながち指輪には限らぬが――』と、今野の方が、さすがにいくらかあわてたやうにいつた――

『しかし、あなたのダイヤモンドは莫大な代物で』

徳惠子は、さもきたならしいものをでも扱ふやうに、指輪をテーブルの上に投げ出した。ダイヤモンドは、くすしい光耀をみなぎらしながら卓上をころがつて、今野の汚れた手のところで止つた。

今野は狼狽してそれを獲がれた指でつかんだ。

德惠子は誇りやかに突つ立つた。

今野は世にも貴重な、素晴しい珠玉を、骨立つた、關節にあらい毛の生えてゐる手でつかんで、いひ知れぬ歡喜に戰慄しながら、喘くやうに叫ぶのだつた。

『あつ、ぢやあ、僕の願みを容れてこの指輪を下さるのですね！　さすが、あなたは物惜しみなさらぬ——あなたは物質を蔑視する力を持つてゐらつしやる！　全く物惜しみはいやしいことだが、誰でも惜しまずにはゐられないのに——あなたは全く獨得な性格を持つた方だ！』

德惠子は五月蠅げに眉をしかめて、指輪のなくなつた手で、相手を默らせようとするやうな手付をした。

『ぢやあ、もう何も御用はないのでせう、私は自由でゐたいのです。私はすべて過去に煩はされたくないのです。だから、ほしいものを差し上げた以上、もう私のことに一切口を入れて下さいますな——道で逢つても聲をかけても下さいますな。取引はこれで濟みました』

『えゝ、すつかり濟みました』

今野は掌の上のダイヤモンドを禿鷹のそれのやうな目でみつめながら、呟いた。

德惠子はぐるりと背を向けて、扉の方へ歩いた。そして戸を開けて出て行つてしまつたが、今野はばたりと音を立てゝしまふまでは、彼女の立ち去るにも氣付かなかつた。

『あ』と、彼は相手がゐなくなつたのを知つて、口の中で叫んだが、さう感に堪へたやうに獨語ちつゞけた。

『全く、あの娘は獨得な性格だ！　あれが男だつたら、どんな途方もない人間になるかなあ——僕アあんなに輕蔑した目で見られたことは一度もないよ——あの女はまるで一匹の獸を眺めるやうに僕を眺めてゐた。だが——』と、彼は世にも賤しげににやりと笑つた。

『だが、何と輕蔑されたところで、僕は成功したんだ。欲望したものを手にする事が出來たのだからこれが勝利でなくつて何だ。人間は、注意力を常に緊張せしめてゐねばならん——僕はあの薄暗い夕方の街で、風俗の變つてゐるあの女を一目で見付けたんだ。そしてこの驚くべき勝利を、收穫を得たんだ。は、は、ブルジョアの、いはゆる誇りに充ちた女性といふ奴も、案外話せるものだて——どうだい、この光りは——この輝きは——窩主買ひの吉野のおやぢの店に持つて行つたところで、五千兩はたしかなもんだ——僕が祕密探偵社に籍を置いてゐるのもこんな時には有利さ。だしぬけに知らない店に持ち込んだところで、信用して取り引きをしてはくれまい。吉野の奴は慾張りだから、今朝まで死人の指にはまつてゐた品を墓穴から掘り出したと、みす〳〵知つてゐても安くさへあれば買ふのだ——ふん、ところでどんなもんだ？　青木君、君は一ぱし惡黨がつてゐるが、折角あの女をあの富豪の家から連れ出しながら、結局どれだけの得をしたね？　お小遣ひを少しばかりセシめた外は、あの美しい身體を自由にすることさへ出來なかつたではないか！　馬鹿め！　低能め！僕を見ろ——この腕前を見ろ！　何と素

晴しい辣腕ぢやないか。たつた二十分か三十分の談判で、こんな大收穫だ。どんな有名な代言人だつて、狀師だつて、こんなに有效に言葉を使つたものがあるかい？　ふん全く驚嘆すべき手腕だ――もう、あんな安つぽい探偵社なんぞにウロついてゐやせんぞ――僕はもう君達の仲間なんぞへは歸らんぞ。立派なブルジョアめかしい服裝をして、第一流の會社が新聞社に入るんだ。ヴラヴオー！　僕の夜は明けた！』

――饒舌に、止め度もなく、今野は自ら譽め、自ら慶祝しつゞけてゐた。

やがて、彼は鈴を押して女給を呼んだ。そしていくら入つてゐるか、古びた革錢入を投げ出した。

『これにあるだけの酒を、みんな飲ましてくれ。どんな高いウヰスキイでも、クラレットでも、カクテルでも持つて來い、今夜からいつもの今野ぢやあないんだぞ。おやぢにも來て飲めといへ！　僕の知つた奴が酒場に來てゐたらみんな招集して來い。酒だ！　萬歳！』

――德惠子は彼女に殘つてゐた最大財産の指輪を失つたが、それから三日程してやつとさがしてゐた新しい職業を見付けることが出來た。

ある朝、アパアトメントの未亡人事務員はいつてくれたのだつた。

『東さん、これならあなたに丁度いゝ口だと思つたので、食堂の求人揭示に張り出さずに、わざと內密にして置いたのですよ。訪ねてごらんなさい』

さういつて、未亡人は、青白い細長い指で黑い紙挾みをあげて、一枚の書付を取り出して渡した。書付で見ると、それは依田といふ中流富豪が、自分の浮き沈みの多い生涯を自傳して置きたいために、一二の傳記學者にその仕事をゆだねてあるのだが、その原本として、自ら口授して草稿を作つてゐる――ところが最近までその方に使つてゐた女書記が急に病氣になつたので、後任者がほしいといふのだつた。俸給は百圓。特にその仕事のために設けてある、彼が持つてゐる依田ビルディングの四階の一室の事務所で、毎日午後五時から六時半までの一時間半を勞働すればいゝといふのだつた。

全く恰好な仕事だつた。

だが、德惠子はちよいと考へ込んだ。依田といふ老人は、父親とも幾分交際があつて、一二度訪ねて來たこともあるのを知つてゐる。ことによつて、どこかで顏を合せたことはなかつたらうか？しかし、名告り合つた記憶はなかつた。彼女の方こそ、ぼんやり見覺えてゐるものゝ、先方では恐らく全く見知つてはゐまい。

萬一、感付かれかければすぐに退却するまでのことだ――

『有難う。ほんたうに結構な仕事ですわ。早速伺つて見ませう』

――その夕方指定された時刻に、彼女は丸の內のビルディングに出かけた。昇降機のボーイに訊くとすぐに部屋は分つた。

扉を叩くと、三十がらみの背廣の青年が出て來た。大きなテーブルが据ゑられて、二人の洋服男が俯

むいて何やら書きものをしてゐたが、彼女が這入つてゆくと、一度に顔を上げて、すぐにまた仕事の方へかゞみ込んだ。

徳惠子を導いた青年は、次の部屋の扉の外に彼女を待たせて、自分だけ中へ這入つたが、やがて出て來た。

『お這入りなさい。お目にかゝるさうです』

徳惠子は部屋に這入つた。扉はうしろで閉ざされた。

葉卷の煙と香ひとが、甘つたるい刺戟で漂つてゐる、小さな、贅澤な部屋の、大層大きな革張りの肱椅子に、だぶ〳〵に肥つた、肉袋のやうな老人が、赤らんだ鼻をいからせるやうにして、象のやうな、だが、キラ〳〵しく光る眼付で坐つてゐた。

徳惠子も相手を眺めた。成程、十年も以前に、何かの拍子で見た依田に相違ない。たゞ、ひどく年を取つて、醜くなり、肉厚になり無作法になつたまでだ――。

相手が默つたまゝでゐるので徳惠子ははじめた。

『私は本郷のアパートメントの千匹の奥さんの紹介で伺つた、東と申すものでございますが――』

『はい〳〵。分りました』と、老實業家は、まるで腰のひくい一商人のやうな口調でいつて象のやうな目尻で笑つた。

『はい〳〵。丁度よろしい。缺員はまだ補充されない。丁度よい――いや、履歴も何もいらんわい。ただ親身になつて仕事をしてくれゝばなあ――うん、怜悧らしい娘子ぢや。わしは怜悧な、物分りのいゝ娘が大好きぢやよ。さあそこへお掛け、立つてをらんでもよろしい。うん、まるで貴族の令嬢のやうな娘子ぢや』

老人は少しも見覺えてゐないに相違なかつた。

徳惠子は老人の聲音に、何となく下品な、淫なひゞきがあるやうに感じたが、何分、先方がもう七十に手が屆きさうな年配なので、これまでの男たちのやうな態度を示す筈がないと考へて安心するのだつた。

彼女は椅子にかけた。

依田老人は不思議な體力と精力とを持つてゐる人間に相違なかつた。もう七十だといふのにだぶ〳〵に肉づいた顔には氣味惡いまでに油が乘り、太い頸は低いカラアにくびられて、胴のあたりはみにくい增のやうに見えた。その癖かうした體質の老人に見るやうな鈍重なところはなく、厚い瞼の下で、象のやうな目が絶えず鋭く働き、薄い唇の陰には一本も缺けない、細かい白齒がきらめいてゐた。頭髮だけは大よそ禿げ落ちてしまつたが、とはいへ、後頭部に殘つた毛は、黑い艶を十分に保つてゐた。

老人は、徳惠子を椅子に坐らせると、ねばつこい、併しさう齒切れの惡くない調子で話した――。

『わしが多少經濟的な扶助を與へてゐるあのアパートメントの當事者からも、もう聞てゐられるだらう

が、わしは隨分激しい浮き沈みを持つた男ぢや。わしは文なしから、まあ可なりに成功した。で死ねば誰かゞ傳記を書いてくれるぢやらう――わしは、同郷の學生どもを澤山養つて來たで、そいらがわしのために頌德表を書くぢやらうし、またそこらの物書き渡世の人間に、一萬圓もやつたら、うまい具合に出世錄を作つてくれるぢやらう――しかし、そいではあり來りすぎるで、少しは實業方面のわしの過去を、一つ十分で書きのこして置きたいと思ふのぢや。なあ、かうして、七十年を職つて生きて來るまでには、嬉しいこと、感謝すべきことも多いが、憎むべきもの、呪ふべきものをもどんなに澤山見て來たこつちやらう。ぢやで、わしはそいつに、最後の復讐をせんにやならん――無遠慮に同業者の惡德を書かにやならん――そいで、わしの仕事を助けてくれる以上は、わしが生きてゐる間は、この記錄の内容について絶對に祕密を守つてもらひたい。この意味で、あんたはわしのために、たゞペンとなり鉛筆となるだけで滿足してもらはにやならん――よろしいか？』

德惠子は、老人の言葉を面白いことに思つた。この無限の精力を蓄へてゐるやうに見える老實業家は、その瞋恚を、呪詛を、憎惡を生きてゐる中だけ抱きつゞけるのに滿足せずに、永遠に書物の上で怒り、呪ひ、憎みつゞけてゐたいのだ――生きてゐる中より、より以上露骨に、惡どい形式で表現したいのだ――。

『わしは、もう、あまり長く生きんかも知れん。九十まで生きたとしても二十何年しかさきがないぢや。それに、現代の醫術は老衰を防いでくれる力がない――そいで、頭が割合はつきりしてゐる間に、

もう一遍若いころからの自分を、心の中で生き直して見ようとしとる』

德惠子はうなづいた。彼女は實生活の荒波に飛び込んでから出逢つた人達の中で、兎に角一ばん人間的な氣持をこの老人に見たのであつた。この老人となら多少の興味を以て仕事を助けることも出來るやうに思はれた。

『このわしの氣持を了解しといてもらはんと、何かと不都合が起ると思ふ――仕事は面白くはないだらうが、一日一時間半ぢや。あんたはたゞわしの談話を筆記してくれゝばいゝ。その草稿を編輯員たちが適當に處理してくれることになつてゐるから――』と、老人は附け足した。

德惠子は出來るだけ老人に安心があたへたかつた。

『私、かうしたお仕事の經驗はちつともございません。でも、ひと樣が出來ることなら、一生懸命につたら、私にも出來ようかと思ひます』

『うん、それでよろしい。他人に出來ることは自分にも出來ると信じるのはいゝことぢや。そこで、あんたは、何かな――御兩親をお持ちかな？』と、ひどく突然、依田は訊ねた。

德惠子ははつとしたが、さらぬげに答へた。

『いえ、兩親共もうございませんので――』

『なる程、そいで自活もされねばならん――うむ、まあ、働いて下さい。わしにはあんたに兩親がないやうに子がないのぢや。しかし、いそがしい生活は淋しさを消してくれるでなあ』

狐狼相咬む

——だん〳〵貧窮に迫られて來た德惠子が、依田老人の仕事を得てどうやら安住の境に棲みつくことが出來たやうに見えた頃、彼女に對してこれまで絶えず追跡の鼻をいからせ、白牙をといでゐた人々の間には、奇怪な、醜猥な爭鬪がはじまらねばならぬ狀態が來た——。

——あの晩、德惠子の指からうま〳〵とダイヤモンドをせしめた今野は、その深更、べろ〳〵に泥醉して下宿に歸つて來たが、翌日、朝寢の床から藻繰出すと、そのまゝ外出した切り、二日經つても三日經つても姿を見せなかつた。下宿では月變りのことで、宿料も大抵もらつてしまつたばかりだから、格別彼の不在を氣にかけはしなかつたけれども、間近な大西探偵事務所では、相當に迷惑してゐた。人間は信用の出來ぬ方でも、なか〳〵敏腕で、かなり大な仕事を委託してもあつたし、事務の引繼もせずに退社する程無責任とも思はれないので、彼の失踪を多少重大視せざるを得なかつた。若しや何か探偵事務の關係で、敵方の暴漢のために暴行を受けたのではあるまいか？　大酒家のことだから、不意に肉體的な衝擊をうけたのではあるまいか？

が、事務所では、社員の失踪といふやうなことを公けに問題にして、搜索願ひをその筋に出すやうなことは、商賣柄出來なかつた。それは同時に內輪の何等かの恥、暗さ、汚なさなぞを白日の下にあばくことになるのであつた。

——何か仕事の都合で地方出張でもしたものだらう——あの鋭い男だから、突然大きな獲ものをつかんで來て、われ〳〵の鼻をあかせようとしてゐるのだらう？　どうしてなか〳〵どんな相手にも負け色を見せる人間ぢやあない。大丈夫、そのうちにあの痩せつぽちな身體をまた事務所に見せるに違ひない——。

こんなのが幹部の意見だつた。四五日しても、なほ出社しなかつたが、そこは忙しい渡世のことで、もう、いつとなく今野の在否は問題にされなくなつてしまつた。彼が殘して行つた仕事は、これまで助手をしてゐた青年が引受けた。大抵の仕事は、お代りで濟むものだから、それでもさして障害は感じなかつたのである。

——ところが、ある日のこと、探偵事務所の受附に、今野その人をたづねて來た一人の男があつたが、それはこゝの人達と、今野を通じて友達付き合ひをしてゐる、あの青木だつた。

今野が德惠子に話した通り、このごろ萬事思ふ樣に行かなくなつて、神經ばかり苛立たせてゐるらしい青木は、受附の背廣服から友人の消失を聞くと、疑はしげな眼付で呟いた——。

『全く妙だね——下宿でももう一週間も歸らないといつてゐたが、僕は社用で旅行でもしてゐるのかと思つてゐた——兎に角、所長にお目にかゝらう』

青木は案內を求めもせずに、づか〳〵と上り込んで、ステツキのさきで事務室の扉を突きあけた。以前理髮屋や齒醫者でも住んでゐたらしい部屋の樺色のリノリウムは、ちりほこりに白くまみれ、壁は龜

裂や染で見るかげもなくあれすさんでゐたが、それでも四五人の所員たちは、うづたかく書類を積んだデスクに向つて、いそがしげに働いてゐた。

突き當りのデスクに、大西所長は坐つてゐた。何か大きな問題を處理しようとしてゞもゐるらしく、兩腕を胸に組んで、ぢつと一點を注視したまゝ、歩み近づいた青木にも氣がつかない風であつた。

『所長しばらく――』

大西は落ちくぼんだ穴の底で、ぎらりと光る目をはじめて青木に移した。

『やあ――』

當然、二人の話は今野の上にすぐに落ちて行つた。

『わしも弱つとるんだ。何分、今ひどくいそがしいんでね。是非あの男の執念ぶかさを利用せんけりやならんこともあるのだが――皆目見當もつかんのだから弱つてしまふ』

『どこか外の事務所に有利な條件で住み込んだのぢやないでせうか？』

『それならそれで、何も無斷で逃げかくれする必要はないんだからな。若し又何か忌諱に觸れたのなら、第一にわしの耳に入らねばならん、不思議な話さ』と、所長もぼんやり青木を眺めていふだけだつた。

すると、そんな事を話し合つてゐるところへ、事務机の上の卓上電話がヂリ〳〵と鳴り出したが、近

間の所員が何氣なく受話器を耳にあてゝ、二こと三ことといつたと思ふと、

『ちよつと待つてくれ給へ』と、相手を抑へて置いて、所長と青木との方を振り向いて、さも興味ありげにいひ出したのだつた。

『所長――妙なことがありますよ』

『妙なこと？』と、大西はいぶかしげな眼付をした。

『全く妙なことです――例の窩主買ひの吉野のおやぢから電話なんです。今野君はゐるかつて――』

『ほう？　で？』と、青木がたづねた。

『何でも、一週間ばかり前あの人が來て、何か品物を賣りつけたらしいのです。それで後金を今日支拂ふことになつてゐるが、少し齟齬は都合が悪いから、夜分に來てくれと、かうあの人に傳言してくれといふんですよ』

『はてねえ？』と、青木は首をかしげたが、何と思つたか、ツカ〳〵とその方へ近づいて、

『僕にその電話を聞かせ給へ』

所員は受話器を青木に渡した。青木は相手に今野の失踪については何もいはずに、急用が出來てすぐ彼に逢ひたいのだが、今日何時ごろ店をたづねる筈になつてゐるかと聞いた。吉野老人は何の懸念もなく、すぐに返事をしたやうに見えた――

青木は電話を卓上に置くと、所長にいつた。

『午後四時半に吉野の店にあの人は來ることになつてゐるのださうです。かなりの品物で、是非その時間までに殘金の受け渡しをすることになつてゐたといふから、必ず先生やつて來るでせう――どんな風だか、僕がひとつ行つて見ます』

『ふん、それもよからう――あの男も、それなら東京にゐるのだらうが、どうしてまただんまりで自社を仕んでゐるのかねえ？　それにしても、その賣りものといふのは何だらう？』

『さあ』と、青木も見當がつかないらしかつた。

所長も、青木も默り込んだ。いづれにせよ、その賣りものなるものと、今野の失踪との間に、何等かの暗い關係があるのは、熟考するまでもなく分るのだつた。

青木はパイプの紙卷が灰になつてしまふと、ふと、壁の時計をながめた。

『おや、もう四時だ、ぢやあ、所長、これから吉野へ乘り込んで見ませう』

『どうぞ。そして引つつかまへて、少しいぢめつけてくれ給へ。わしへも、懇意な君へも默つて姿を消すなんざあ、あんまり人情がなさすぎる』

『ようござんす』

青木は鼠色のソフトを取り上げて、事務室を出て行つた。

吉野の店は神田神保町の裏通にあつた。背低な、みじめなバラックで、質物渡世、古金銀賣買の看板を出してゐたが、正當な客との取引は少なく、重に窩主稼業をしてゐるのだつた。暖簾を分け、格子戸

を引きあけて、小さな、せゝこましい店の土間に立つた青木はわざと、機嫌よく主人に笑ひかけた。

『やあ、いつもながら勉强だねえ』

主人は帳場格子の中で、机の上に金時計を二つ三つ並べて、金側をなめし皮でゴシ〳〵磨いてゐた。眞黃色な皺ばんだ顏が上つた。

『いや、もうみんな流れが多うがしてな、何分この不景氣なもので――』

青木は今野の紹介で、二三度この店に來たことがあつた。賭博で手に入れた指輪や、時計なぞを、この老人は外のなみの家よりも高く買つた。つまり、今野の渡世が渡世なので、餘分な愛嬌値をつけるのだつた。さもないとむつかしくせずともよい場合でも六かしくなつて、たつた五圓の贓品のために、何度も何度も警察まで呼び出されるやうな目にあはないとも限らなかつたから――。

『で、何かお賣り拂ひになるものでも？』と黃ばんだ老人はいつた。

『今も申す不景氣で仕方がありませんが、しかし出來るだけはお買ひしますよ』

窩主買ひの老人のお世辭を聞き流すやうにして、青木はちよつと腕時計と帳場臺の上の柱時計とを見くらべたが、

『いや、今日はさういふ用事で來たんぢやあないのだよ。實はね、今野から、今日の四時半にお店に來るから、それまでにこゝを訪ねれば逢へるといふ知らせをもらつてゐたので、少し急用で打ち合せたい

ことがあるものだからやつて來たのさ』

吉野老人は黄ばんだ顔をしかめさせた。

『その事、その事』と、彼は呟くやうにいつて、濁い眼付をした。

『あの方と、四時半にお目にかゝるお約束を、いかにもしてしまつたのですよ。それは事實です。ところがね、用事がうまくはかどらないので、折角今野さんがいらしつても、御相談をすつかりまとめるわけに行かんので、またあの方から嚇かされなければやあならんと、びくついてゐるんですよ。あの方に電話を掛けて、あらかじめお斷りしようとしても居所が分りませんので――』

青木は鋭い目を、吉野老人に投げた。

『何でも大分大した代物の取引きらしいぢやあないか。今野がさういつてゐた――』

『へえ、今度のはちと大物で――今野さんから絶對秘密といふ命令をうけてゐるから申し上げられませんが、まあ、私の店がはじまつてから、はじめて手がけた程の代物でさあ――早速ある筋に買手が見つかつたので、後金を今日差し上げることになつてゐたのですが、買手の方で金の受け渡しを今晩の七時にしてくれといつて參つたので、それで弱つてゐるんですよ』と、吉野は説明した。

青木は何氣なさゝうな口調で、

『それにしても、今野の奴、なにかうまい儲け口を見つけたと見えるなあ――よつぽどの大物かい？』

『へえ、まあ、時節がよければ一萬圓以上の品ものですがね――』

吉野老人はさういつて、青木を眺めて、

『あなたと今野さんの間ですが、あの方もなか〳〵素晴しい腕ですぜ。どこかの奥さまか令嬢の内密ごとでも見つけて、口止めにでも貰つたものらしいんだが、そりやあとても大した獲ものなんです。丁度アメリカ人でいゝ出ものゝ指輪があつたら見せてくれといふ人があつたので、早速右から左に取引きが出來たのですが――』

青木は眉を寄せ合せるやうにした。冷たい目がちかりと光つた。

『何？　指輪？　一萬圓以上の――』と、彼は口の中で呟いたが、

『ふん、さうかい――それにしてもあの男もひどい奴だ。そんなうまい儲け口があるのに、僕にひと言も話しもしないなんて――よし、うんと奢らしてやらう。だが、君だつて大分たんまり儲けたらう――君の方でも僕に何とかするがいゝや』

『冗談ぢやありませんぜ、私の商ひなんざあかたいもんでさあ。まあ二割以上の利益なんぞをしめようつて大それた氣はないからね。その癖、時によれば日歩五拾錢の金だつて使ふんです。それならなぜ儲かりもせん商賣をやつてゐるかとなりやあ、生れついて貴金屬や寶玉が好きで、一日でもそれをいぢつてゐなければ我慢が出來ないからでさあ、さりとて自分で盗んだりゆすつたりして歩く程の勇氣はなし、仕方なしにこの渡世をしてゐるわけですよ』

吉野老人は机の上の貴金屬に、またなめし皮をあてはじめた。

『ふん、まあ、いゝや。その中僕だつて今野が持つて來たといふ奴より、二倍も立派な指輪を手に入れるかも知れんから、まあ、人の仕合せを羨むことはやめにしようよ』と、青木はわざとらしい快活さでいつて、

『で、その指輪は、一たいどんなのだね？　途方もなく珍奇な大ルビイか、エメロードでもあるのかい？　美しいジヤミでもあるのかい？　それとも大きなダイヤかね？』

『それがさ』と、吉野老人は誇りかに目を輝かして、

『それがさ、銀座の大通のどんな大店でも、二つとは手がけてゐない程のダイヤモンドなんでさあ——切り方の技巧といひ、プラチナの細工といひ、まあ、五つとあんな珠玉が日本にあるとは、私にも思はれません代物さ』

窩主買ひの老人は誇りつゞけてゐた。

『全く素晴らしい珠玉ですよ。あれだけの珠玉のためなら一年や半年牢屋へ行つても惜しくはない位のものさ。今野さんはどこまでも出どころを祕密にしてゐたが、恐らくあの人がモノしたものぢやないでせう。金に詰つた令夫人か令孃から、祕密に賣つてくれとたのまれたものか、それとも若し何かすごい場面を打つてせしめたものなら、あの人もいつの間にか大したえら者になつたものさね』

青木は底光りのする目を伏せて自分の靴の爪先をみつめるやうにしながら考へ込んでゐた。あの今野

のまはりにそれ程の寶玉をもつた人間がゐるだらうか？　あの男にもそれ程の寶玉を盗んだり脅迫して手に入れたりする勇氣があるだらうか？

——あの男はあの女の寶玉を、いつぞやあんなに讃めてゐた——もしや——

青木は主人の言葉に合槌を打つことも忘れてぢつと唇を嚙みしめてゐた。だが、あの女の踪跡が解つたとしたら、當然自分に知らせて來る筈だ——いかにあの男でもこれまでのよしみを忘れる筈はない——。

彼はいひかけた——

『をぢさん、その途方もない珠玉を、僕もどうかして見たかつたなあ』

『えゝ、是非ごらんに入れたかつたですよ。ところがその珠玉はもう異人の手に移つてしまつてゐるんです。私の資力では買つて寢かして置くわけに行かないのでね、私としてもみす〳〵すぐに人手にわたすのは殘念で、どうにかして半年か一年持ちこたへてゐれば、そのうちに倍も儲けて賣ることも出來たのだが——何しろ、貧乏は不自由なもんさね』

『惜しいことをした——その珠玉さへ見れば——』と、青木は呟きかけたが、その時、突然バラツクの入口の戸が手荒く引きあけられて、一人の洋服男が飛び込んで來た。

山高帽にモオニング・コオト、襟に小さい珠玉をきらめかして、蛇木のステツキを持つた立派な紳士だつたが、それはつい先だつてまで、褪せ果てた背廣によれ〳〵のネクタイをしてゐた今野の變身だ

つた。

青木も主人も、彼と見分けた。しかし相手はまぶしげな目を新しい手袋をした手でこすつてゐた。

『眞光りの外から來ると、この店の中は何一つ見えやせんぜ――いかにあらゆる祕密の買ひ込みどころでも、こいつぁあんまり暗すぎるよ』

『今野君』と、青木はめかし立てた今野を、苦々しげな微笑の目でぢつと見据ゑて呼びかけた。

だしぬけに呼びかけられて、今野はぎよつとしたやうに見返した。瞳がクル〳〵と廻つた。

『やあ、青木君』

青木は相手の態度から、現況のすべてを讀み取らうとするやうに、まじろぎもせず眺めつゞけた。

『一體どうしたわけなんだね。大西の事務所では敏腕な君が突然姿を消したので、ひどく大間誤付きなんだ、僕だつて隨分心配したぜ――』

『まあ、そんなにきめつけるなよ。君にはゆつくり話したいことがあるんだ。どうせ今日にも訪ねようと思つてゐたのさ』

今野は何氣なくさういつたが、全體にあらゆる周章があり〳〵と現れて隠せなかつた。

『それにしても、一週間も何をして暮してゐたんだい？』と、青木は見上げ見下すやうにした。

今野はいくらか陣立を立て直して來た。一種得意の色が、艶の悪い唇に浮かんだ。

『は、は、僕は多少客らにやならんかも知れん――僕は今すこぶる成功的なんだぜ。あの貴婦人が――

そりや大した尤物なんだが僕に戀したんだ――で、僕の生活を改良してやりたいといふわけでね――全く、貴婦人の戀人になつて見れば、大西探偵事務所の所員でもあるまいからな――は、は、は――いや、もつと詳しく話したいよ。今はいそぐが、今夜でもね――』

その時、今まで默つてゐた吉野老人が、帳場格子の中から聲をかけた。

『今野さん、つい今しがた、探偵事務所の方へ電話で申し上げたのですが、例の取引ですなあ――あれの後金は午後七時ごろにして戴きたいのですがね、何しろ異人さんが横濱の方へ商用で出向いてゐるので、夕方にならんと歸らないのです――御迷惑でもその時刻にもう一度いらしつて下さい。殘りの三千圓は、その時きつと現金でお渡しゝますよ』

今野は迷惑さうに眉をしかめたが、青木の耳にこまかしいことが入るのを恐れる一方では、大取引がのびるのを不安に思はずにはゐられなくなつて、いつもの棘々しげな目で主人を見た。

『ふん――それぢやあ大分違約になるではないか。午後四時半には確實に君の手から現金が入るわけになつてゐたのだが――僕も自分の持ものではなし、ほんの仲介に立つたまでだから、今日中にどうしても先方に代金を渡さんと困るのだよ。先方も金が入用なればこそ、あれだけの寶玉を手ばなす決心をしてゐるのだからなあ――それに僕としても、一刻も早くけりをつけて、口錢にありつかなけりやあ詰らないんだ』

『それは分つてゐますよ。私だつて出鱈目の約束をしたわけではないんですが、手元にお立替するだけの大金がないものだから――何分このごろと來ては、入質はふんだんだが、質受をしに來るやうな人はすこしもないので、全く逼迫してゐるものですからね。そのかはり、夕景七時までに異人さんが渡してくれなければ、今度こそ私が必ずどこからでも都合してお納めしますよ』

『そんなら、仕方がないから待つとするが、君だつて少くも二千兩やそこらの儲けは見てゐるのだらう――吝々せずに、どうせ入るあてのある金だから、今立て替へて置いたら、よさゝうなものだがなあ。しかし、仕方がない――億劫だが夕方の七時に、もう一度訪ねるから、その節殘金全部をすつかりくれなければ困るぜ、全く、こんなことで手間暇をいつまでも缺いてゐるわけにやあいかんのだ』と、今野は不機嫌に呟いた。

吉野老人はなだめるやうに、

『それはもう間違ひはありません。青木さんも丁度居合せてゐらつしやるから、證人に立つていたゞいてもようございます』

それをしほに、今まで耳を欹てゝゐた青木が口をはさんだ。

『何だか大分甘さうな話だなあ。吉野老人はこの通り物固い紳士だ。この人が證人に立てといふなら、勿論僕はこの首をかけて置く。それにしても今野君、君も話に聞けばずゐぶん大きなカスリを取るやうだが、僕にも一言の挨拶があつて然るべきだと思ふがなあ』

『勿論のことだよ』と、今野は青木に深入りをされるのを恐れるやうに、宥めるやうにいふのであつた。

『これについては、君にも多少打ち明けばなしをして、一杯飲んでもらひたいと思つてゐたのだ。それではこの店へは、また夕方出向くとして、ひとまづ外へ出ようぢやあないか？そこらのカフエで一口やりながら、ゆつくり話さう』

『うん、どこでもお供をするよ。僕の方でも相談したいことがあるのだ、君をこゝで待ち合せてゐたんだ』

今野も、もう青木の手から逃れおほせることが出來なくなつたのを覺悟したやうに見えた。しかし彼は最近の自分の幸運に勝ち誇つてゐたので、たかゞこの小惡黨の一人位、どうにも誤魔化すことは出來ると信じたらしく、吉野老人へもう一度トゞメを差して置いて、そのまゝ陰氣な店の扉をあけ、先に立つて街路へ出るのだつた。

めつきり永くなつた暮春の日は、まだ麗かな光りを暖かく投げ漂はしてゐた。今野のあつぱれ紳士らしい姿と、どことなく尾羽打ち枯らした、ふるい冬衣の青木とは、肩を並べて夕方の町を歩いた。二人とも、めい〳〵何か考へ込んで默つてゐた。

ふと、赤い看板の支那料理の前まで來ると、今野がいつた。

『どうだい、こゝへ這入らうか？』

二人はあぶらくさい二階の、窓に近いテーブルに對ひ合つた。だゝつぴろい部屋には外に人影もなか

つた。

窓の外には、町家の屋根を蔽うて、美しくのびやかな夕映が流れてゐたが、しかし、二人の客人たちは、さうした風情に目を投げようとはしなかつた。小菜が出、酒杯がならべられると、まづ青木がほんの世間ばなしをするやうな調子ではじめた。

『何にしても、君は素晴しい幸運に惠まれたらしい。相手が貴婦人であらうと、富豪であらうと、君にそれだけの服裝をさせて、遊ばせて置かせるパトロンもしくは女保護者が出來たとすれば、友人として僕は祝杯を擧げざるを得ないよ』

『うん』と、今野はずるく笑つて、

『お言葉通り、僕は全く幸福なんだ——その幸福の內容はもう少し詳しくお話したいのだが君のいはゆるパトロンとある密約があるので、もう少しの間はつきり說明が出來ないのが遺憾だが、まあ當分許して置いてくれ給へ。しかし、早晚、僕はある大きな事業をはじめるだらう。さうなると是非君にも力を貸してもらはにやならん——ほんの一月ばかり、內容に觸れようとせず見てゐてくれ給へ。』

『勿論、僕は君の出世の邪魔をする積りはないよ』と、青木はさも親しげにうなづいて、

『それは君と僕の間だものいざ公けにしていゝ日が來れば、君も僕を袖にして、だんまりで君一人いゝ目を見ようとする筈はないと信じるよ。僕の方でも、これまでいゝにつけ、惡いにつけ、何一つ君に內密でしたことはないのだから——現に、長沼の問題にしたつて、君に儲けそこねさせたのは殘念だが、

何から何まで打ち明けたのだ——』と、さう言ひかけて、ぢろりと一瞥して、

『それにしても、君も自分の仕事が忙がしくなつては、あんな問題に觸れたくはないかも知れんが、あの一家をあのまゝにして置くと、僕達の顏にもかゝはるといふものだから、最近もう一度乘り込む決心だが、その時には是非後援してくれ給へ』

今野は白光りのする目を伏せるやうにして、杯を取り上げながら、

『さう〳〵、あの事件も何とか早く始末せんといかんなあ。しかし、僕は多分當分東京を去らねばならなくなるかも知れんから、ことによると、殘念だが長沼家に對する一件からは手をひかざるを得ない破目にならうとも知れぬ。だが僕がゐないにしてもくらもゐるから、君の相談相手に不自由はないと思ふよ』

青木は、眉を寄せるやうにして、薄い唇を押し曲げてぢつと相手をみつめた。

『ほう——ぢやあ君は東京を去るといふのか？』

『うん、都合によつて三月や半年京阪の方へでも出かけることになるかも知れん』

今野は青木の容子には少しも注意を拂はぬやうに、俯むいて箸を動かしながら答へた。

青木は、太い眉の下で、またゝきもせぬ目を光らせた。

『それはまことに殘念だ。あの事件は僕の手に餘るらしいので、是非とも君の盡力で解決したいと思つてゐたのだが——しかし、何となく不思議な氣がするよ。あの晚、德惠子の護衛に置いた、あのムキな

志田が、ちよいとの間にあの女の藥籠中のものになつて返り忠をしてしまふし、今また君までが手をひきたいなぞといひ出すとは、ね。どうも僕もかう孤立無援になつてはやり切れない』

『おい、君』と、今野は奇妙な微笑で友人を見た。

『僕をあの志田のやうな青二才と同一視してもらつてはこまるよ。僕は何も長沼から買收されもしないし、德惠子からたぶらかされもしないんだ。たゞ、自分の事業が忙がしくなるから、あゝいふ事件にまで關係してはゐられなくなるかも知れんといふまでなのだ。その點を理解してくれなくては――』

『何も僕だつて君が長沼家から何かせしめたらうの、德惠子にたぶらかされたらうのと言やしないさ。しかし――』と、青木もにが〳〵しげに微笑して、

『しかし、突然君がよそ〳〵しくなつたので、多少僕にも邪推はあるが、いかに何だつて、君がまさか僕に取つて不倶戴天の仇敵に返り打をしようたあ思はないさ。でも、今度の場合なんざあ、當然、僕に耳うちがあつてもいゝはずだからな』

『君の非難には全く辯解の言葉がないよ。しかし、僕にもいろ〳〵內面的な都合があつたのさ。僕の保護者が肉親にも、女房子にも祕密を守れと命じたのだ。しかも僕に取つては、この機會をのぞいては浮み上る時がいつ來るか分らないのだ。そこを考へてくれ給へ。ねえ、僕と君はいはゞ一心同體なんだ。僕がいくらでも善くなれば、君だつて喜んでくれると思ふ――』

青木は、ひどく急に話頭を轉じた。

『まあいゝさ。僕だつてさうしつツこい人間でもないんだ。時に今日は、何だか大分うまい儲け口らしい話を小耳にはさんだが、大變立派な寶玉だつてぢやあないか――女保護者の恩賜かね？』

『ふん』と、今野は例の土氣色の唇を、醜く引き歪めて、賤しげな、得意げな、微笑をまた繰り返した。

『まあ、そんなものさ。しかし不純な關係ぢやあないんだ。僕は君たち氣樂な身分の人間とは違つて女房子があるんだからね。別に艶氣も色氣もありやせんさ。たゞ、新らしい仕事にとりかゝる前支度に多少とも必要があるだらうといつて貸してくれたのさ――一時の流用にね』

『ふん。君も結構な後援者を持つて羨ましい。僕なんぞのこの頃を見給へ』と、青木は自分を笑ふやうに呟いた。

『珠玉といやあ、僕だつて有りつけば有りつけたんだ。そら、君だつて覺えてゐるだらう。德惠子がはめてゐた奴なあ、あれだつて、まあ捨て賣にしても、八千や一萬のものだつたんだ――なか〳〵立派な奴だつたよ。ねえ？』

青木は、ぢろりと友人の顏を見上げた、餌ものをねらつた狼のやうな、白光りのする瞳だつた。

今野の、これも負けずにずるい目が出會つた。彼は肩スカシの笑ひを笑つた。

『さうだつたかなあ、いかに僕が慾張りでもひとの色女の指輪までねらつたことがないからな。それに

してもあの人はどうしてゐるか――すこしも見當もつかんのかい？』

青木は瞳をそらさなかつた。まるで神經の全部が、悉く視力の觀察に集注されてゐるかのやうに見えた。今野はあざけりに似た笑ひに充ちた目を、これもそらさなかつた。口や筆で說明することの出來ない、執拗な、猛烈な、惡どい爭鬪が、テーブルを界に、短い空間で行はれた。

――でも、たうとう今野の瞳は負けた。彼の視線はたゆたひ漂ひ、空に流れた。頰が異樣にこはばり唇が引しめられた。全く不快な、醜惡な表情だつた。

青木は薄氣味惡くにたりとした。その微笑は顏面全體を蒼ざめさせた。しかしすぐには勝ち誇つた態度を見せなかつた。反芻獸が反芻するやうに、肉食獸が爪にかけた犧牲をたのしむやうに、ゆつたりとむしろのろ〳〵と口を切つた。

『おい、今野、君は大西の探偵事務所に籍を置いてゐた人間だらう――もう少し相手を見たらどうだい』

今野は窓を見た。

『ねえ、少し君も相手を見そこなやしないか？』

青木は薄い唇でせゝら笑つた。

今野は盛り返ざうと跪いた。

『何をいつてゐるのか、僕にはさつぱり解らんよ。勿論僕は祕密探偵事業なんかに適任ぢやあないのだから、別にその方面で非難されても腹も立たんがね。若し君にその方の自信があるなら、後任に推薦して上げようか』

廣東人のボーイが料理を運んで來たので、話は途切れた。しかし、二人の間には、明かに今や宣戰が布告されたのだつた。

『なあ、今野』と、青木は口調をかへた。

『君にしたつて、またこの僕だつてざつくばらんに言や決して善良な市民ぢやあない。だがなあ、われわれ仲間にわれ〳〵仲間の義理も禮儀もあらうといふものだ。またそんな他人行儀を通り越した人情だつてあるわけだ。つまらん利慾や行きがゝりで、きのふのつきあひを忘れるなあ、いはゆる良民の間のやり口で、われ〳〵はこれまでいはゞどんな拷問でも、默つて忍んで見せて來たんだ。たとへば君が人殺しをする。お上が君を草の根を掘つても搜すといふ時に、僕アたしかに齒を食ひしばつて君のありかは言ひはしない――それが僕達のつき合よ。僕は實際、もし君が天下をむかうに廻す時であつたとしたら、たつた一人の味方になつて、君のために働かうとまで考へてゐたんだぜ』

『君の友情は感謝するよ』と、今野はもぞりと口をはさんだ。

『これまでだつて何かにつけて、君ばかりが頼みだつたといつてもいゝ。だがそれと今の問題とは、まるで話が違ふぢやないか。君の言葉を聞いてゐると、僕が吉野へ賣つた指輪が、まるで君の令孃から、强奪したものでもあるやうな――あんまり邪推が過ぎるといふものだぜ、僕アどんなに落ちたところが、

日輪

まだ盗みと強盗はやつたことがないんだ』

青木は冷たく靜かに笑つた。

『いや、われ〳〵はそんな綺麗な口を利くのはまあよさう。盗みや強盗はやらなくとも、かたりやゆすりは僕にだつて經驗がある。自動車を長沼で買ふ時の盥まはし見たいなやり口は、たしか君が教へてくれたのだつた。ぐん〳〵と思つたことをやり拔いてゆく、君にも似合はん弱音はよせよ』

『そりやあ僕だつて綺麗な自分だといふわけぢやあない。しかし、いかに何でも德惠子さんを——』

『勿論、強盗しやすまいさ。が、今野、僕は吉野のおいさんから、珠玉の性から、切り方磨き方、カラツトまで聞いてゐるんだ』

青木は何も細かいことを聞き知つてはゐなかつたが、かつきりと今いひ切つた。鋭尖な眼光が、すべてをもう見透したのだつた。

今野は壓迫された。目で跪いたぞ。が、刎ね返すことが出來なかつた。

『どうだい、もう面をぬげよ。君アたしかにあの女に魂を賣つたのだ。魂といふものがもうくづれてなくなつてゐるとすれば、僕といふものを賣つたのだ。勿論あいつは高飛車な、すきを見せない女だから、甘く見てかゝつた君が、珠玉のひとつも投げつけられて、ぺしやんこになつて、友達を賣つても忠義立をしようといふ風な考へを起したのは尤さ。何しろあいつはこの僕をさへ、どこまでも腰拔けあつかひをしたのだからな』

青木はのしかゝるやうに喋りまくつた。細い鋭い目は一瞬も今野から離れなかつた。執拗に、食ひ入るやうにうなだれた離反した友達の、あらく硬い髮に蔽はれた頭を見てゐた。

今野は突然、ぐいと顏を上げた。白光りのする目が血走り、泥色の唇がぶる〳〵と痙攣した。

『おい青木、萬一僕があの人から玉をもらつたとしたところで、それに何か言ひ分があるのか？』

は、おいでなすつた——といふやうに、青木は肩をそびやかした。

『馬鹿な。何でそんな問題に僕がしつツこく係はるものか！　吝臭い珠玉のひとつや二つ、盗まうともらはうと、僕の知つたことぢやあない。だが、あの女だつて持つてゐる寶を指の間からばらまいてある氣違ひとは違ふんだ。一萬圓の珠玉を手放すには、何かの條件があつた筈だ。ねえ、どこの國の馬鹿女が、女にすれば命から二番目だといふ寶玉を、だらしもなく投げてあるく？　え？　今野？』

今野は自棄的に笑ひ出した。

『君にも似合はん、つまらぬ駄目を押すもんぢやないぞ。勿論、僕は君の手もとにあの女をグイ〳〵と引つ張つて來るかはりに、あの珠玉をもらつたのよ。だから、僕が君と長沼一家との問題から手を引くといふのに滿更根據がないとはいへなからう』

日輪

青木はもう一度肩をゆすつた。

『ふん、君も滅切り悪黨振を上げたなあ——まあいゝさ、理窟はどうにもつくものだ。そりやあ君があ

の娘をどんな方法で籠絡したつてどんな甘言でたぶらかしたつて、君の自由さ、僕は君から十分に侮蔑を買ふに足る、憐れな、捨てられた男だ。だが、それはあいつと君との間の事、僕と君の間には又別な問題が殘つてゐる。君と僕とは切つても切れぬ仲なのだ。一人が萬一或る打撃に遇ひでもすれば——たとへば牢屋へでも行くやうな事があれば、もう一人だつて逃れられない破目になる。そんな腐れ縁の二人なのだ。君の方では、或はそんな腐れ縁は、斷ち切つてしまひたいといふかも知れんが、さう易々と思ひ通り切れかねるところが腐れ縁たるところなんだ。なあ、今野、君はもうあいつから、素晴しい珠玉を捲上げてゐる。もうそれで十分ぢやあないか。今度は僕の方へも義理を立てゝ呉れ。あいつとどこで會つたのだ！　あいつをどこで見つけたのだ？　出會ひ次第今度こそ、二度と放すまいと絶えず行方を探してゐる僕にそれを聞かせて呉れ。僕は今ではあいつが敵だ。もう一度手に入れて、こつぴどい目にあはせてやらなけりやあ、男が立たない。おい、今野、僕あもう君に敵對はせん。君を憎みも怨みもしない。今までの暴言はみんな謝まるよ。なあ、どこで會つたか？　あいつがどこに住んでゐるのか？　どうぞそれを聞かせてくれ』

然し、今野はもう度性骨を据ゑたやうに、青木を眞直にみつめたまゝ、ひと言も答へなかつた。

青木はまだ自分を殺し續けてゐた。

『なあ、今野、今までの僕の言葉が腹が立つなら、何うにもして謝まるよ。僕あ德惠子の珠玉を賣つて、君がどれ程の利得を得たところが、吝臭く分別なんぞを求めはせん。たゞ、あの女の行方が知りたいの

だ。あの女をもう一度手に入れたいのだ——その行方を君はちやんと知つてゐる。君はひと言いへばよいのだ。今野、頼む。一體、どこで會つたのだ？　あいつはどんな生活をしてゐるのだ？』

今野は脂で染つた前齒を、どす黑い唇の間から現して冷笑した。彼は皺枯れた響のない聲で笑つた。

『は、は、は。おい、青木、君も惡黨にも似合はず執念深いなあ——そのしつツこさぢやあ、德惠子に嫌はれたのも尤もだ。は、は、は』

『何だと？』と、青木はいつたが、まだ彼は怒りを抑へてゐた。

『君はよく〳〵情のない男だなあ。惡黨仲間なら惡黨仲間の義理だけは忘れぬがいゝ。どんなに冷笑してもいゝ、唯、あいつの居所だけ教へてくれ、それきりでいゝのだ。君が僕と腐れ縁が切りたければ、これつきり切つてやる。唯、今までの友情の總勘定に、僕の願だけをかなへてくれ』

今野は冷笑をやめなかつた。

『惡黨仲間の義理と君は言ふが、そりやあ仲間だけの通用ぢやあないぜ。僕アあの小娘の度胸にちよいと惚れたんだ。一度惚込んだからにやあ、あいつへの義理を僕はいつまでも立拔くつもりだ。實は僕もあいつの居所は知らん、只途中で邂逅して少しばかり話したゞけだ。君とあいつとの問題から全然手をひくといふ條件で、あの寶玉を貰つたのだ——してみりやあ僕にはどうしても、何處で會つたかといふことを、君に教へるわけには行かん』

青木はぢり〳〵して來たやうに見えた。顴顴がピク〳〵と引きつり、唇が歪んだ。

『ぢやあ、君は、何處までも僕を賣つたと云ふのだな？』

『まあ、そんなものだ。君への友情より、あの小娘への義理の方が、今の僕には大事なんだよ、諦めて呉れ！』

青木は腕を拱ぬいたまゝ、兩の二の腕をつかみしめた。憤怒に全身がビリ〳〵とわなゝいた。

『まあこの皿を食べたまへ。冷めてしまふと不味くなる』

今野は嘲けるやうに言つて、前の皿に箸を入れた。

突然、青木の積り積つた怒りは爆發した。彼は手近な酒の空瓶をつかんで突立つた。

青木が空瓶を鷲づかみにして立ち上つた瞬間、今野も背中で椅子の背をぐいと押しのけて突つ立つた。

彼は兩腕を胸に高く組んで、目尻をつり上げるやうにしたまゝ、しかし、出來るだけつめたい表情で相手を見据ゑた。

二人は一刹那、睨み合つた。

『獸！』

青木は、ふと、自分が荒立つたのを笑ふやうに呟いて、振り上げた瓶をごとりとテーブルの上に置いた。

『投げつけたかつたら投げつけるがいゝ、毆りたければ毆りたまへ』と、今野は嘲笑した。

『ふん、貴樣のやうな奴を毆つたつて傷つけたつて仕方がない——だが、これだけはいつて置くぞ。どんなに貴樣があいつの味方をして隱し立てをしたところが、僕はきつと搜し出す。そして思ひ切り小ぴどい目に逢はしてやる——それと同時に、今度の恩返しは必ず貴樣にしてやるから覺えてゐろ！』

『待つてゐるよ。どんな恩返しか知らないが、決して品を選みはしない、いつでも何でも御持參なさい』

今野は立つたまゝで、酒瓶を取り上げて、杯につぐと、目の高さに差し上げた。

『兎に角、今度お目にかゝるまで、御健康で——』

青木は、もう一度ぐいと今野を睨んだ。そして背廣の襟をかき合せるやうにして、テーブルを離れ、大股に階段の方へ歩み去つた。

二人はもうお互に見合はなかつた。

荒々しい足音が階下に消えると、今野はカラ〳〵と、聲を出して笑つた。

『馬鹿な奴だ！　復讐したければどんな手段でも取るがいゝ』

彼は不快な後味を忘れようとするやうに、幾つも杯を重ねた。

日は落ちた。白い電氣の光りが室内にみなぎりはじめて、ひどく早口な支那語で語り合ひながら、四五人の客がこの食堂に上つて來た。間もなく、自働ピアノが南方風な、感傷に充ちた音樂を奏で出し

た。今野はだん〳〵敵愾心を忘れた。彼はにがみを帶びた遊蕩情調に捲き込まれつゝ、いつまでも杯を放さなかつた。

支那青年のテーブルには、眞青に光る着物を着た一少女がまじつてゐて、その娘の聲がキイ〳〵と甲走つて浮かれてゐた。

――今野がすつかり酩酊して、自動車を呼ばせて、吉野老人と取引をするため支那料理を出かけようとするころ、青木はもうとうに自分の宿に歸つてゐた。彼は德惠子に逃げられると、矢來の家を引拂つて、飯田町の下宿にひき籠つてゐるのだつた。

彼は今、書物卓のスタンドの光の下にかゞみ込んで、何やらこま〳〵とレタアペエパアにペンを走らせてゐた。瞳は憎惡の暗い輝きできらめき、尖つた耳は極度の思考集中を示して時々ぴく〳〵と動いてゐた。

彼は今野に對する復讐の第一歩に、もう取り掛つてゐるのだつた。

彼は書いた――

啓上。

貴官等の熱誠なる努力が、恒に市民の幸福と安寧とを保護し、その堵に安んずるを得せしむるは、吾人の感謝と感激とに値してあまりあるものとす。しかもこの巨大なる大都會の暗黑裡に跳梁して吾人の正直にして平和なる生活を脅かさんとするもの、なほ且明敏なる貴官等の目を逃れて存在す

るの事實あるは遺憾の極ならずや、一例を擧ぐれば最近まで籍を牛込區大西探偵事務所に置きたる今野秀夫の如き最も呪詛すべき都會魔の一なる也。今野が探偵局員たりし時代、その肩書を利用して數多の罪惡を犯せし事例は、彼を引致して秋霜烈日の如き法廷の審問に附せば明瞭すべきも、今日神田神保町吉野貴金屬商と取り引きを完了したる一大寶玉は、最近ある富豪の令孃を脅迫して掠奪せるものにて、價まさに一萬圓を越えんとする貴重品なり。かくの如き掠奪を首都白日下に行ひ公然、故買商の手を通じて賣買するに至つては、かの惡漢がいかに帝都の警察力を侮蔑しつゝあるかを證言するもの、吾人の義憤を買ふ、また宜ならずや。云々。

密告書は嚴封され、警視廳のある敏腕な役人個人の宛名がしたゝめられた。彼は封書をスタンドの灯に透かすやうにして、細かい、ならびの美しい白齒をあらはしてにやりと微笑した。

『ひとつの惡事が摘發されると、いもづるをたぐるやうに、後から〳〵、もつと手ひどい罪惡が暴露される。過去の害惡の怨靈が、いくつも〳〵現れ出して、身動きの出來ぬまでにあの男にからみつく。ぐい〳〵と卷きしめて、さて地獄の底の暗やみに引つ張り込む。どう跪いてもあがいても駄目だ。ざまを見ろ！　あの役人はこれだけのヒントを與へられて、ぼんやりと見のがす男ではないのだ。今野君、ほんの二三日だよ、君の娑婆も――隨分その間樂しみ給へ』

彼は封書を衣囊に入れると脂の香の強い煙草に火をつけ、卓上に投げ出してあつた帽子を被つて、いそぎ足にわが部屋を立ち去つた。

彼には、この密書を投函する外にまだ重大な役目があつた。それは今野のくらまされた住居を突き止めること、やがてそれによつて出來得れば德惠子の居所を探り出すことだつた。今野は、妻とをさな子との三人暮しで、最近まで安下宿の一間にゴロ〳〵してゐたのであつたが、すべて行方が失はれてゐた——今夜、吉野の店の取引を濟まして出たところをつけて行けば、必ず突き止めることが出來るだらう——

もう夜だつた。青木は近所の小郵便局から例の密告書を速達便で出して、惡のよろこびに充ちた心で大股に神保町の方へいそいだ。丁度七時で、もう二三十分に彼の計畫は進行せらるべきだつた。

彼は良い時刻に吉野の店に行きつくために、賑はしい神保町の通の雜沓に身を投じた。もう初夏といふにふさはしい季節が來てゐた。飾り窓のイルミネーションと露店の灯とはあたりを輝かしく彩つて、散歩客の男女は輕やかな身なりで興じ合ひ笑ひ合ひながらごつた返してゐた。青木も紙卷の煙を香ばしい夜氣の中に吐き散らして、さも幸福さうに賑ひを眺めまはしながら歩いてゐた。

アメリカ製燒つぎ藥の效能を並べ立てゝゐる露店商人の辯舌に聞きほれてゐる一群の中に、彼もまじつた。あらゆる效能が述べつくされると、腕時計を眺めた。七時二十分、彼はつとその一群をはなれて氣ぜはしなく人波を分けて、つい近まの暗い新道に這入つた。

その新道の奥に吉野の店がある。

暗い、低い、裏露地のバラツグの軒下をつたはつて、彼はその方に近づいた。吉野老人は質屋を兼ね

てゐたから、店頭をことさら暗くしてゐた。彼は隣家のマツサージ業者との庇合ひに、びたりと身をつけた。耳を澄ましたが、ぢいさんの店には話ごゑもなかつた。早過ぎたか、遲過ぎたか——多分、今野はまだ來ないのであらう。あの支那料理でたべ醉つてしまつたのであらう。でも、重大な取引の時刻を、全然、はづしてしまふやうな男ではない。追ツつけもう來る。

七時三十分が、五分ばかり廻つたところだつた。一人の小柄な紳士が、さつき青木が這入つて來た露地をやつて來た。青木は瞳を凝らした。今野だつた。

今野は店頭で、暖簾を分ける前に、白く光る目であたりを見廻した。が、つい手近の庇合ひに、びつたりとはりついてゐる青木を發見することは出來なかつた。彼は格子戸を引きあけて、店に這入つた。

すぐに話ごゑがきこえ出した。

『今、電話でいつた通り、あの男につけられる恐れがあつたので、わざと遲刻した——濟まなかつたな

『いやもう、お金の問題ばかりは、どんなお友達の間でもね』

『お友達——ふん、友達ならいゝが、あいつはいつでも誰にでもかみつく狼なんだ——恐ろしいよ』

——何とでもいふがいゝ、貴樣達は二人とも、一人は脅迫常習者として、一人は故買業者として、當分暗い檻の中に追ひ込まれる運命を持つのだ！

青木はいよ〳〵全身を耳にした。

『で？』と今野は、低めた聲でたづねた。

店内の話聲は低められた。皺枯れた今野の聲とねち〳〵した吉野の囁きとは、もつれ合つた。時々全く聞えずなり、算盤の珠玉の動く音だけがした。

やがて一切の取引は完了したらしかつた。突然、今野の不愉快な笑ひが上づつた。

『は、は、は、君とも、もう今後はこれで縁切りだらう――もうこれからは僕は君の店へ物を賣りに來るやうなことはなからうし、また買ふものがあるにしても、君のこの薄ぎたない店でなんか取引はしないよ。銀座の大通の大商店へ、自動車を乘りつけて――その時にやあ、僕の山の神だつて令夫人なんだ――隨分、豪勢なことになるんだぜ。は、は、は』

『いづれにしても、長いお知り合ひのあなたが、そんなに御出世なさるとすればわしだつて嬉しいでさあ――だが、また昔馴染つてものは格別だから、どんな御身分になつてもこのおいさんを忘れずにおくんなさい』

――青木は露地の庇合ひで、全身を耳にしながら、冷たく、にが〳〵しく笑ひつゞけてゐた。

――熱を吹け！　熱を吹け！　もう一日か二日で二人とも冷嚴な眞暗な御殿へいらつしやるんだぜ。おいさんにやあ、別に恨みもないさ。しかし時と場合によりやあ、自動車にだつて轢かれるんだ。我慢してくれ、なあ、おいさん。

青木は、今や昨日の親友が今日の深讐となつた今野に對して、お世辭たつぷりな口を利いてゐる吉野老人までが、呪はしく、憎らしかつた。彼は全然孤立の位置に立つたので、一倍深酷な毒勇を感じた。見よ！　細い、キラ〳〵しい瞳は暗い炎を吐き、尖つた鼻の形よい鼻孔は擴がり、口は極端にゆがめられた。美しすぎる齒列びの、眞白な齒が、みにくゝむき出されて、餌じきをみつめる肉食獸を髣髴させた。

――僕はやるところまでやる人間なんだぞ。どこまでも――いゝか、わかつたか？

店内ではもうすつかり完了したに相違なかつた。

『おやあ、もう當分逢はないが達者でゐたまへ。でも、最後に隨分大きな儲けをさせてやつたのだからまあ君への義理も濟んだやうなものだ、さうぢやないか？』

『えゝ、そりやあもう、心から今度はお禮を申し上げますよ』

『それにしても五割も儲かつたかね？』

『あは、は、紳士といふものは、そんな口はお利きにならないものですよ。默つて感謝を受けてお置き遊ばせばいゝんで――』

吉野老人と今野とは、さも樂しげに笑ひ合つた。

『おやあ、失敬！』

『お大事に――お通りがかりの節はまたどうぞ――』

荒々しく、バラックの格子戸があけたてされて、やがて山高帽の今野が、モオニングの胸を、得意氣に突き出すやうにして現れた。彼は大金が全部手に入つたうれしさにまぎれて、身邊の警戒はすつかり忘れてゐるらしかつた。杖を小脇にかゝへて、ちよいと立ち止つて紙卷に火をつけ、强い香の煙を、初夏の夜氣に吐き散らしながら、通の方へ出てゆくのだつた。

五間ほど隔いて、青木は靴音をしのばせてつけはじめた。通の近くまで行くと、ふと一臺のタクシイが客待ちがほに横たはつてゐるのを見出した。今野が乘捨てゝ置いたものに相違なかつた。青木はちよいと困惑した。先方が車上の人になつてしまへば、到底最後までつけ通すことは出來ないだらう――

が、幸ひなことに、通は非常な人出だつた。さうすぐには今野は自動車に乘れなかつた。乘つても、この通の雜沓を、思ひ切つた速度で突破してゆくわけには行きさうもなかつた。

青木はすばやい男だつた。ぎらりと輝く目で、夜の明るい街を見渡して、つい一町程かなたに自動車のガレージの飾燈を認めた。彼は群衆を突きのけて、その方へ急いだ。

『おい、あの車をつけるんだ』

彼は私服の警官のやうなおごそかさで、店頭に居合せた若い運轉手に命じた。

運轉手は腰をかゞめて車の扉を開いた。

今野の自動車は大通へ出ると右に折れた。青木はあんまり近づき過ぎるたびに、運轉手に注意して、

適度の距離をわざ〳〵保たせる位に、餘裕を持つて追跡することが出來た。

『奴さん、もうのがしつこはないぞ。ふゝん、うんと得意氣にふんぞり返つて行くがいゝ。二三日中に形の變つた乘り物で送られるところへ送られるだらうから、その時にはまあどんな氣持がなさるだらうか？』

今野の山高帽子が、背後の窓から見え隱れするのを、ぐつと睨めつけながら青木は嘲笑した。

自動車は十間程の距離を取つて濠端を走つてゐた。もうついむかうの夜空に新奇なお伽噺の宮殿を示すビルディング街が見えてゐた。青木の心は不思議な、有毒な歡びと浮々しさが煽られて來た。まるで自分が外國の探偵小說の主人公でゝもあるやうな冒險心が感じられた。彼は敵手を滅盡することにいそいで、自分のことはもう考へてはゐなかつた。事實、彼自らあの支那料理のテーブルで語つた通り、この二人は一人が官憲の手に落ちれば、他も必ずまき添へを食ふにきまつてゐる位置にあつた。で、一人の罪惡が明るみに出さうになる場合には、他は極力それを隱蔽すべきなのに、今はもうそんな理性的なものは彼の心に働いてゐなかつた。青木は前の自動車をみつめながら、それが今やまさに破滅の淵に駈け下りようとしてゐるのだといふことばかり考へて、惡のよろこびに燃えてゐた。自分も、もう少しで暗い怖ろしい深淵に飛び込まなくてはならないのだとは少しも懸念せずに――

今野の車は大ビルディングの間を駈け拔け、大ステーションの前の廣場を左に、やがて薄紫のイルミネーションで屋號を空に浮べた背の高いホテルの前に止つた。

『こゝでよい』と、青木はかなりの間隔を置かせて、車を止めた。そして衣嚢を探つて幾片かの銀貨を運轉手の帽子の中に投げると、そのまゝ、おめず敵陣に踏み入らうと急ぐのだつた。

ホテルの玄關に這入ると、好都合なことには支配人も事務員も影がなかつた。一人の年若いボーイがたゝずんでゐただけだつた。

『君、今野君はどこへ行つたね――今、一緒に來たのだが？』

『今野さん？』と、よくその人を知らぬやうにボーイは呟いた。

『たつた今歸つて來た人さ。妻君と子供と三人で御厄介になつてゐる――』

『あゝ、あの方ですか？　あの方なら三階の百五十七號ですよ』

青木は餘計な邪魔が這入らぬうちにと、一枚の紙幣をボーイの手につかませた。

『あの人達も君達にさぞ御厄介になるだらう、氣をつけてやつてくれたまへ』

――ボーイは相手の言葉の意味なぞは、少しも吟味せずに、心付けをもらつたといふ意識だけで、丁寧に腰をかゞめた。

『御案内いたしませう』

『いや分る。大丈夫だよ』

青木はもう昇降機の鈴を押してゐた。昇降機はすぐに下りて來て、彼を狹い箱に入れて三階に運んだ。細長い、空氣の乾き切つた廊下は、明るい灯で照らされてゐた。青木は帽子の前鍔を引き下すやうに

して、扉の上に掲げられた眞鍮の番號板を讀んで歩いた。

『百五十一號――五十二號――五十三號――』

番號はだん〳〵今野の室のそれだといふ數に近づいた。廊下は左に折れた。

たうとう、あの角部屋の扉の外に、百五十七號を見出した。

青木はピツタリと扉のすきに身を押しあてるやうにした。中から今野や妻君の聲は少しも聞えなかつたが、聞きおぼえのある子供の甲高な叫びが漏れて來た。

『ふん、たしかにこゝだ』

青木はもう未練もなく歩み去つた。そしてすぐにホテルを出た。

彼はその足で中央郵便局に廻つて、一葉のハガキを速達便で例の官吏の手元まで送達した。

啓上。別便にて申告仕候今野某の宿所は帝都ホテル三階第百五十七號にこれあり候。本人は將にいづくにか逃亡せんとす。至急お手配願ひ上げ奉り候。

一匿名士

青木はその晩いつまでも眠らなかつた。不思議な、毒ある昂奮が全身を燃え立たせた。彼は今野と今日思ひもつかぬ突然の爭鬪を演じて、そしてそれが彼にとつて大決算の幕開きの豫告となるだらうといふやうな感じに打たれたのだつた。今野の擧動を絶えず注意してゐさへすれば、長い間どこにどうして

ゐるか分らなかつた德惠子の行方も判明するだらう、たとへばあの密告書を受けたその筋でも、もう默過してゐる筈がないから、指輪の出所を調べるために彼女を喚問するだらう。新聞記者はこの珍奇な出來事を見のがす譯がない、恐らくこの問題は社會興味を激しく惹起させるであらう。――一度彼女があかるみに出た以上は、もうこつちのものだ。今となつては、青木にすれば自分と德惠子との關係が公けになつた方が都合がいゝのである。

彼は德惠子を憎み怨んではゐたが、しかしあの不可思議な近代性格の一面を激しく抱いてゐる、火のやうに熱く、氷のやうに冷たい、飽くまで自我によつて生きて行かうとする女が持つ魅力から、いつまでも解放されなかつた。一度も唇にさへ觸れることが出來なかつたので、執念は離れてゐればゐる程募つて來た。で、今ではもう物質上の問題を離れて、どうにもしてちやんと自分の手に入れ、たつた半日でも思ふまゝにあの激烈な魂と美しい肉體とを味はひ拔かずにはゐられない氣がするのだつた。

――德惠子！　僕はすつかり君にまゐつてゐるのだ。僕はどうしたつて君を僕の腕の中に抱きしめずには措かないぞ。どんなに君が嫌つても憎んでも、君と僕との間には、切つても切れない運命の絲がいつまでも繫がつてゐるのだ。どこに隱れてゐやうとも、必ず、僕は探し出す。探し出さずには措かぬ！

青木はいつまでも寢床に這入らずに、机に頰杖を突いてよごれた壁をぢつとみつめてゐるのだつた、すると彼女の誇らかな、美しい姿が、暗い壁の上に明るい花のやうな幻となつて寫るのだつた。彼女は笑はなかつた。彼女はたゞ蔑すむやうにこちらを眺めてゐた。

――ねえ、どうしたつて、君と僕との間はたち切ることが出來ないんだ。その高慢な唇を僕に捧げずにはゐられない時が、きつと來る。何とでも笑ふがいゝ、今の中は――

雨戸のすきが白むころになつて、彼は妄念に惱まされつくして、やつと昏濛を感じた。そしてかたい寢床の中にもぐり込んだ。

その日以來、青木の最大興味は、あの密告書を受けた當局が、どんな方針を執るかといふことにかゝつてゐた。この頃彼はある大きな自動車會社に書記として毎日働き、それによつて衣食の資を得てゐたが、その仕事も、少しも身が入らなくなつた。二日三日して、彼はさぐりを入れるために吉野のぢいさんの店に行つた。もし事件が進展すれば、あの老人も參考人として召喚されるだらう――

その夕方、店の格子戸を開けて這入ると、ぢいさんは例の通り、ぼつねんと帳簿机に向つて、貴金屬を撫でさすつてゐた。

『おや、いらつしやい。何かお賣り拂ひになるものでも――』

『うん』と、青木は相手をさぐるやうな眼付でながめて、

『少しばかりプラチナの地金が賣りたいんだが、どんな相場だね？』

なぞと、何氣なく口を切つた。

『プラチナですか？　いやさつぱり相場に變動はありませんよ。えゝと、地金相場の表はどこだつけ』

老人は机の抽斗をさぐつて、相場づけを出して青木に渡した。青木は、興味もなくその表をながめた。

『一たい、分量はどの位お持ち合せなんですかな？　なるべく勉強いたしますよ。私はもう、あなた方には親類相場でいつもお取引きをいたしてをりますので――――』

『今野の指輪ぢやあ、しかし隨分君もうまくやつたらう？』と、突然、青木はいつて、ちかりとした瞳を老人の黄色い顔に投げた。

『えへ、別にうまい汁を吸つたわけでもありませんが、何しろ金目のものだから口錢は相當にいたゞきましたよ』

――まだ何の問題も起つてゐないのがすぐに看取された。青木は失望した。

――だが、その翌々日の夕方、また何氣なく青木が吉野の店をおとづれた時には、老人はひどく不機嫌らしく、陰氣な顔でぼんやり帳簿机に頰杖を突いてゐた。

『どうしたんだね？　いやに元氣がないぢやあないか？　僕は時計を落してしまつてね、間に合せにニツケルか銀をもらひに來たんだ』

が、老人はさつぱり浮かぬ表情で、出ものゝ安時計をごちや〳〵に入れた黑革張の箱をとり出して、

『どれでもお選りになつて下さい』と、突き出したなり、いつものお世辭は出さなかつた。

青木は手頃なのを選み出して、丹念にひねくり廻した末、格安なニツケル時計を買つた。彼は老人の容子から、たしかに何か事件が持ち上つてゐるらしいのを豫覺して興味を覺えた。

『時に今野はあれから音沙汰なしかい。あいつ、金儲けの割前でもねだられると思つてか、ひどくよそ〳〵しくしてゐたが、僕だつてまさかそれ程賤しい男でもないんだ――』と、彼は問はず語りにいつた。

吉野老人は重たく吐息をした。

『今野さんといやあ、今度のあきなひは隨分儲けさせてもらつたが、散々ひどい目にも逢つてしまひましたよ』

青木は心の中で凱歌を擧げた。

『ふん、ひどい目といふと？』

『お話しにも何にもなりませんのさ。今日も朝つばらから役所へ呼び出されて、手も足も出ない程いびられましてね。しかし、吉野のぢゝいも男だから、今野さんと誓つたこともあるし、そんな取引きは、全然覺えがないと頑張つてしまつたが、あの指輪は、何か難物らしいですよ。――それに、今野さんが、行方をすつ

かり隠してしまつたといふことも、十分、その筋の嫌疑の種にはなりますからなあ――』

『ほゝう、ぢやあ、今野は帝都ホテルにもゐないのかい？』と、青木は眉を寄せるやうにしていつた。

『一昨日の朝どこかへ立つてしまつたとかでね。でも、幸ひなことに私はたゞ右から左へ取り次いだゞけで、どんなに家宅捜索をされたつて、指輪の出つこはなし、證據といふものがまるで無いのだから、全然そんなことには關係がないとシラを切つてしまつたものゝ、でも、お上ぢやあ、まだ疑つてゐるやうでね――これからきつと私にお憎しみがかゝるだらうから、商賣だつてやり悪くなることだと思ひますよ』

老人は、低めた聲でくど〳〵と呟いて、また重たい吐息をした。黄色い、皺ばんだ顔は、いつもよりも更に黄色く、皺ばんでゐた。

青木は唇を噛んでゐた。では、あの密告書は何等の效も奏さなかつたのだ。今野はせしめるだけのものをせしめて、さぞ今頃は得意氣に贅澤三昧なことをしてゐるだらう――

畜生！　いつの間にかあいつも役者を上げやがつた！

『だが、全く不思議ですよ。どうしてあの指輪一件がお上にもれたかね？』と、老人は呟きつゞけるのだつた。

『刑事さんはいろ〳〵鎌をかけたがね。私は默り込んだまゝ何もいはなかつた。とんだかゝり合ひになるのは閉口ですからねえ』

青木は吉野の店を去つた。彼は今買つたばかりのニツケル時計を衣嚢の中でいま〳〵しげにつかみしめた。彼の思索によると、當局はあんな密告書一片を種にしては、もうこの上の努力をば試みないだらう――もつと〳〵重大な出來事が役人達を絶えず忙殺してゐるのだ。ではもうあきらめねばならぬのか？　いゝえ、まだあきらめられぬ。身をかはされたまゝ、默つてすご〳〵とは出來ぬ。如何に巧に隠れてしまつたところが、慥と消えたのではない。今野はこの都か、またはどこかの地方都市に、ほとぼりをさますために世を忍んでゐるのに過ぎない。ちやんと、生きて、生活してゐるのだ。

――男と男の喧嘩だぞ、畜生！　今に目に物見せてやる！

青木は瞋恚に燃えて、われにもなく、衣嚢の時計を引つつかんで鋪石道にたゝきつけた。

汚辱せられし生

――高豪の茂みが、お濠の土堤が、街路樹が、すつかり青くなつて、東京はもう初夏だつた。新らしい緑の色は、若い心の樂しさをば二倍にさせ、惱ましさをば十倍にする。だが、德惠子は、そんな感傷的な感受力を、出來るだけ自分で殺して、生活への戰ひに、最も現實的な足どりで突き進んで行く外はないのであつた。

依田事務所での、老富豪のための仕事はこれまでの經驗の中では面白く感じられた。老人は毎日きちりと夕方の一時間半を、自傳製作の事務所に現れて、大きな肱椅子にどかりと腰を下して、葉卷に火を

つけるのだつた——

彼は、小さな椅子に、きちんと腰掛けた德惠子を、象のやうな目で一瞥して、こんな風にはじめた——

『では、昨日のつゞきをはじめるかね。昨日はわしがどないにして竹方公爵に取り入つたかといふ、祕術について話したのう。では、それはそれ位にして、今日はその頃現れたわしの勁敵がどないにわしを苦しめよつたかを話しとかう——』

で、目を瞑つて、三五分思索をまとめて、さてぃぽつり〳〵とねつとりした口調で語り出す。最初は吃りがちに、くど〳〵しい話しぶりをしてゐるが、興が乘つて來ると、きらり〳〵と細い目を耀かし、そこら一面葉卷の灰を振り散らすのだつた。

ある夕方の仕事の半ばで、突然かう怒鳴り出した時には、德惠子もさすがに吃驚してペンを取り落すところだつた。

『だがのう！　あいつにまさつた惡どい奴はなかつたぢや！　あいつにまさつた！　あの長沼新兵衞といふ奴に！』

德惠子は、だしぬけに生みの父の名を叫ばれ、しかもそれが、世にも呪はしげに罵られたのを聞いて、サツと顏色をかへ、思はず老人を見上げた。しかも老人は少しも氣がつかなかつた。彼は細い目を金壺眼に歪めて、肥つた首すぢから耳たぶまで、憎むべき追憶に眞赤に染めて叫びつゞけた。

『あいつは、すんでのところでわしを破滅させようとしをつたのぢや。わしが何十年とない血と汗の苦

しみで蓄積したものゝ全部を、すつかり盜み取らうとしをつたのぢや——かまはんよ、盜み取らうとしをつたと書いてくれ、そして、欄外に、この言葉を訂正せんよう編輯者への注意書きをしといてくれ』

依田老人の話で聞くと、全く新兵衞氏はあまりに惡辣な手段で商敵を惱ましたのであつた。不思議な運命で、二人の事業が二三度競爭の形となつて、新たに勃興しかけてゐた老人の方が成績を上げて來たのに業を煮やした新兵衞氏は、まるで不倶戴天の敵でゝもあるやうな憎惡を抱き始めた。そしてその大財産を背景にして、金に糸目をかけず、依田氏の新計畫を洩れ聞くと、その悉くに妨害の手をまはし出した。當面の官吏をも、代議士をも、會社の重役をも、金で買ひつぶして、依田排斥の本陣をかため、小さな新聞を手に入れて痛烈に老人をやつゝけさせた。

『わしはお蔭で、依田銀行の取付けを二度も食うたわい！　大抵な男でわしがあつたら、あれなり參つとつたらう——ぢやが、わしは男ぢや。わしにも味方もあつたぢや。わしの男ぢやといふことを知つとる竹方公が聲を掛けてくれたでのう、やつと急場を切り拔けたが——いやもう、あの新兵衞の奴と來ては、あれは餓鬼ぢや。獄卒ぢや！　間違ひなしに地獄に墮ちるしろものぢや！』

德惠子は、新兵衞、新兵衞といふ名がいはれるたびに、ペンを持つ手先がわなゝくのだつた。だが、すぐに平氣になつた。彼女の記述者としての興味が、肉親への感情をおしつけた。彼女は新兵衞といふ名をだん〳〵少しのふるへをも見せず書くことが出來て來た。

——依田老人の追憶は、突然、ひどく突飛に跳躍した。たとへばいかにしてある植民會社の設立を

思ひ立つたかといふ理由を語つてゐたかと思ふと、忽ち一家内の私事に移つて來る。

『その頃、わしは心臓をいためよつてのう――隨分女房にも苦勞をかけたもんだ。その女房の方が先にあの世へ行きよつたが……』

老人はどのやうな感情でもかくさなかつた――

『わしは肉親の縁が薄い男での、女房に死なれてから、三人も、まあ、その、お代り見たいなものをこしらへて見たが、みんな死んだおかよに及ぶものはなかつた、おかよはわしと一緒に、貧しい〳〵世界からよぢ上つたのぢやが、いつだつて歩調を遲らせはせなんだでなあ。わしが一萬圓の主じになれば、一萬圓のわしの家内としてふさはしくなつたし、十萬圓、五十萬圓、百萬圓と、經上がるに連れて、それ〳〵ふさはしい女房振りを見せたのだ。これがなか〳〵六かしいことだでなあ。しかし、あの女の缺點はたつた一人の娘しか生まず、生んだが脾弱くつてすぐに殺してしまつた點ぢや。わしに子があつたら、わしの生活も大分變つたものになつてゐたぢやらう――みんな運命の波の動きなんだ――わしのこの年では、子があつたら遊びや酒もやめよつて、今よりぐつと評判のいゝ好々爺になつとつたことであらうになあ――よんどころない――』

こんな愚痴ばなしをも、彼は憚らず筆記させた。そして毎日仕事のをはりに今日の談話の全體を讀んで聞かせて、ぢつと耳を傾けるのであつたが、やゝこしい訂正なぞは少しも試みなかつた。

それで、德惠子は依田老人に逢へば逢ふ程、一種の親しみを感じて來た。今まで見て來た男たちのやうな、假面的なものが、この老人にはこればかりも發見出來なかつた。自由と、快活さとは、若い世界には乏しく、却つて老齡の境を越えたところにあるやうにさへ思はれるのだつた。

――ところが、あの夕暮のこと、その日の仕事が終つて、ノートを机の抽斗にしまつて鍵をかけて、椅子を離れようとする德惠子を、老人は、何か、ふと思ひ出したといふ風で呼び止めた。

『さう〳〵、東さんや。わしは、いふのを忘れよつてた』

德惠子は振り返つて相手を見た。

老人はだぶ〳〵に肉づいた頰を微笑にたるませて、象のやうな眼でこちらを眺めてゐた。

『のう、明日は土曜、明後日は日曜、その翌る日は旗日ぢやで、わしども公けの仕事をしとる者には三日の休みがあるのぢや。休みがあつても、わしは東京にゐたとて何にもならん――やれ、面會人、やれ、集會、やれ、晩餐會――なあ、この年をしていそがしいこつちや。だでなあ、明日は思ひ切つて、つい、近い、鎌倉の別莊まで内密で逃げ出さうかと思ふのぢやが――な、そこで、あんたに相談ぢや。その足かけ三日を、靜かなところでうんと働いたら、遊びながらはかどるだらうと考へての――そりや、あんたにも都合があらう――若し都合がよくば――な――勿論、わしはそれに相當した報酬を上げるよ。今のところ、毎日一時間半で、日割にして三圓三十三錢となる。これを、一日六時間づつ働いてもらふとしたら、わしは二日間で十二時間――えゝと、二十六圓六十四錢と、かうなるかな、そいだけをあんた

に支拂ひますぞ。もつと働くとしたら、それ以上もな。すると、多少、あんたにも役に立つわけにもならう、どうぢやな？　いゝ別莊といふわけぢやあない。わしは自分の樂しみを取り、身體を休ませるために建てたので、決して見かけはようない。だが、住みよいといふ點では――』

徳惠子は老人からのかうしたいざなひに、少しも警戒を感じる必要はなかつた。それにシイズンが眞夏でもあれば、世間の目を恐れる要もあつたらうが、今のところその方も安心である。長い間の、乾燥無味なアパートメント生活に身も魂もかわき切つたやうな彼女は、久しぶりでのんびりと、のたりのたりと靑く輝きかける海も眺めたかつた。磯臭い濱の香ひもたつぷりと吸ひたかつた。

『え、、おともいたしますわ』と、彼女は答へた。

『うん、そりや結構。では、明日はこゝでの仕事は休むことにして、午後八時までに東京驛の待合室に行つてゐるやうにして下さい。そこで、わしを待つことにな』

『かしこまりました』

『では、お休み』と、老人はいかにも滿足さうにうなづいた。

依田の別莊は全くよい位置にあつた。海岸の松林の中の、眞白な療養院に隣つた、小ぶりな美しい三階建で、見晴しはどの部屋からもよかつた。砂丘と砂濱と綠の波はつい目の下にあつた。老人に伴はれてこゝに來た徳惠子は、その翌朝、島の岬がまだ朝靄に閉されてゐるころ床を離れて、濕つた砂を踏ん

で波打ち際に下りて行つた。

久しぶりで靜かな波のひゞきを聽きながら、果しもなく動搖しつゞけてゐる海を眺めて、彼女は過去の贅澤で苦勞のなかつた月日を思ひ出すのだつた。甘つたるい昔に媚びる思ひが萠しかけた。流行や嗜好に對する欲求が思ひのまゝに充されて、周圍の人達はみんな彼女に諛らつてゐた。彼女は常に他を使ふ人で、まはりの人達はすべて彼女に使はれる人だつた。乏しさなぞといふものがどうしてこの世に存在するのか、物で讀み、話できいても、その理由を諒解することが出來なかつた。眞夏、海岸に來れば、來て二日と經たないのに、いつも濱邊の女王だつた、公女だつた――

――それが今は？

今は何といふつつ變りだらう。女王はたつた半年たらずの間に、使用人にかはつてしまつた。公女はぶよ〳〵な老人の女書記となつてしまつた。服裝から美と流行は遠ざかり、右手の指にペンだこが出來、全身のなよやかさはいつか失せた。心は疲れ、凡ゆるまづしさゝへもが絶えず胸を脅かしてゐた。

――徳惠子は病院の白堊を眺めてゐた目をそらした。若し自分が患ふやうな事があつたら、今はどうするだらう？　春にそむいて死んで行つた咲子より、もつとたよりすくない彼女だつた――彼女は戰慄した――

だが、彼女はすぐに自分を嘲笑した。肩をゆすつて、遠い水平線に目をあげて、誇りかに呟いた。

――馬鹿な娘さん！　あんたは何だつてそんなに感傷的になつたの？　まだ、波や、空や、物のひゞ

きなぞのために捲き込まれる程弱い心の女なの！　ふゝ、いつまで少女小説の讀者みたいな人なんでせう！

そして、つけ足した。

――ほんたうに生きることは苦しむことだわ。ほんたうに生きることはたつた一人で忍ぶことだわ。

彼女は荒々しく海の香に充ちた空氣を吸ひ込んで、活潑な足どりでだら〳〵した傾斜を松林の中の別莊の方へ上つて行つた。

さすが活動的な依田老人も、都會と仕事から離れてかうした靜かな濱邊へ來ると、めつきり疲れが出ると見えて、その朝は使用人達があまりに起床の遲いのを案じる程熟睡を貪りつゞけてゐた、晝近くなつて、肉ひだに細められた目をまぶしさうにして、やつと起き出して來た。

『や、お早う、お早う、うん、素晴らしい天氣ぢや。いつも海はいゝわい』

彼は德惠子を自分の食卓に呼んで、朝食をともにした。

『わしは自分の家で、たつた一人で箸を執るやうになつてからもう何年になるかなあ、女房も娘も死んでからは、わしはいつも一人で物を食べる――食事はさびしいのはいゝ事ぢやあない。さりとて、支配人どもや社員達から、飯の間まで仕事の話をされるのも閉口ぢや。うん、今朝は、久し振りでうまい朝めしぢや』

老人は盛んにフォークをうごかした。健啖で、ガブリ〳〵と咽喉と口腔とに反響を起させながら、上

等の葡萄酒を飲んだ。

德惠子は娘のやうにつかへた。老人は彼女と食卓を共にしてひどく幸福さうだつた。鹽壺を取つてもらつたゞけでも、心からうれしさうに禮をいふのだつた。

『當然、わしにだつて、君位な娘があつてもいゝ筈ぢやつた――わしに娘だけでもあつたら、もつと心がくつろいでゐたらう――それにしても、東さん、君はよつぽど育ちのいゝ、不思議な性格の人と見えるなあ。わしは君のやうに品のいゝ、君のやうな餘計な口を利かぬ娘を、職業婦人どもの間に見たことがないよ――一たい、今までどういふ經歷を經て來てゐるのかね？　實は、わしは人の生活に立ち入ることは嫌ひぢや。それは損なことぢや。だが、君だけには別な感情が出て來るよ。わしは、君を詳しく知りたい。一たい、今までどんな世界にゐた人かね？』

德惠子は默つて微笑してゐた。この老人の前で、長沼新兵衛の一人娘だと名告つたら、どんなに吃驚するだらう！　顏色をかへて、おこり出すだらうか？　商敵の娘を使用人にしたことの誇りのために、カラ〳〵と、笑ひ出すだらうか？

『ねえ、若し差し支がなかつたら話しなさい。わしだつて、そんなに無慈悲な老人ではない。好ましい若い人のためには幾らかの同情は持てるだらうと思ふよ』

だが、德惠子はなほ微笑してゐた。

『君は、何となく祕密に充ちてゐる』と、老人は、食後の果物を大切れのまゝむしや〳〵やりながら呟いた。

『いつか――』と、徳惠子は微笑のまゝで答へた。

『いつかみんな申し上げますわ。でも、私には祕密も何もないんですのよ。私は只の詰らない女にすぎません――』

――その一日、二人は隨分働いた。老人は徳惠子といふ助手を得てから、われにもなくめつきり仕事がはかどるやうになつたことを告白した。二人は夕方になつて、親子のやうに濱を歩いた。濱の漁師達は老人を見知つてゐるものが多かつた。みんなは挨拶をして通り過ぎてから――

――依田の旦那に、あんな娘があつたかなあ。と、いふやうな眼付であとを見送つてゐた。

入浴が濟んで、晩餐を濟まして二人は老人の私室に這入つて仕事をはじめた。隨分更けるまで努めた。それが濟んで、老人は鈴を押した。小間使が來ると彼はいふのだつた――

『もう、お前達は寢てもいゝ。何か小食と酒を持つて來て置いてくれ』

ウヰスキイとソーダが運ばれた。

『わしは、飲酒の害は十分知つてゐる。だが、夜が更けるとさびしくなるでなあ――東さん、君の年ごろにはまだ何も分りはしない』

老人は自分でグラスを充した。そしてソーダもまぜずに二つ三つ手酌で重ねるのだつた。

徳惠子は默つて眺めてゐた。彼女はこの老人の妾にだん〳〵ある寂寥が添はつて來るのを見た。

――初夏の夜は、波の音の靜けさの中に更けて行つた。

依田老人はひどく濟まなげだつた。

『飲酒は惡癖だ――だが、東さん、許してくれ給へ。今夜わしは、いろ〳〵なことを考へ出してゐるのだ――わしは、なあ、これまでの何十年を、隨分一生懸命戰つて來た。併し、その長い戰ひの結果、わしが得たものは何だらう？』

徳惠子は空いたグラスを老人のために充してやつた。

『何にもありはしない。わしは金はかなりためたが、地獄までしよつて行けはしない。おまけに、わしが地獄に行く時には、生きてゐる間はさつぱり歡迎してくれなかつた奴等が、ハンケチを振つてよろこぶだらう――わしは、金を作ると同時に、友達をなくし、女房をなくし、娘をなくし、敵ばかり作つた――』

ひし〳〵と、生活の暗さが押し迫つて來るといふ風で、老人はウヰスキイをまた新らしく充させるのであつた。

徳惠子はおもひやりを感じた。人間的な氣持をどこにか殘してゐる以上、この人が感じる寂寞は無理はなかつた。

『お金といふものは、澤山持つてゐらつしやる方はつまらないものだと仰しやるけど――』

徳惠子は飽くなき貪婪の父親のすがたを目にうかべながら呟いた。

依田老人は嘆息した。

『物質だけが生命の時節もあつた。物質で何でも買へると思つた時節もあつた。しかし心と金とはまたまるで別なものだ――それを氣がついた時に、たゞ、さびしさだけが殘るのだ』

老人は止め度もなくグラスを戀しがつた。徳惠子は老人の魂をしめつける悲哀と孤獨とが、よくのみこめる氣がした。

『わしはなあ――』と、老人は、ウヰスキイの醉ひに、いくらかもつれはじめた舌で語りつゞけるのだつた。

『隨分長い間のひとりぼつちのあとで、君とかうしてゐると、昔失くしてしまつた家庭を取り返したやうな氣がするよ。君がさうして前に坐つてゐてくれると、たゞぢつと坐つて、默つてゐるだけでも、何だか失くしてしまつたものが生き返つて來た氣がするのだ。そりやあ、わしだつて、若さが心に殘つてゐる間は、家庭の慰めなぞといふものはすつかり輕蔑してゐたのぢや。男にはたゞ仕事がある。その外のことは餘分ぢや。といふ風にかたくなに考へもし信じもしたのだが、やつぱりこれが老いといふのかなあ。わしはいつまでも、心だけは老いを知らずに生きたいと思ひよつたんぢやが――

くど〳〵と、老人の獨り語りがつゞいてゐる間に、だん〳〵夜が更けまさつて、波の響が高くなつ

た。遠い階下の方の部屋で、かたい、いかつい音で、もう深夜が來たことを時計が知らせた。

『あら、もう十二時ですわ』と、徳惠子は呟いた――

『十二時？　ふん、もうそんな時刻か？　だがまあいゝ。今日は大分仕事がはかどつたから、明日は休んでもいゝ。まあもう少しぢつと坐つてゐて下さい。君は、わしにいろ〳〵なことを思ひ出させてくれる。何となく君と一緒にかうしてゐると、長らくかわいてゐた隊商が、沙漠の綠地に着いたやうな氣がしてならんのだよ』

老人は、この年で、こんなにアルコホルを貪づていゝのかとあやぶまれる程グラスを重ねた。徳惠子はある豫感を感じた。惡い、不愉快な豫感だつた。老人の象のそれのやうな目は、もうまつすぐには注がれずに、伏目にされたまま、時々チラ〳〵と上目で仰ぐのだつた。厚い、ぶよ〳〵な唇はふくれ上り、眼の下の肉はたるんだ。グラスを持つ指は酒にぬれてブル〳〵と戰くのだつた。繃袍の胸元ははだかり、ゐずまひは崩れた。

これは惡い前兆だつた。

徳惠子はこの老人だけは、これまでの男達に對するやうな侮蔑の氣持で眺めたくなかつたので、きつ

かけがあり次第、寢室に退かうと考へたのだつたが、それは遲すぎた。

老人は眞赤な舌で、厚い唇をペロリとなめて――

『東さん、あんたは笑ふだらうなあ。わしが――苟くも依田ともいはれる實業家が、こんな弱音を吹くのを聞いたらなあ――笑ひますか？　な？』

『いゝえ。笑ひなんかしませんわ』と、彼女はわざと快活に答へた。

『さうか――さうか、ぢやあ。君はわしのこのさびしさをようく了解してくれるのぢやな』と、老人はうなづいて、そして細い目を赤黑い醉ひで輝かして、ぢつとみつめた。

『そんなら、わしのたのみをひとつ聞いてくれ。な、このさびしい老人を慰めるために、これからこの別莊にずつと暮してゐて下さい。な、わしは、土曜日毎にやつて來る。土曜日と日曜日、この二日を、わしを溫かい心で慰めてくれゝばいゝ――』

德惠子はかたくるしい表情で、襟元をかき合せるやうにした。彼女は答へなかつた。

『わしは君の自由を束縛せんよ、わしは一週に二日だけ、君を縛るだけぢや、あとはどんなに氣まゝにしてゐてもよろしい。なあ、勿論――』と、老人はぞつとする程厭はしい微笑で彼女をさぐるやうに見た。

『なあ、勿論、若い人達には若い友達も必要ぢや。とりわけ、現代の君達は異性の友がなうては、夜も日も明けんのぢや。いや、非難するのぢやないよ。それは自然ぢや。な、ぢやから、わしはそんなこと

まで干渉せん。たゞ一週に二日、この短い時間だけそばにゐてくれゝばいゝ、どうぢやね？　決して惡い條件ぢやないと思ふが――』

德惠子はたゞ悔いた。氣を許して、深入りをして、この老人の私生活に近づき、とう〳〵こんな立場にまた立つてしまつたことを悔いる外はなかつた。

――老人はもうぐら〳〵する程醉ひが廻つて來たらしかつた。それでも付根にむく毛が生えたむつくりした指で、グラスを止め度もなく下唇のふくれた口に持つて行くのだつた。

德惠子は立ち場を失つて、石のやうに身體をかたくして坐つてゐた。彼女はうつむいて、所在なげにハンケチを、膝の上で結んだり解いたりしてゐた。それが依田には一種の媚態のやうに感じられるのだつた。老人は短い、肥つた頸で喘いだ。

『なあ、東さん、わしは隨分長いことさびしい月日を歩いて來た。わしには、その癖、だれ一人同情してくれるものはなかつたのぢや。だが、あんたは、わしの氣持をよく知つてくれてゐるやうに思はれる。――今言うた通り、わしは君の自由は束縛せんよ。わしは二人でゐる時だけ、慰めてもらへばいゝので、なあ、東さん、君だつて、こんな世知辛い世の中に、さういふ窮屈な生活をしてゐるより、もつと自由で明るい方法を選んだ方が、賢明なやうにわしには思はれるがな』

老人はだら〳〵と指をぬらしながら、また杯を持つて行くのだつた。

『さう召上つてはお毒でございますわ』と、德惠子はウヰスキイの瓶をひいた。

老人はすべて德惠子のさういふ態度を、自分に對する好意のやうにばかり取るのだつた。

『大丈夫ぢや。わしは酒では酔はん。わしは君にだけ酔うとる。醫者どもは酒をとめとる――だが、こればかりはわしの生活の慰めだつたでなあ。でも、君がやめよといやあ、わしはやめる。わしの生活に這入つてゐる一切のいけないものをやめる。そしてわしは長命するぢやらう。もう十五年も生きるだらう。なあに、人はいつまでだつて生きられるのぢや。わしは九十になつたつて三十の青年の氣持を持ちつゞけるだらう』

――德惠子は慄然とした。多慾な、獰猛な淺間しい獸を目の前に見る氣がした。彼女が見てゐるのは人間ではなく、一個の老獸だつた。彼女は心の目を閉ぢなかつた――

――どこまで行つても、男は何といふいやらしい世界ばかりに興味を持ちつゞけるのだらう。この老人までが、厭はしい姿を自分の前にさらさうとは――

『わしは長命して、これからの月日を君によつて慰められて生きねばならん。わしだつて樂い生活はほしいんぢや。結局、金でも力でも買へないものがあるんだ』

老人はぷつりと言葉を途切らした。そして彼はぶよ〳〵に肥つた、付根に毛の生えた指で、ほそい白い德惠子の手を摑まうとするのだつた。

德惠子は握られた手をひいた。老人の、子供のやうに手首のくびれた腕が、引かれるまゝに伸びた。

『な、それでいゝではないか、わしどもは恰好な條件で約束が出來上つたと思ふがな。何度も繰り返すやうだが、わしは君の自由な快樂を束縛しようとはせん。君は君で樂むがいゝ――君は君の樂みをな』

老人の、象のやうに細い、重たい瞼で蔽はれた目に、嫉妬に似た恐るべき煌きが流れた。

德惠子はぞつとした。背筋から胸へ冷たいものが流れた。總毛立つた腕が、われながら薄氣味惡かつた。老人の指は執拗にからみついてゐた。

『な、それでいゝだらう？　わしは君に最も有利な條件を提供した――これ以上の取り引はどこにもない。どんなずるい實業家だつて、君のやうな狡猾な取引をねらひやしないよ』

老人の指は、いつまでもしつこく細い指を摑んで放さなかつた。

德惠子は强ひて引き放した。

『どうするといふのだ？まだ條件が不服だといふなら、わしは今夜この場で遺言狀を書かう――わしは君にいくらでも權利を與へる』

――依田老人は酔つてはゐたが、しかし、酔ひといふにはあまりに熱烈なものが、言葉にも態度にも漲つてゐた。重たい瞼に蔽はれた細い目に、みにくい涙さへうかんでゐた。

『その上わしは死後まで好意を遺すつもりなのだ。わしの資產は愛すべき相續者は一人もない――それは君だつてよく知つてゐるだらう。結局、わしが死に際に最も愛した人の手にまかされるのぢや。な、

わしはもう七十に垂んとしてゐる。今後いかに生きても十年か、八年――どつちから見てもこの取引には、君のためにばかり有利な條件がついてゐると思ふのだがな――なあ、君はさうは思はんかい？』

依田老人は、すつかり食べ酔つて、まるで中風病みのやうな語調になつて、くど〳〵と並べ立てゝゐた。

徳惠子はもう怖れも恥も感じなかつた。たゞきたならしい芋蟲のやうなものが、小うるさく呻きを立てゝゐるのを聞いてゐるやうな、穢らはしさを厭はしさとを覺えるだけだつた。

――何といふ業さらしなおぢいさんだらう。もう人並の命の二倍も生きて、仙人になつてもいゝ年をしながら、まだ、女と金と、この二つから逃れられずに跪いてゐる。みじめなおぢいさん！

徳惠子は突然、明るい笑ひをうかべた。

『あなたは悪いお相手をお選びになりましたわ。私はさういふ取引にまるで無頓着な女ですもの――さういふことに趣味を持つ方でなくては――』

『いや、君でなくてはならんのだ。君でなくては――』と、老人はぴた〳〵に酒で濡れた唇を、癖のやうに厚い舌先でなめながら、喘ぎつゞけるのだつた。

『君だけに、わしはこれ程まで心を許すのだ。君は美しくつて、品があつて、わしがこの世で見た中の一ばん立派な女だ――神さまが、わしの死に際のさびしさを救つて下さらうとよこして下すつたおつかはし女に違ひない』

『でも、私、さうした神さまのおつかはし女になる程、醉興な女ではありませんのよ』

徳惠子は平然として、顔では笑ひながら手ひどい言葉をいつて退けた。

『いや、わしは、君がそれ位なことをいふのは、とうから覺悟してゐたのだ――どんなに罵倒したとて怒りはせん』

と、依田老人は、薄氣味悪い靜かさでいつた。

『わしは、到底君を離しはせん。たつた一週一度――な、東さん』

強い洋酒の醉ひも、もう老人の肢體をどろ〳〵に骨抜きにしてゐるに違ひなかつた。彼は何度もぐらぐらとつんのめりさうになつては、泳ぐやうな手付をして、食卓にもたれかゝるのだつた。

徳惠子は自分が立ち上つてこの部屋を出たところが、もう相手は追ひかけて來る力もなくなつてゐるのを見て取つた。しかし、やかましく聲を出されたり、うるさく鈴を鳴らして使用人を呼ばれたりしてはたまらないと考へて、とてものことに、もう少し泥醉させてしまつた方がいゝと、老人のグラスをあとからあとから、緣まで一ぱいにしてやるのだつた。

――案の定、依田氏は、心まで抵抗力を失つた。唾液はみにくゝ肥つた口角からだら〳〵と流れ、ぶよぶよにふくれた指は、グラスを取り上げても、わな〳〵とふるへて、内容は口に持つて行かれる前に食卓や胸元にこぼれてしまふのだつた。絶えず彼女をながめて、何か呟いてゐたが、その呟きは意味をなさず、瞳の視力さへ失はれて來てゐるやうに見えた。

——もう大丈夫だわ。と、德惠子は呟いた。彼女は鈴を押して、婆あやを呼んだ。

『御主人がひどくお醉ひ遊ばしたやうですわ。お床にお連れした方がいゝと思ひますわ』

婆あやは、それはあなたの役ではないかといふやうな目で德惠子を眺めたが、彼女は冷たい、誇りかな眼付を投げたゞけで、部屋を出てしまつた。

——彼女はもうこの別莊にも用はない氣がした。しかし、汽車はもうない夜更けなので、萬事は明日早朝のことゝして、小さな寢室に這入つて中から錠を下した。

——德惠子はその夜一と晩眠らなかつた。彼女はやゝ短くなりはじめた夜が、一刻も早く明けるのを待つて、ベッドの端に腰を下してゐた。そして思ひ耽けるのだつた——何といふみじめに成り下がらうとする自分だらう。一生懸命な警戒が、貞潔だけは護つてくれてゐるが、恥知らずな逢ふ程の男性は、すべて心の目で自分を汚してゐるのだ！それにしても、生れてはじめて一切を許した城木が、もう少しつかりしてゐてくれたなら、かうした汚辱は蒙らずに濟んだのだ。あの人に激しい魂さへあつたら！

德惠子はもう別れた戀人のことなぞは考へずに、自分一人の道を強く勇ましく生きようと決心してゐたのであるが、それでもやつぱり、折に觸れて甘つたるい昔を考へ出さずにはゐられなかつた。自分を少しの汚れも恥もまじらない、弱々しくはあるが淸らかな目で眺めてくれたたつた一人の男性！　穢らはしい欲望から離れて、いつもたゞ愛の目で眺めてくれた男性！　それは城木だけだつた。

——城木さんは、一體、今、どこにどうして暮してゐるだらう？　あの弱つたらしい、あらゆる周圍に負けやすい人が、これまでの生活を捨てゝ新らしい、激しい世の波に揉まれたら、きつと、めつきり疲れ衰へてしまつたことだらう！

彼女は、あの招待會の雪の夜を、今まざ〳〵と目にうかべるのだつた。ほんたうにもう一息だつた——あの人はあの晩つまらない悔いにうなだれてはゐたが、今一息誘惑すれば、必ず二人だけの世界に逃げ了せることが出來たのに——

德惠子は城木の弱さを輕蔑してはゐても、しかしその後逢つたあらゆる男性の、恥知らずな態度を見るにつけ、失つた戀人を思ひ出さずにはゐられないのだつた。甘苦い追憶は彼女の白い豐かな胸を引きしめた——

——夜が白んだ

德惠子は小さな窓のカーテンをひいて、ミルク色の朝霧で蔽はれた海を眺めた。生活の苦はまた新らしく今朝からはじまるだらう。この仕事を捨てゝ、これより有望な職業があらうとは思はれなかつた。つまりは、正しく美しく生きようとすることは、新たな艱難を、强ひて經驗することにほかならないのだ。

海はだん〳〵に明けはなれて行つた。德惠子は外出着に着かへ、手まはりのものをも鞄にをさめた。階下の人達が目をさまし次第、一番列車に乘るために別莊を出て行かう。

早起きの爺やが、起き出したらしかつた。井戸の吸ひ上げポンプが軋りはじめた。彼女は躊躇せずに小鞄を提げて階下に下りた。爺やは吃驚した目で彼女をみつめた。

『お早う』と、德惠子は愛想よく挨拶した。

『こんなに早く――どこへお出かけで？』と、爺やは怪しみに充たされてたづねた。

『東京へ――』と、彼女は答へた。

彼女は青白く塗られた門を出た。これでこれまでの關係はこゝの主人とすつかり切れてしまつたのだつた。

彼女は朝の冷たい空氣を深く吸ひ込んだ。艱難に窶れ衰へてはゐても、まだうら若い女性としての誇りと力とは殘つてゐた。彼女はもうすつかり貧しかつたが、その貧しさを怖れはしなかつた。

――どうにかなるわ。この手やこの足や、この氣力が殘つてゐる間は、きつとどうにかなるわ。

小犬が足下にまつはつて來た。

――ねえ、お前きつとどうにかなるわねえ。

打ち明けて話す人を持たぬ身には、まつはり寄る小犬さへなつかしかつた。抱き上げて、和らかい長い毛に頰ずりして下に置いた。

――小犬はしばらくの間、ピョコ〳〵と尾を振つて從いて來たが、向うから牛乳屋の車が來ると、德惠子を見捨てて配達夫の後を追つて歸つて行つた。

汽車に丁度いゝ時刻だつた。彼女は人のまばらな車室に乘り込んだ。

まるで空いて横須賀から來た客車は、しかし鎌倉から通勤の紳士勞働者達で大分充された。德惠子は二等室の窓際に坐つた時、はじめてへどろの沼のやうなものから逃れ出すことが、出來たやうにホツとした。

すつかり朝になつてゐたが、丘や松林にはまだしつとりとした靄がいかにも初夏の明方らしくかゝつてすがすがしい海の色が目にしみるやうな涼しさを感じさせた。

德惠子は頸元や手首に、いくらよく洗つても取れ切れないねばつこいものが付いてゐるやうな氣がして、ハンケチを出して神經的にこすつてゐた。汚辱のぬるめきがこびりついて、始末がつかぬやうに感覺されるのだつた。いつまでも拭きつゞけてゐるうちに、そこらが眞赤に充血した。彼女は自己憐憫のいぢらしい氣持で、手首を眺めてゐたが、やがて、自ら笑ひ消した。

――どんなに外からよごさうとしたつて、私の心も身體もそんな汚濁をうけつけやしないわ。みんなできないきたないへどろを投げつけなさい、私にはそんなものは當りつこはないのです。

彼女はハンケチを衣囊に入れて、こちらの擧動をいぶかしげに眺めてゐる前側の若紳士達に冷たい一瞥を送つた。彼女は彼等の好奇心を輕蔑した。

――あなた方の視線だつて、やつぱしへどろよ。賤しい好奇心は捨てゝしまつて、あなたの新聞をお讀みなさいな――

汽車はカーヴでうめき、坂道でためらひ、平坦な野と林間とを、素晴しい勇ましさで走りつゞけた、車室はだん〳〵一ぱいになつた。

東京驛に下りたつた時、彼女ははじめて今日これから本郷のアパートメントに歸ることの不便に氣がついた。たとひ一度は歸るにしても、そこに長居をしてゐたなら、依田老人の手が必ず廻つて來るだらう。

——何といふ恥知らず、あの年で——もうおつ付け七十ぢやあないの。

唾を吐きたい氣持ながら、心の中ではどんなに蔑視しても、その人の手が面倒くさく伸びて來る煩はしさを考へると、もうあそこには留まつてゐられないのだつた。それに今は、もう財囊も殆どつきてゐるし、あの老人の仕事を捨てるとすると、外にみいりの當てもない。當分また職業探しの不愉快な日がつゞくであらう——もう德惠子には、あのアパートメントの暮しさへ贅澤すぎるのだつた。

しかし、兎に角、一應彼女は本郷への電車を選んだ。

大都市は今や朝の活動に這入らうとしてゐた。電車は勞役者で充滿し、車道には、敏捷なタクシイトラック、のろ〳〵しい荷車、牛車のたぐひまでが絶え間もなく往き來してゐた。歩道を歩む人達は、男女ともすべて輕快で生々してゐた。ねむたげな瞼にさへ、却つて一種のたのもしげなものが感じられた。

——何をくよ〳〵することがあるだらう。あゝして、あらゆる人間が、みんな何か自分々々の生活の道を急いでゐる。私だつてもつと賢くやればこれまでのやうなへどろの沼には二度と落ちないでせう。

德惠子はアパートメントに戻る前に、神田で下車して、ある宗教團體が經營してゐる職業婦人の合宿所をたづねた。べにがらいろの褪せた木造洋館は、やがて彼女の目の前にあつた。

彼女はゆがみかゝつた玄關の柱についた鈴を押した。やゝしばらくして黑い法衣のやうたものを上に羽織つた、生白い、がつ〳〵な女性が出て來た。

女は無言で德惠子を見上げ見下した。

『部屋が開いてをりませうか？』

『えゝ』と、法衣の女は皺枯れた聲で、乾燥無味に答へた。

『ですが、私のところは履歴書が必要なのです。それに宗門の保證人が二人以上——』

德惠子は立ち去つた。

日はもう高く上りはじめてゐた。神田界隈を歩き廻つて、やつと、ある婦人寄宿舍を探し出したのは正午近かつた。

——翌日アパートメントの支拂ひをすまして、德惠子は神田今川小路の婦人合宿所に籍を移した。ここは明るく小ざつぱりした以前の部屋に比べると、まるで客間から書生部屋に移つた程荒れ果て、すたれ果てゝゐて、ふすまには穴があき、窓障子は破れ、北側に、おまけについ前に何かの大工場のトタン塀が立つてゐたから、晴れた晝間でも秋のたそがれのやうに陰氣だつた。アパートメントから持つて來

た椅子テーブルはひどくそぐはなかつた。彼女は苦笑した——

『もうこゝまで來れば、これでおしまひだわ。あとはトンネル長屋とかへても行かなければ——』

——いゝえ、それは彼女がどんなに氣がさで、勝氣であつたとしても、また多少人生に知識があつたとしても、まだ／＼、實生活の赤坊であることを示した呟きに外ならなかつた。人間は落ちるに止め度がある。ものではない。人間のために供へられてゐる墮落の穴の底は知れない。そしてそのおとし穴に一度おちかけたら、どこまで轉落し續けるか見當はつかないのだ。で、その一ばん底には、その底で、その蟻地獄の穴の主に食はれて亡びた者のみが知るに過ぎないのである。さういふ事を、少くも彼女の生活の記述者たる作者は豫感する。また多くの讀者も感知せられるだらうが、まだ二十歳そちこちの德惠子には分らなかつた。

德惠子が合宿所の人となつてから三日目の夜、隣りの部屋で、ひそ／＼と二人の女が話してゐた。破れ襖の向うの會話は、耳をふさがうと思つても、あり／＼ときこえて來た——

『私、これまで知つてゐるだけの人に手紙を出したのよ。もう遠慮も恥もいつてゐる場合ぢやあないものねえ——五十人もの人へ出して見たのよ——その人達はこの十年かそこらの間に、みんな立派な會社員や店の主人や藝術家になつてゐるんですの——だのに一人だつてハガキ一枚くれた者はないわ。あんなにあの頃は、さも私でなければならないやうなことばかり言つてゐながら——たつた三十五の私を、こんなに病み窶れたお婆あさんにしてしまつたのは、あいつ等だつた癖にねえ——何といふ奴等なんで

せう！』

『でも、あなたには華やかな淺草時代があつたのだから、人にも知られずしぼんでしまふ人達にくらべればまだしもいゝわよ』と、若い聲が答へた。

年よりのやうに皺枯れた、老けた聲が呟いた。

『私がパツとつまさきで立つて、足を高くあげてまはると、觀客席は階下も二階もざわめいたわ——男達の目はみんな氣違ひのやうに輝き、女達の目は黑くくすぼつたわ。私はあの頃は大ていの人間の心に火をつけてやることが出來ると思つてゐたの——でも、私にあつた力は身體の力だけで、藝ではなかつたから——身體の力はすぐにくづれてしまふから——今ぢやあ、きのふ逢つた田舍まはりの興行師さへ相手にしてはくれません。もうぢき、心臟が腐つてしまふか、頭へ毒が上つて氣が違ふかして、死んでしまふんでせうね。それはかまはないけど、それまでの月日がねえ——』

若い聲はなぐさめかねたやうに沈默した。

——德惠子はこの合宿所の人達が、自分とはあまり調子が違つてゐるらしいので、移轉して來ても隣室のあるじにも挨拶もしなかつたのだから、どんな女がそこに泊つてゐるのかを少しも知らなかつたが、この話できけば、昔、盛り場の踊り子として、相當の人氣のあつたものに相違なかつた。

『このごろ、時々夢を見るのよ。私がすつかり裸で、舞臺に立つてひどく亂暴に踊り出すの。すると花束がねえ、下から、上から、横から、まあ何千とふつて來るんだわ——そして醒めて見ると、きたない

この部屋で――』

――徳惠子は兩手で耳を蔽うた。彼女はたゞねむりたかつた。

翌日、彼女はまた職業探しをはじめる人だつた。身許をかくしてゐる身は、緣故をたよることが出來なかつたから、人にくらべて幾倍かの努力をせねばならないのである。

――徳惠子の不幸は加速度で深まつた。ある日初夏の俄雨に打たれて、濡れて歸つたのが原因で、一週間ばかり激しい頭痛と四肢の痛みに惱まされたが、床を離れるとすぐに心を煩はして來るのは醫藥の料であつた。かうした貧しい合宿所へ出入りをする醫者だから、慈悲深い心を持つてゐるとばかりは限らないのである。駈け出しの生若い醫師は、取れさうな相手から取らぬは損と考へてか、請求書に何の手加減も加へなかつた。

徳惠子はまだ着物や手まはりのものには昔の名殘りを止めてゐたが、金といふものは少しも殘つてゐなかつた。合宿所の婆あやは、彼女のプラチナの腕時計と束髪櫛をどこへか持つて行つて百圓たらずを作つて來てくれた。その足代は五圓だつた。併し、それで醫者の方もすめば、當分寢て食べるには困らないと考へた、彼女はうれしかつた。

幾らか心身に氣分が出たものゝまだめつきり窶れてゐるので、この姿で求職に奔走したとて無駄な氣がした。彼女は氣持に張りをあたへようと思つて、丁度その頃上野の美術館で催されつゝあつた海外美

術展覽會に出かけて行つた。

晴れ霞んだ、美しい午後だつた。もう夏が來たことを思はせる白い光は、丘の綠葉をあざやかな憂鬱で輝かし、すが〳〵しい、しかし、悲しげなひゞきを立てる微風は、多感な草生を吹きなびけてゐた。廣い歩道は輕快な夏帽をかぶつた男達や、涼しいパラソルの娘たちでにぎはつてゐた。時々、自動車が黑く光りながら走つて行つた。

徳惠子は美術館前まで行つて、切符を買はうとしたのだつたが、玄關の階段に立ち話をしてゐる四五人の上流婦人の姿に目を止めた時、思はず踵をめぐらしてしまつた。それはかつて彼女がゐたあの富豪貴族社會の社交界で、かなり親密にした人達だつた。

――あの人達は今の私と面とぶつつかつても分りはしないわ。私はそれ程變つてしまつたわ。でも、もし見付けられると面倒だ。

徳惠子は人氣のすくない小路に切れ込んだ。綠葉を透して來る日光が、地上に織出す光りの綾を踏みながら、しばらくさまよひ歩いた。彼女は前途に何等の當もなかつた。彼女はまるで他人事のやうに靜かに思ひつゞけるのだつた。

――女の生活といふものは、そんなに困難なものだらうか？　みんなが、何か不正なことを、穢らはしいことを、娼婦のやうなことを人知れずやつてゐるのだらうか？　あんなにみんな明るさうな、元氣のいゝ、誇りかな顏をしてゐながら――いゝえ、そんな筈はない。それなら、どうして私ばかりが、あ

んなにいやらしい目ばかり見なければならなかつたのだらう！　私にはきつと何かいけないところがあるのだわ――今度は、女達だけの世界で働きたい。探せば何かいゝ職業が見つかるでせう。

徳惠子は公園を下りた。そして少し歩きすぎて激しいかわきと疲れとを覺えながら電車に乘つた。須田町で、彼女は下りねばならなかつた。この十字街の裏手に、その後藥だけをもらつてゐる例の醫者の家があつた。

今やこの首都交通の中樞點は、雜沓の最中だつた。貨物の動きと人波の動きとの潮が、一ばん高まつた極點にあつた。通勤者等は、いはゆるラッシュアワーの物凄い喧騒に身を投じてゐた。彼等は一人でも押し退けて、乘り物に席を占めて、半日の勞働の疲れを忘れたいと願つてゐた。その競爭は眞劍だつた。

――首都が持つ心臟の動きともいふべきが、かうした十字街の現象だつた。それは進み行く車馬と行人とを、動脈的に吐き出さうとし、歸り行くそれ等を靜脈的に吸ひ込んで奥に送らうと跪いてゐた。しかしその二つの脈は、こゝでぶツつかつて、交通巡査の白手袋の瓣膜では十分に調節出來なかつた。

徳惠子は、電車から下りはしたが、この物凄まじい十字街の混亂の中を突つ切つて行く氣力がなかつた。

しかし、いつまでも路傍に突つ立つてもゐられないのであつた。

――徳惠子は初夏の午後の日がまばゆく射しつける交叉點に、病後のぐら〳〵する身體でたゝずみつづけてゐたが、そのまゝでゐても、その場に昏倒しさうな氣がしたので、思ひ切つて、少し往來の車馬が間遠になつたのを機會に、前かゞみになつて駈け抜けて行つた。

彼女が、今少しで十字路の電車道を渡り切らうとする時だつた。交通巡査の呼び子が鳴りひゞいて、停止標は廻轉した。彼女の進路と直角に停止してゐた電車、自動車の流れは、すべて先を急いで、激しい流れをなして動きはじめた。

徳惠子は躊躇した。彼女の疲れ目くらまされた頭は、この瞬間、進んでよいか、戻つてよいか、それともこのまゝ立ち止つてゐた方がよいか判斷力を失つた。彼女は頭の弱い女性ではなかつたが、今はあまりに昏濛してゐた。輕い腦貧血が發作して、膝がしらが力を無くし、心臟がおびえ波打つて、やがて、そのまゝそこへぐた〳〵と突んのめらうとした。

『あぶない！』

『どけ！』

『止まれ！』

――なぞといふ叫びが、どこか遠くで聞えたと思ふ瞬間、何やら堅い冷たい物體に着物が引つ掛かりズル〳〵と引きずられ、つゞいて、重たい、鈍いものが左の足の上を通過した氣がしたが、その時は、もう完全に意識を失してしまつてゐた。

十字街の交通は、この出來事のためにすつかり混亂した。

『轢いたぞ！』

『電車か？』

『自動車か？』

『女か？』

『男か？』

『子供か？　年寄りか？』

『いや、若い女で――鳩羽色のスカートが見えたつけ！』

――群衆はドヤ〳〵と駈け集まつて來た。その群衆を肱と肩でこづくやうにして、二三人の巡査が駈けて來た。

『どけ！　立つちやいかん』

――德惠子はもう少しで電車道をよぎり終らうとした時、スカートに何かゞ引つ掛かり、薙ぎ倒されたところを、通りかゝつた空タキシイに左の脛部を轢かれたのだつた。

彼女は横向きに、車道の乾いた石に蠟のやうに蒼褪めた頰を當てゝ倒れてゐた。帽子がとれて、豐かな髪が解けほどけてゐた。兩手は前に投げ出され、轢かれた足の、薄青い絹靴下がほんの少し泥に汚れてゐた、タイヤの跡なのであらう。

二人の巡査は電車と、自動車の運轉手にその場の容子を質しはじめた。

他の巡査が、不幸な犧牲の額に手をあて、胸を調べた。

『――いかん氣絶してゐる』と、若い、無經驗らしい彼は、制帽の下に大粒な汗をにじみ出させて德惠子よりも惡い顏色をしてゐた。

止つてゐた自動車のひとつから、中年の紳士が出て來た。

『醫者です。みて上げませう』彼は第一に轢傷を調べた。

『左脛骨々折――この足は、或ひはもう駄目だ――』脈を取り、瞼をあけて見た。

『しかし、何も心配はありません』彼はハンケチを胸衣囊から出して手をふいた。

『兎に角、應急手當を――』と、若い巡査が呟いた。

『何なら、私の醫院がついそこですから、この人を治療して見ませう。私はかういふものです』醫者は名刺を出した。

『あ、あなたが駿河臺の山田博士――』巡査は帽子の廂に手をあげた。

山田博士は名高い外科醫だつた。

德惠子は博士の自動車に舁ぎ込まれ、若い巡査が同乘した。かゝりあひの運轉手どもは他の巡査たちに引かれて行つた。群衆は散り、交叉點の交通は再び元に返つた。

明るすぎる午後の日ざしは、大路を輝かしつゞけてゐた。

警官立會ひの上、博士がくはしく診て見ると、徳惠子の怪我は、左脛骨々折の外に脊髄に打撲があつた。別に内部出血もなし、生命には勿論危險はないが、しかし、左足は早速切斷を必要とするとのことだつた。

この行路負傷者の身許を調べることが、その次には警官には必要だつた。彼女が着てゐたものゝあらゆる衣襲や、さげてゐたバツクがあますなく探されたけれども、手がかりは何もなかつた。

若い巡査は、相變らず額に汗をかいたまゝで、徳惠子のベツドの枕元にたゝずんだまゝ嘆息した。

『この若さで不具になるとは氣の毒なものですなあ――』

『この人は激しいヒステリー患者か、それとも病後に違ひない』と、博士は脈を取りながら呟いた。

『若い、美しい娘のくせに、あんまり頰がこけすぎてゐる。咽喉に目立つて衰へがある――きつとあの場所で眩暈がしたところを轢かれたのだ』

『手術には差し支はないでせうか？』と、巡査は、相手が、美しい女性であるための、特別の同情もあるやうに心配さうにたづねた。

博士は眉を皺めるやうにした。

『心臓が強まり、意識が回復しさへすれば――』

二人の醫員と三人の看護婦とは、すばやい手先で、徳惠子の負傷を、取り敢ず手當てをしてゐた。腫れ上つて紫色の血で汚された脛は、洗はれ、冷され、藥が塗られて、やがて繃帶でふと〻〻と卷かれた。

一方では、博士自ら注射器を取つてゐた。白い、蠟のやうな二の腕に一本、肋のあたりに一本、蘇生藥がさゝれた。博士は病人の胸にぢかに耳を當てゝ心音をきいてゐた。

『もう大丈夫――すぐに意識を回復しますよ』

――二分ばかりして、徳惠子はぼかりと大きく目をあけた。彼女はやゝしばし、あたりを眺めまはしたが、枕元に立つた見馴れぬ人達の顏を見分けると、事情を了解する前にまづ激しい驚愕と羞恥とに打たれたやうに飛び起きようとして、そして、肉體の痛苦に美しい顏をゆがめた。

『ぢつとして――ぢつとして――君はすこしばかり怪我をしたのぢや。ね、ぢつとしてゐなさい』

博士はいつた。

徳惠子ははじめて思ひ出したに相違なかつた――鎌倉からの歸京――神田の合宿所――病氣――上野公園――須田町の大雜沓――電車と自動車――

彼女のみひらいた目は再び光りを失ひさうになつた。

看護婦が、あわたゞしく赤酒を負傷者の土氣色の唇に押し當てた。赤い液體は蒼褪めた咽喉の筋肉をふるはして、さがつて行つた。

『しかし、我怪はわづかだ。安心したまへ』

『こゝは山田博士の病院で、こゝにゐられるのが博士です――安心なさい』と、若い巡査は慰めはげま

すやうにいふのだつた。

『ありがたう』と、徳惠子は呟いた。

巡査は報告をいそいでゐた。

『住所をきいてもいゝでせうか？』と、しかし、負傷者に悪い影響を及ぼすまいとするやうに、彼は博士にたづねた。

『大丈夫でせう』

巡査は、徳惠子をのぞき込むやうにした。

『伺つて置きたいが、名と所を――』

徳惠子は薄目をしたまゝ、かすかに答へた。

『麹町富士見町三十長沼徳惠子――』

『富士見町の長沼――では、男爵の――』と、博士がそばからいつた。

徳惠子は渾沌たる意識の中に、つい久しく使はなかつた本名をいつてしまつた。彼女ははつと氣がついて混亂した。

――いゝえ、神田今川小路の婦人合宿所にゐる、東京子といふ女だと、いひ改めようとしたが、もう遅いのだつた。

――意識の渾沌の中に、思はず、一度捨てゝ出た親の家を口に出してしまつて、徳惠子は常日頃の性質にも似合はず、ひどく狼狽して、やつとのことでいひ添へるのだつた。

『でも、宅へはどうぞ秘密に――すつかりあとで申し上げますけれど、私はもう長沼の家とは何の關係もない身體でございますから、私は今までたつた一人で暮してゐたのでございますから――』

彼女のさうした哀訴のやうな言葉は、居合せた人々に、めい〳〵何等かの想像を抱かせたに相違なかつた。成程、いはれて見れば、この行路負傷者は、たしかに上品な、優美な顔立をしてゐる――着物もさう上等ではないが、すぐれた好みを見せてゐる――でも、何となく、あまりに質素で、肉體的にも上流の令嬢とは思はれぬある衰へが來てゐる――醫者と巡査とは各々の職掌柄で、獨特な見地から觀察の目を向けた。

徳惠子は、その視線を恐れるものゝやうに見えた。

『事情があつて、たつた一人で暮してゐるのでございますから――』

『まあ、いゝです。安靜になさい』と、若い巡査は思ひやり深くいつた。

『さうだ、安靜が今の場合第一だ』

徳惠子は感謝するやうにうなづいて、そしてまた目を閉ぢた。

彼女の覺醒は、しかし、ほんの藥劑が無理にもたらした一時的なものに過ぎなかつた。打撃で痛められた脊髓は、博士が思つたよりもより以上手ひどくやられてゐたらしかつた。激しい苦痛が腦部を襲つ

て來ると同時に、脊骨が今にもくじけるやうに痛み、おさへることの出來ぬ呻きと一緒に、再び無自覺が彼女の魂を昏濛の中に引ずり込んだ。

むしろ、それは幸福だつた。目ざめてゐたなら、彼女はどんなに長沼家と自分とを、不覺にも今になつて二度と結びつけてしまつたことを後悔したであらう——。

博士は脊髄の打撲の方は、醫員の中の神經系統の專門家にまかせた。彼自身は、足部の傷をふたゝび丹念にあらためて見た。

『どうしてもこれは切斷手術を要するが、しかし、家の人達の意見もあるだらうし——』と、彼は呟いた。

『脊髄はかなりひどくやられてゐますよ。これはことによると意識喪失をさへ招くかも知れません』と、中年の醫局員は答へた。

——そこへ、一度出て行つた若い巡査が、甲立つた顔をして、佩劍をがちやつかせて歸つて來た。

『今、電話で長沼家に照會したのですがね』と、彼は腹立たしげな口調でいつた。

『金持なんてものはまあ、いはゞ獸だな』

『何をそんなに怒つてゐるのです』と、博士は青年の生無垢らしい表情を一瞥して微笑した。

『博士、あなたゞつて、お怒りにならずにはゐられますまいよ。長沼の電話に出た奴が、主人の意見だと傳へたのはかうです——成程、その娘は今でも家の籍には這入つてゐます。しかし、今のところ、別に

必要な人間ではないのですから、そちらでよろしくお計らひ下さるやうに、生きるなり死ぬなり始末がつけば、博士の方へは相當のお禮いたします。今日は養子を迎へるための祝宴でいそがしいから、ちよいと伺つてをられません——』

『ふうむ』と、博士はいつた。

居合せた一同は、德惠子の方を盜み見た。

意識を失つてゐるのはいゝ事だつた。

この巡査の言葉を、彼女がきいたら、恥に舌を嚙切りさへもしたであらう——。

『どんな事情があるか知れないが、殘酷きはまる——職權で本署に長沼新兵衛を召喚してやりませう』

と、巡査は激語した。

『いや、何か事情がありさうです。そつとして置いてやつて下さい。私が全責任を持つてこの娘を治療して見ませう』と、博士は思案のあとでいつた。

胸を噛む蠍

煤煙と水との西方都市にも夏らしい時節が來た。

高い、乾いた、しかし潮の香を帶びた微風が、都の上になびいた煙を吹き拂ふと、あざやかな淺藍色の空の深みがあらはれた。堀割の岸の柳の葉は綠が濃くなり、ほの赤いたそがれが來ると、街頭には薄靑を競ふ若い男女が新らしい流行を無遠慮に追ひ求めてゐた。

全く、幸福な境涯にあるものには、今が生き甲斐のある季節であつた。ビルディングの老商人さへ、白い眞新らしいスパツツがほしくなり、小さな小間使さへ香水のにほひを選ばずにはゐられなくなるやうな時だ。そしてそれが、あらゆる新らしさと珍しさとの王國のやうな若い大阪だ。唐物屋の店かざりは清楚を爭ひ、カフエといふカフエは街路に向けて扉を開いた。

晝間の活動がだん〳〵に終熄してゆく夕方が來ると、大きな商業都市は、舞臺の照明の光の色が、そのまゝの飾りつけをいろ〳〵な情緒に變化させるやうに、たそがれの灯の光で、まるで夢ましい歡樂の巷に變るのだつた。

心齋橋に近いとある橋角の、さうした夕方を身も心も輕くたのしげな夕べの散步客の人波にまじつて、一人の靑年が步いてゆく。あたりの群衆と比べれば、これはまたまるで違つた境涯にある人に相違なかつた。眞白な夏帽の間には、この人の汗と埃とにまみれた冬帽はとりわけ目立ち、厚い皺ばんだ背廣の

肩は焼け、靑年の心には一ぱん氣づかはれるワイシヤツさへ、汚れ膩つてゐた。疲れた腕に茶色の大形の抱鞄を抱き、重たげに靴を引ずつて、うなだれて步みを進める。

だが、やゝ顎髯の生えのびた、窶れ衰へた橫顏には、いはゞ行商人かとも見える風采に似合はず品があつた。漂つた目にさへあろひらめきがあつた。私たちはたしかにこの橫顏の線の美しさと、どこともなく漂ふ品とに見覺えがある——

それも道理、このいたましい落魄兒は、戀も名も、命さへもどうともなれと決心して、東の都から下つて來た城木その人だつた。

彼は例の消火彈外交員に採用されてから、一個二圓五十錢の不思議な爆彈を賣りつけると二十錢だけの口錢をもらふことになつて、その方面の仕事をつとめつゞけてゐた。消火彈といふのは、實際奇妙なはたらきを持つてゐた。小さな丸い玉で、その中には瓦斯發生機關が含められ、火中に力まかせに投じると、炎々たる煙をすぐに消すことが出來た。口べたな城木だつたから外の同僚のやうなボロい儲けも得られなかつたが、それでも、一日二圓位なみいりはあつた。

生きよう、生きつゞけようとする欲望は不思議なものだ。まるで世の中から隱れて、こんなみじめな、前途に何の望みもつなぎ得ないその日〳〵でも、やつぱし死ぬよりはましと見えた。彼は今までゐた世界の一切を忘れ、學問を忘れ、野心を忘れて、毎日小さな玉の賣り込みに骨を折つた。彼はだん〳〵生活意識がぼんやりして行くのを感じた。肉體とどうすることも出來ない疲勞を忘却するには、あの民衆

文人の戸田が教へた酒の外はなかつた。酒は身體の衰へを一時元氣づけてくれるばかりでなく、時々胸の底にきざして來る、あの激烈な追憶をも斷ち切つてくれた。

この夕ぐれも、城木はこのごろ行きつけのあるカフエに生きる爲に急ぐ人だつた。カフエで安物のウヰスキイを飲んで、一皿の大ぶりな肉を食べて、それから電車にゆられて堀江に近い貸間の二階に寢に歸るのが彼の希望だつた。

城木は橋を渡り切つた。橋詰に一人の夕刊賣の小僧が、けたゝましく鈴を握り鳴らしながら叫んでゐた。

『夕刊！　夕刊！　富豪令嬢の大負傷——大富豪令嬢の祕密がくはしく分る——夕刊！　夕刊！』

城木は耳にも止めなかつた。彼はもう長いこと新聞のページを繰ることさへやめてゐた。世の中を見捨てたものに取つて、社會世相を知つたとて何の役に立たう。

だが、ふと、ついそばを肩を押しつけ合ふやうにして歩いてゐた戀人同士の、娘の方が、はす葉な聲でほがらかに叫んだ——

『まあ！　長沼男爵の令嬢が怪我をしたんですつて！』城木ははつとして、蒼褪めて立ち止つた。

城木は夕刊賣りの腰にさげたビラ紙を眺めて、殆ど、聲を揚げて、その場に昏倒しさうになつた。ビラ紙には赤丸つきで次のやうな文句がしるされてゐたのだつた——

暴富長沼男爵令嬢の奇禍。

富豪家庭の内情暴露さる。

——娘達は口やかましく喋つてゐた。

『まあ、わからないものだわねえ——雜誌の口繪なんかに、つい先達てまで毎月出てゐたぢやないこと？』

『無理はないわ。隨分ひどい方なんだつてもの、男爵は——』

『ふんだんに勝手なことをした揚句なら、自動車に轢かれたつて何でもないでせう。新聞で見ると男を追駈けて家出をしてゐたんだつておやないこと？』

——城木は、さうしたお喋りを聞きながら、ぼんやりと突つ立つてゐた。

しかし、とう〳〵、夕刊賣りに近づいて、白銅をつき出した。

一葉の新聞紙は彼の手に渡された。ワナ〳〵ふるへる手で、橋の袂の灯の下でひろげて見た。

——何もかもが意外のことばかりだつた。

城木は德惠子が家出をしたことも、その後のことは勿論何も知らないのであつた。新聞紙は、多少のあやまりはあるとしても、概略を傳へてゐた。

城木の名はなかつたが、運轉手のなにがしに誘拐されて父母の家を出てから、さんざ身を持ちくづして、男から男へ渡つた上、とう〳〵あの日路傍の災禍に逢つたのであつた。

城木は記者の波爛に富んだ脚色をそのまゝに呑み込む外はなかつた。全身に強い悪寒が走り、激しい戦慄は四肢から力を奪つた。その場にヘタ〳〵と坐つてしまひさうな氣がして、欄干につかまつて、辛うじて取り止めた。

——何といふことだ！　何といふことだ！

城木はブル〳〵とわなゝきつゞけてゐた。

『富豪の家庭の亂脈がわかる夕刊！』夕刊賣の小僧は人氣の中心に立つて、得意げに叫びつゞけてゐた。

——城木は何を考へる力もなくなつてしまつた。彼は自分がどこにゐるのかそれさへも忘れてゐた。あたりは急に眞暗になつて足下に底知れない穴が開いてゆくやうな氣がした。

『どんなになつたつていゝぢやあないか、そんな浮氣娘！』と、唾を吐くやうに、一人がいつて通りすぎた。

城木は、德惠子の白い、美しい脛が、淺猿しく折れくだけた形を考へると、心臟が凍るやうな痛さを感じた。

——みんな貴樣の仕業だ！　みんな貴樣が意氣地ないからそんなことになつたんだ——あの晩、一緒にどこへか行つてしまつてゐたなら！

もう、どうにもなつてしまへ！

何もかもが、くらやみになつて、身も心も冷えつくしてしまつた。口はかわき頭は火のやうに熱した。

——忘れろ！　どうせ一度は忘れた世界ではないか！

城木はまざ〳〵と浮んで來た德惠子の面影を、一生懸命にこすり落さうとするのだつた。

——彼はやつとのことで欄干を離れた。

『飲みたいなあ！』城木は衷心からかわいてゐた。

彼は蹌踉としていつも行きつけの酒場にいそぐのだつた。

『ウヰスキイ！　ウイスキイ！』

——パタリと、酒場の丸椅子に腰を下して彼は繰り返した。

惡いことには、酒場のかしましい會話も、長沼家の珍らしい出來事に關することばかりだつた。そしてそれが城木の自棄と絶望とを何倍かにするのであつた。

『ウヰスキイ！　ウヰスキイ！』

——城木の醉ひは加速度に加はつた。

彼はとめどもなく、安ウヰスキイと曹達水とを咽喉につぎ込んだ。

城木はテーブルに突んのめるやうになつたまゝ、厚い、不透明な不細工なグラスを取り上げつゞけてゐた。もうこの頃は安ウヰスキイの刺戟も、急にはすつかり彼の頭をしびれつくさせはしなかつた。却つて後頭部が昏濛して來るに連れて、腦髓の心の方は澄み渡つた。

——彼は衣嚢から、たゝんだ夕刊を取り出して、醉ひ濁つた目で、もう一度讀み直して見た。新聞記者は長沼家の問題を、日本の著名な家庭に現れた、最も極端なブルジョア思想と近代主義との衝突——物質偏重と自由欲望との爭鬪と見なして、德惠子が遭難の日、彼女の父母の家では中條子爵の次男貞雄を養子として迎へる大祝宴が開催されつゝあつた事實を理解に富んだ筆致でしるしてゐた。

『——たとひ生みの子の一粒種でも、家出をして、街頭にみじめな行き倒れ同然になつて、不具になり意識の回復さへ覺束なくなつてしまつた娘は、もう新兵衛氏夫妻には必要はなかつた。彼等に取つては、血はつながらずとも、愛はなくとも、家門を高め、榮譽を增すに役に立つ、放埒者の少年公子の方がどれ程必要だか分らなかつたのである——貞雄氏は行く〳〵、適當な法律上の手續きを經て、長沼男爵家嗣子としての權利を獲得するであらう』

城木はさすが德惠子は肉親だけに、兩親の氣持を若い心ですつかり理解してゐたのを今更思ひ知るのだつた。さうした一家であるとすれば、彼女から一緒に家出をすゝめられた時、何の顧慮もなく同意してしまつても、それ程兩親は嘆きも悲しみもしなかつたであらう——たゞ、憎み呪つて、そして自分達の榮華慾に不便な娘をすぐに思ひ捨てたであらうに——

城木の目は、彼女の負傷を明細に記した文章の上に落ちた。一瞬間でその目はすぐにそらされた——彼は、彼自身の左脛骨が押し碎かれ、脊髓がねじまげられたやうな、肉體的な痛苦を感じ、そして同時に魂の底までをのゝきふるへた。萬一、その脊髓の負傷が思つたよりもひどくつて、永久に意識に明

瞭を缺くやうなことがあつたら！　足などはどうでもいゝ。あの激しい性格を持つてゐる以上は、彼女はさうたやすくはこの人生に負けはしない——しかし、心が敗れてしまつたとしたら！

彼は都巷を醜くさまよふ、不具でおろかな一人の女の姿を目にうかべた。

——そんなことがあるものか！

グイと、底までウヰスキイを呷つた。と、その時、つい近いテーブルを圍んで三四人の青年と、女給どもとの無遠慮な話ごゑが、さうしたことに注意するひまもなかつた彼の耳を打つた。

『結局、これでその娘が死んだところが、この人生から、一人の厄物が失くなるだけやがな。何も悲しんでやる必要もあらへん』

『そや。金持の自墮落娘なんざ、みんな自動車に轢かれてしまふがいゝさ。男のけつを追つ駈けて歩いた末が、襤褸下げて氣がついた時は遲いんぢや、僕は長沼男爵をえらいと思ふぜ、馬鹿娘なんざどしどし追ひ出して、立派な婿を取るといふのは立派な思ひつきやがな』

『平生、あたしたちをあんまり馬鹿にするからだわ。世間ぢやあたしたちばかり女の獸のやうに攻擊するでせう。こんなことがどし〳〵暴露すると、どつちが不貞操だかよく人さまにわかつていゝわ』

『お時さんは、戀人をお金持の令嬢にとられなはつた經驗があるよつて——ほ、ほ、ほ』

——城木は唇をかんだ。

彼に取つて、この世でたつた一人の女性は、その人を愛すればこそ、自分の身も心も捨てゝ、漂泊し

落魄し、人生のすべてを投げすてた女性は、今や、公衆の前に素裸にされて、罵られ、嘲けられ、踏まれ、うたれ、唾を吐きかけられ、あらゆる辱かしめを受けて横たはつてゐるのだ――これは、この小さなカフエの中での問題ではない。全國的に、あらゆる階級によつて彼女は全裸の身に凌辱をうけてゐるのだ――。

城木は頭をかゝへてテーブルにうつぶした。

――徳惠子への辱しめの言葉を耳にすまいと、兩手で頭をかゝへてうつぶした城木の氣持を、勿論周圍の人達は知る由もなかつた。

『金持の令嬢なんていふ奴は暇があつて、美食して、ゴロ〳〵してゐやがるから、きたならしい情慾にばかり燃えるんやね。いつだつてきまつて相手は運轉手だ、書生だ、出入りの洋服屋の手代だ――ちと僕等のやうな教養のある連中を買うて見たらよさゝうなものやが――は、は、は』

『この寫眞を見てみい。な、美しいがまるで品がない。成り上りの金持だ。血筋は爭はれんもんや』

『ほんたうに勿體ないわねえ、あたし見たいな操のかたい娘がカフエの女給で、こんな淫蕩な人が成金男爵の令嬢に生れ合せるなんて――神さまはめくらだわよ』

『へん、君が操がかたいつて――ほう、こりやあ驚いた』

『そりやあ兎に角、こんな令嬢づらこそ、山本、君のすごい腕で引張り出して、さんざ面白い目をさせてやつた上、それこそこんなでこぼこカフエでも賣りとばしやあよかつたにな――不具で馬鹿になつてしまつちやあ話にならんわい』

『惜しいことしたもんや。は、は、は』

――城木はます〳〵惡どくなつて行く罵倒の言葉をきいてゐるうちに、强烈な酒の醉ひと、激しい昂奮のあとの心の亂れとで、いつにない狂暴な憤怒をかき立てられて來た。それ等のすべての言葉が、ことさらに自分を目ざして、浴びせかけられでもするやうに感じられるのだつた。

――どうして僕はこんなに意氣地がないんだ。優柔不斷なんだ。そのために戀人をこんなみじめな身の上にした上、かうした不良少年どものあらゆる辱しめの中にさへさらしたのだ――もう我慢がならんぞ！　もう辛抱はならんぞ！

城木は頭の中で眞黑な渦がグル〳〵と旋轉するのを感じた。不可思議な、獰猛な氣分に衝き動かされて、ウヰスキイのグラスの緣をぱり〳〵と嚙んだが、玻璃の破片で唇が傷つけられ、眞赤な血が指を汚すと、おさへがたい狂氣にスツクと立ち上つて、今まで徳惠子を罵りつゞけてゐた一團の方をぐいと睨めつけた。

三人の贅しげな綿セルを揃ひに着た青年と、みにくい女給どもとは、さすがに呆つ氣に取られたやうに城木を見上げた。

『なんや？　あれは――酒亂かいな！　唇から血を出しとる』と一人が呟いた。

城木は大股に歩み寄つた。腰も脚も、まして頭はぐら〳〵としてゐた。彼は硬ばつて廻らぬ舌を一生懸命に動かさうと努力するのだつた。

『君達、言葉を少し慎み給へ』

『何やと！』と、年かさの一人が睨み返した。

『僕たちが何をいつた？　君から注意を受ける理由がないわ』

『もう少し言葉を慎むがいゝ――君たちは德惠子の――』と、いひかけて、彼は涙が突然あふれさうになるのだつた。そして、一倍狂暴になつた。

『おい、僕の前で二度と德惠子をけがすやうなことをいふと生かしては置けん』

城木は、完全に狂氣して行くやうに見えた。瞳は据り、唇は白ざめ、小鼻は大きくふくれた。

『何だ、こいつ氣違ひだな――西洋乞食みたいな服裝をして、成金令嬢と何の關係があるんだい――ふざけやがつて――おれたちを何だと思ふのや！』

『德惠子の名を二度といふと生かして置かんぞ！』と、城木はこはばる舌で繰り返した。

『面倒臭い！』

青年どもの中で、癇癪持らしい一人が、突然さう叫ぶと生ビールのコップを取つて城木を目がけて投げつけた。

『喧嘩を賣りつけるなんて生意氣な。毆つちまへ！』

コップがこはれたひゞきで、酒場中の眼があますなく注がれると、地廻りの青年どもはすつかり昂奮してしまつた。彼等は、

『毆つちまへ！』と、異口同音に叫んで立ち上り、城木を目がけて殺到した。

部屋隅にテーブルをはさんで大人しくベルモットをなめてゐた二人の客の一人が眉をひそめた。

『何だ、喧嘩か？　人迷惑な』

仲裁しようとしてか立ち上らうとするのを友だちは止めた。

『よせ。あの連中はこの近所で毛蟲のやうに思つてゐるカフェごろなんだ。手を出すな』

『しかし、相手はあんなに醉つてゐる』

『よせよ。さんざ毆られたら、あの醉つぱらひも正氣になるだらう』

で、誰も突發した喧嘩に干渉しようとするものはなかつた。女給どもは、恐怖と好奇心との入りまじつた表情をうかべて、勘定臺の下に身を寄せ合つた。その上、生憎、圓轉滑脫の世辭できこえてゐる、亞の禿げた主人も居合はさなかつた。

長く伸びた髮を額まで垂らして、眞青になつた城木が、物凄い目をして突つ立つてゐる方へ、ドカドカと突き進んだ青年の一團の先頭を切つた男は、つかんでゐたビール瓶を振り上げて、いきなり打つてかゝる。城木は辛うじて相手の肱を押へて顏をそむけた。

一人が胸につかみかゝつた。

『やい、外へ出ろ！　こんな狭いところぢやあ店の迷惑だ』

グイ〳〵と、みんなにこづかれながら、城木はカフエの横の扉から露地に出た。

薄暗い露地に出ると、彼等はもう用捨しなかつた。まるで餌食に飛びつく狼のやうに、三方から城木に躍りかゝつて、その場に突きのめさうとする。

城木は頭を垂れ、身を屈めて、取り囲まれた蹴球選手のやうに跪いた。彼は全くおのれを失つてゐた。幸ひに相手もビール瓶は投げ捨てゝゐたので、すぐに怪我をするやうなこともなかつたが、どんなに抵抗して見たところで、三人に一人。彼は忽ち突き倒されて、つゞいて、後頭部と、背中に、拳の亂打をうけた。誰かゞ下駄で蹴りつけた。

滅茶々々に打たれて、苦痛と息切れとに城木はすつかり弱まつてしまつた。彼はうつぶせに倒れたまま起き上ることも出來ずにゐたが、やがて感覺が全然混亂した。彼は意識を失つた。

『ざまあ見ろ！　氣違ひ！』

『僕達の繩張りで生意氣なことをすると今度こそ息の根を止めてやるぞ！』

扉口から幾つも頭が出てゐた。女給の一人は身ぶるひをしながら呟いた。

『まさか、死にはしないでせうねえ？』

『大丈夫だよ。あいつは氣絶したふりをしてゐるのさ。みんながゐなくなれば起きて逃げる』と、相手の一人は肩を聳やかして答へた。

『それにしても、お吉ちやん。僕達はもう歸るぜ。勘定はこの次だ』

――三人のカフエごろは、居殘つては都合が悪いと思つてか、相手の返事はまたずにそのまゝ夕闇の中に消えうせた。

人山が、だん〳〵倒れてゐる城木のまはりに重なつた。しかし、みんなは酔つぱらひの喧嘩だと單純に解釋してゐたので、うつぶしたまゝかすかに呻いてゐる城木を、進んで介抱しようとするものもなかつた。とりわけ、カフエの人達は、コツクも女給も、かゝり合ひを怖れて引つ込んでしまつた。横の扉は閉ざされた。

『薄情な――自分のうちの客ぢやないか』

なぞといふさゝやきも、群衆の中から聞えたが、さりとて自分では手を出すでもないのだつた。いづれ、巡査が來て始末をするだらう――

が、交番までは距離があつた。

すると、その時、通の方から、大分上機嫌に顔を染めた一人の青年紳士がやつて來て、群衆の肩越しに見下して、

『どうしたんぢや？　人殺しか？』

『なあに、酔つぱらひが打たれて腰が抜けたんぢや』

青年紳士は、輪の中に這入つて、靴の爪先で城木の肩口を輕くさはつた。

『君、起き給へ。苦しいのか？』

微醉の紳士はステツキの石突きと、靴の爪先とで、氣輕に城木の肩先にさはつて、

『おい、どうしたんだ。起き給へ、まさか死んでゐるんぢやあるまいなあ』

なぞと繰り返してゐたが、やがてのんだくれが、

『うゝむ』と、鈍く呻きながら、少し身をもだえて顏を上げたのを見ると、その横顏をのぞき込んで、ひどく吃驚したやうに叫ぶのだつた。

『おや！　君は！』

そして、身を屈めて、醉漢の肩に手をかけて引き起すやうにしながら、驚愕の目で見入つて、

『これは何といふことだ。君は城木君ぢやあないか！　人違ひぢやあるまいな！　おい！』城木はどんよりした目で見返した。

『おゝ、君か？』

『ぢやあ、やつぱり城木君なんだな。一たいこの始末はどうしたんだい？』呆れ果てたやうに、紳士は呟いた。

この紳士は、城木が大阪に落ちて來た當座、あの太田氏の事務所で邂逅して、そのまゝ別れて二度と

逢はなかつた舊友の安倍だつたのである。

『おゝ、君か？』と、城木はもう一度繰り返したが、自分でも、どうしてこんな人山にかこまれて安倍にだきかゝへられてゐるのか、咄嗟には理解が出來ないものゝやうに、たゞ、ぐる〳〵と瞳を廻してゐるだけだつた。

『兎に角、こんなことをしてはゐられない。立つて見給へ。歩けるかね？　今、乘りものを呼ぶから——こんなところは早くどかなければ——』

安倍はさう呟いて、まだぐたりとしてゐる城木を引き起して腕を肩にかけるやうにした。

『さあ、諸君、どいた〳〵』

安倍はぐた〳〵な城木をやつとのことでカフエの中に連れ戻し、椅子に掛けさせると、友人のために勘定を拂ひ、自動車を命じた。

『おい、君の家は何といふ不人情なんだ。自分の客が、喧嘩をして打たれて倒れたのをほつとくなんて？』と、安倍は女給どもを睨みまはした。

『でも、今晩はあるじが留守なものですから、——面倒が起ると、あとで叱られると思ひまして——』

なぞと、彼女等は辯解した。

——自動車はすぐに來た。城木は例の商品入れ抱へ鞄と一緒に荷物のやうに、積み込まれた。安倍はあとからどかりとクツションに腰を下した。

『えゝと、どこへ行つたものか――自家へもこの泥だらけな人は連れて行けず、――いゝわ！　僕の別莊の方へ連れて行つてやらう！』

彼は運轉手に難波の方にあるあの新しいホテルの名をいつた。金持のわがまゝ息子は隨分舊式な父母の家の生活に縛られることを嫌つて、三日に一晩はその小さなホテルに泊つて近代的な部屋と、寢道具と、食事と、飲みものとを樂しむのだつた。

『それにしてもまあ、どうしてこんな始末になつたのだい？』

安倍はぐつたりとうなだれて、車の動搖のたびに前につんのめりさうになるのを、やつと堪へてゐる城木の横顏に、いぶかしみの目を投げていつて、泥にまみれた背廣の肩をハンケチで拂つてやるのだつた。

『城木ともあらう男が、あんな安カフエの地廻りと喧嘩をするなんて――それに――』と、いひかけて安倍はいひ澁つた。彼は、

――それに、その服裝は？　その落ちぶれやうはどうしたのだ――と、聞かうとしたのだつたが、さすがにそれは口に出せなかつた。

安倍には城木がこの大阪にまだうろついてゐたのさへ譯が分らなかつた。まして、この零落の姿で、これ程の秀才を見出さうとは！　しかものんだくれて、たゝきのめされて、路傍にへたばつてゐる見苦しい態で見出さうとは！

自動車がホテルの前に着くと、安倍は、泥まみれな帽子の鍔をぐいと引き下して、たつたひと言もきかず、腕組をしてうなだれたまゝでゐた城木を顧みた。

『さあ、着いた。どうだね、ひとりで下りられるか？』

城木は長い昏睡から醒めたものゝやうに、頭を上げて、赤濁つた腫れぼつたい目で、吃驚したやうに安倍を見た。

『やあ、君か？』と、先程と同じ言葉を呟いたが、まるではじめて安倍と同乘してゐたことを見出してもしたやうに、今度は明らかに驚愕の色を現した。

『君はひどく醉つてゐたんだ――ひどく醉つてゐたんだ』

安倍はなだめるやうに、いかにも醉漢の心理を調節するに馴れた飲み友達のやうな調子でいつて、

『さあ、僕のホテルに着いた、下りよう。ひとりで歩けるかね？』

安倍は開かれた扉からはね下りた。そして、

『そら來た』と、助け下さうとして親切な手を差し伸べた。

しかし、城木はその手にはつかまらずに、思ひ切つて、兩手をクツションに突いて身をもたげた。下に降り立つと、ぐた〳〵とよろめいたが、それでもどうやら獨りで歩いた。

『何だね？　この財產は？　大分重い鞄だぞ』

安倍は城木の抱へ鞄を自分でかゝへて、先に立つて階段を上つた。

玄關のボーイは、むさい冬帽のまゝの、安背廣の、その安背廣の肩や腰やズボンの泥だらけな連をともなつて歸つて來た安倍を、いぶかしげに眺めて、部屋の鍵を渡した。

『何か飲みものを――』と、安倍はいひ殘して、二階に城木を導いた。

安倍の部屋は、彼自身の好みで、壁掛の織物から、絨毯から、棚からテーブルまで、奇妙にピカ〳〵したもので飾られてゐた。彼は不幸な友人を妙に腕木のそりかへつた、薄灰色の布で張られた肱椅子にかけさせた。そして、テーブルの上にあつた葉卷の箱を突きつけて、

『たばこはどうだ？』

城木は手をのばさなかつた。彼はしきりに何か考へをまとめようとするやうに、うなだれて見苦しく汚れた靴の爪先を眺めてゐた。

安倍は煙草に火をつけ、紫の煙を吐いて、兩手をズボンの衣嚢に突つ込んで、うなだれ屈した友人の前に仁王立に立つて見おろしてゐた。

彼はすぐには口を開かなかつた。

ボーイがカクテルを齎らすと、彼はグラスを城木にすゝめた。城木は、これにも手を出さなかつた。

『ぢやあ、冷たい水でも飲み給へ』

安倍は自分で水瓶の水をコップに注いだ。城木はやつと手を伸べた。

冷たい水が、ゴク〳〵と不幸の男の咽喉を流れ下ると同時に、彼はより以上うなだれた――安倍は友人の頰を涙が傳はり落ちるのを眺めた。

『身體が痛いか？　醫者の必要はないのかい？』と、安倍は內面的な問題に移る準備のやうに、まづ肉體的なことをたづねた。

『いや』城木は兩手の掌で顏をかくした。

安倍は唇をかんだ。

『どうしたのだ？　今夜のことはどうしたのだ』安倍はこらへかねて來たやうにもぞりとした口調でたづねた。

城木はいつまでも答へなかつた、兩手の掌をあまつた淚が、醜く指の間から流れ出した。

『今夜はもう僕に包みかくすことはなからう――君は今まで僕をすつかり他人に見てゐた。しかし、今夜の邂逅は、他人同士としてはあまりに不思議だ。心の殼を破りたまへ。僕は出來るだけのことをしようよ。な、城木君、僕だつて、なまけ書生の上りだが、いくらか、世の中も見て來てゐる。な、何を話しても笑ひもせぬ。驚きもせぬ。話し給へ』

安倍は、敎へなだめるやうに說きつゞけるのだつた。

『ねえ、僕には少しも解らない？　君のやうな人間が、そんな生活の渦の底におち込んでしまつたと

は！　酒なんか一滴も飲まなかつたのに、今夜の醉ひ方はあんまりひどい。君は一たい、大阪で、この都で何をしてゐるんだね？　一切合財僕には見當もつかないよ』

安倍は友人の身の成行に興味を持つといふよりも、より激しい同情と心痛との色をうかべて、眞實に問ひたゞすのだつた。

城木にも舊友の情は十分に感じられたに相違なかつた。彼は兩手で頭を押へて、苦しい涙をかくしてゐたが、むせび泣きのひまから呟いた。

『僕は氣が違つたんだ！　こんなざまになるなら、あの當時死んでしまへばよかつたのに！』

『あの當時？　それは一たい何時を意味するんだね？』と、安倍は城木の前の椅子にどかりと腰を下して、兩腕をこまねいた。

城木は涙によごれた手で、上着の衣嚢を探つて、こまかくたゝんだ新聞紙を取り出した。

『これを讀んでくれ給へ』

『ふん、今夜の夕刊だね？』安倍はまだ夕刊を讀んでゐなかつた。彼は素早く全紙面に眼を通したが、社會面を一瞥した時、さすがに驚きの聲を揚げた。

『ほう！　これは！』安倍は無言になつて、眉根を皺めて熱心に讀みつゞけた。

『ふん、ぢやあ君は、德惠子さんに失戀して大阪へ來た人だつたのかい？』

『その新聞では眞相が十分でないのだ』と、城木は答へた。

『あの人は長沼家に反抗して、僕と一緒に家出をしたいといひ出したのだが、僕はそれに應ずるわけに行かなかつた――僕はあすこの家に、あまり重い恩義の荷を背負つてゐる氣がしたので――で、僕は戀も位置も捨てゝ、この都に逃げて來た。丁度君に太田さんの事務所で逢つたころ――僕は弱すぎたのだ。僕があの時もう少し强くなることが出來たら、德惠子はこんなことにはならなかつたらう――』

安倍は新聞を膝に置いたまゝ、ぢつと考へ込んでゐた。

『昔から君は、あんまり物事に大事を取りすぎる方だつたからなあ――だが、今になつて見れば、こゝまで落ちてしまつたことが、君の一生には、却つて利益かも知れない――あゝな窮屈な富豪の家で、一生陰武者をつとめるより、また勇ましく、新奇な道に歩み出して、自由に手腕をふるふがいゝさ。何も歎くことも、悲しむこともありはしないよ』安倍はどこまでも友達が中心だつた。德惠子自身の不幸な成行きについては、別に心も煩らはしてはゐなかつた。

が、城木はそれとは反對だつた。彼は今は自分の身の上なぞはどうでもよかつた。自分はもう生活的にとうに亡びてしまつたものだと考へてゐた。彼には彼女の打ち碎かれた魂の痛みが、轢き折られた白い美しい軀の痛みが、わが身のことより痛切に、マザ〳〵と感じられた。

――彼女は青木に誘拐され、辱かしめられたと新聞は書いてゐる――と、城木は心にうめいた。だが彼女をさうした淺猿しさに騙り入れたのは、外でもないこの自分のやゝ口が卑怯だつたからだ。

城木は德惠子の貞潔がすでに汚されてしまつてゐるとしが思はなかつた。で、憎みは二倍にも十倍に

もなつた。

『君はあんまり自分を責めてはいかん』と、安倍はいつた。

『僕にいはせると、君はこの問題には、あんまり責任はないと思ふがなあ。第一、この新聞も、君のことを書いてはゐないではないか――君としては、一度戀し合つた彼女だから、いろ〳〵同情もするだらうが。しかし城木、女性といふものは、そんなに信頼してやるべきものでもないのだよ。女性の心はそんなに永續的なものを求めてはゐない――恐らく、君としてさう責任を感ずる必要もないと思ふが――』

婉曲な言葉ではあつたが、安倍もあのカフエの地廻り連中と同じく、德惠子をありふれた富豪の獸々つ子娘と考へてゐるらしかつた。

それが、今のところ、いはゆる輿論には違ひなかつた。

城木はもう怒る元氣も、辯解する氣力もなくなつた。

安倍は新聞をかたはらに置くと、腕組になつて、城木のうなだれた姿をみつめつゞけた。

『勿論、君としては感情的には大打擊だらう――しかし、どの道一度捨てた世界だ――うむ、それはこんな場合が來れば、その女を二度捨てたといふことを、まるで罪惡でゝもあるやうに思ふだらうが、しかし、そんな氣持に打ち負かされては駄目ぢや――どこまでも、自分を守らねば――兎に角一度思ひ捨てたことに、何もいつまでも關係してゐたら限はない――酒を飲むのはいゝさ。しかし、酒は單なる快

樂でなければならん。そのために、今夜のやうに自己を亂してしまつては――』

全く、驚くべき境涯の變化だつた。かつての安倍はどのやうな男だつたらう。大學時代はいつも城木のノートをたよる無頼の書生で、卒業成績もびりだつた。そのかはり下谷や湯島の花柳街と來ては隅から隅まで知つてゐた。大學を出てからも、安倍こそ恐らく『酒の申し子』ではなかつたか？　その男が今、さも勿體らしく當時の篤學の秀才城木の前に坐つて、飲酒の功過について說いてゐるのである。

だが、さすが、安倍も、ちよつと自分を顧みた風で苦笑した。

『勿論、君から見て何倍か僕は酒を飲む。が、僕は今もいふ通り、たゞ快樂のため飲むのぢや。自棄して醉ふなぞとは、全く君にも似合はんよ――それといふのも、君があんまり、自分をひとりぼつちにして置くから、そんな自棄の狀態になるのだ。君は僕をまた昔の獸々つ子書生と思ふとるかも知れん。しかし、僕だつて、もう變つたぞ。人間の惱みも苦しみもちやんと理解出來るさ。なあ、僕のやうな人間でも、これからは相談相手と思つてくれ』と、安倍は例の毒のない調子でいつて、

『それにしても、君は今、どんなことをしてゐるのだね？　どんな職業に從事してゐるのだね？』

城木は職業を恥ぢ隱してゐるひまなぞはないのだつた。

『今、消火彈販賣の外交をやつてゐるのだ』

『え？』と、安倍は目をみはつて、

『あの火の中に投げると消えるといふ爆彈みたいなものか？　僕の家でも先達て多少買ひ込んだらしい

が、あれは君が賣りつけたのかい？』

『いゝや、それはほかの外交員だらう』と、城木は無器用に答へる。

安倍はすつかり呆つ氣に取られた風で、

『消火彈の外交とは、それはまた奇拔な職業を選んだものだなあ。いかに大阪が狹いからつて、もう少し氣の利いたことが見つかりさうなものなのに――何だつて僕達のところへ相談に來てくれなかつたのだね？』

『僕は誰からも身を隱したかつたので、知つてゐた世界からは――』

『詰らんことを考へたものだ。一體君はもつと自由に、もつと强くなる必要があるよ。そんな風にねぢけた考へを起すやうでは駄目だ。當年の秀才を玉なしにしてしまふ。しかし、かうして一度僕が見つけ出した以上は、もう大丈夫だ。もうのがしはせん。君は今度僕から退かうとしてはいかん。それは僕の友誼が許さん』

城木は安倍のやうな男から、さも今後の保護者として自ら任じてゞもゐるやうなことを聞かされても腹も立たなかつた。それどころか、心の苦痛をたとひ上つらだけでも訴へ得る人を見出したことが、どれほど心ゆかしになつたか知れないのだつた。

安倍はちよいと考へて、立ち上つて、

『城木、まあこつちに來給へ。顏と手の泥を洗つて、それから着物を着かへるがいゝ。そして、折角の

邂逅を祝して、どこか暢氣なところで祝杯をあげよう――キナ〳〵し給ふな。魔が差す！　魔が差す！』

城木は安倍の導くまゝに、まるで去勢されたものゝやうな力無さで次の寢間に行つた。そしていはれる通り、顏や手を洗つた。彼は鏡の前に立つた時、われと顏をそむけた。鏡の面にある顏は、まるで地獄から來た使でゝもあるやうに蒼ざめ、こけ、目は空洞のやうに落ち窪んでゐた。

安倍はトランクを開け、セルの着物と同じ羽織を出していつた。

『さあ、着かへ給へ』

安倍は城木に着物を着かへさせると、人のいゝ眼付で、見上げ見下すやうにして、

『は、は、やつと昔の城木らしい姿になつた。君には君が選んだやうな職業や生活はすつかり不向きなのだ――僕が逢つた以上、舊友としての責任で、屹度君に適はしい世界へ連れ戻さにやいかん。どうして君はそんなに自棄になつたのかなあ――それといふのも今まであんまり用心深く、自分を殺して生きすぎたからだよ。これからは、自由に君自身の特長を發揮しなければ――君の才能で、明るい世界に突き進めば、どんな位置だつて、どんな財產だつて、どんな女性だつて得られるのだ。古い世界なんぞにいつまで拘づらふ必要があるものか！　さあ、君はもう蘇へつた。そこで、再誕の記念に一杯やらう。帽子は外で買へる。下駄は僕のをはき給へ。兎に角、もう僕は離しはせんぞ』

――城木は部屋に戻つて、ぼんやりした心で椅子に腰を下した。德惠子のもとを立つて以來の半年の

あわたゞしい變遷が、螺旋形の長い渦卷をなして、ぐるぐると目の前を通りすぎた。すべて無連絡で、無目的で、彼自身にもその中から意味を求めることは出來なかつた。たゞ苦痛と艱難との記憶だけが、深刻によみがへつて來るだけだつた。

――僕はどうしてこゝにゐるのだ？　そして、これから僕はどのやうに成り行くのだ？

彼はあまりに明るすぎる部屋の中で、ぐつと目を瞑つた。

ほんたうに、城木の半生は、物おぼえが付いて以來、そも〳〵の少年期から、徹頭徹尾自我が失はれた生活といつてもいゝのだつた。他人の手に育てられ、他人の保護で敎育され、他人のために働き、戀さへもつらぬく力もなく、ひたすら外部から迫つて來る運命の波に押し流されて生きて來たゞけだつた――今も彼は、自分の無意識の間に、舊友の手の中に救はれて、舊友の着物を着て、舊友の部屋に坐つてゐる――。

城木は自分を怒る氣力も、笑ふ氣力もなかつた。

――このまゝ死んでいゝのだ。と、彼は心に呟いた。過去の一切の記憶は、思ひ出すさへ呪はしかつた。そして未來も、恐らくこのやうな無氣力な狀態でつゞくだらう！　それは死と、さまで隔たつた世界ではないか！

城木の暗澹たる憂鬱をさとつたやうに、安倍は部屋隅の鏡に向つて、新らしいネクタイを結びながら快活に話しかけた。

『しかし、運命といふものは不思議なものだなあ！　君のやうな卓越した頭を持つた男さへ、逆浪にまかれゝば生きることさへ困難になる――が、一度それが順調になれば、どんな困難だつて、一飛びに越せるのだ。とに角、うなだれてゐては駄目だよ。男は頭を上げて突き進むのだ――君は僕を、いつまでものらくら者のやうに笑ふだらう。しかし、僕のやうなのらくら者でも、今度は決心してゐるんだぜ。僕はおやぢに金をもらつて近いうちに支那へ行くつもりなんだ。あるアメリカ人が持てあましてゐる小さな金鑛を掘らうと思ふのだ――どうだい、僕にしては中々の決心だらう。金持の祕藏息子の、のらくら者としてはね。しかし、男は三十の聲もさう遠くないと思ふと、ぢつとしてもゐられないからな』

そして、雪白のハンカチを胸衣嚢に突つ込むと、帽子を取つて、彼は城木を促し立てるのだつた。

『さあ、出かけよう。今晩は君にひとつ京都でも紹介しよう。徹宵して大いに飲まうよ。飲みながら、君の前途も考へようぢやないか。酒つて奴は平生は思ひもつかない、うまい考へを持つて來てくれるものだ。兎に角、君が酒飲みになつてくれたといふのはたのもしいよ。は、は、は』

安倍は鈴を押して、ボーイに自動車を呼ばせた。

天滿の停留場まで行く間に、安倍は新らしい夏帽まで城木のために買つてやつた。彼は衰へ屈した友人をはげますやうに、他愛のないことを一人で喋りつゞけてゐた。

美しい初夏の夜だつた。まだ宵の口の都は、あらゆる美しい光りと色とで輝いてゐた。城木にはさうした輝きが何のために、誰のために輝いてゐるのかいぶかしく感じられた。

——京都行の汽車は割合に空いてゐた。二人は並んで腰を下すことが出來た。

安倍は何かと、例の快活な調子で喋りつゞけてゐたが、城木がさつぱり元氣がないので、これもやがて默つた。

月の無い夜で窓の外は眞暗だつた。沿線の小都市の灯の色は、まるで血のやうな赤さで明滅した。城木はぢつとさうした夜の色をみつめつゞけた。

——僕はどこを目的に、誰と一緒に行くのだ——いつも〳〵、どこを目的に歩いてゐるのだ？

彼の胸は、深い暗い夜のとばりのかなたに、白く、ほのかに、遠い不幸な戀人の姿を見るのだつた。戀人は悲しみと惱みとに打ち碎かれて、そして瞬きもせずこちらをみつめてゐる——だが、それにも拘らず、城木自身はその人の面影から、更に遠く逃げよう逃げようと跪いてゐるのであつた。

目を閉ぢたが、德惠子のまぼろしはいよ〳〵はつきりとするばかりだつた。新聞紙上で讀んだ彼女の遭難のデテールは、こま〴〵と、まざ〳〵と目によみがへつて來た。

——あの女を墮落させたのは僕だ。負傷をさせたのは僕だ。不具にしたのも僕だ！

『今夜は素晴しい美人どもを見せてやるぞ！』と、その時、安倍はあたりの人達を微笑させる程の高調子で喋つてゐた。

『君の戀人がどんなに東女としての美しさを持つてゐたとしたところで、京美人のしとやかさもまた

捨てがたいと思はせてやる。古傷は新らしい血で洗はねばならんからな。は、は。君ならきつと、僕を振りとばした絹菊のやうな女をでも戀させるかも知れないよ。全く女といふ存在は不思議なしろものぢや。君のやうな見るから弱つたらしい人間が彼女等の世界では成功して、僕のやうな男性的な奴は、いつも馬鹿を見るのだ。は、は。絹菊の奴は、僕をどんな無賴漢に對するより輕蔑の目で見るのだ。でも、全くあの女は美しいぜ。君だつて、僕が半年ばかりの間、まるで熱病にかゝつたやうにボンヤリしてゐたのに何の無理もないことを發見するだらう。戀は疫癘だと、たしかダンヌンチョかゞ言つてゐた。戀するものは一種の病人だと菊池寛はいつてゐた。病氣にせよ、なか〳〵面倒なものぢや。四百四病の外に戀の病を見出した日本の賢人は、たしかに經驗家だつたのだなあ』

安倍は一度やめた饒舌をまた弄し出した。

しかし、もう京都だつた。目ざすステーションは目の前にあつた。

安倍はすぐにタキシイを呼んだ。

『先斗町ぢや。いゝか』

——先斗町でも、一二を爭ふ大きな料亭に二人は這入つて行つた。もう大分遲かつたが、まだ火を落すには間があつた。

安倍は座敷に導かれながら、せつかちに仲居に命じた。

『料理もうんとうまいところを——藝妓もうんと美しいところを——とりわけ絹菊を忘れちやいかん

ぞ』

『ほ、ほ、安倍はんかて、いつもせはしないお方や』

黒い加茂川の流れに、美しく灯がうつゝて、長田幹彦を醉はせた夜色は、あらゆる初夏のなやましさをこめて漂つてゐた。

安倍は思ひ浮ぶまゝを口にせずにはゐられない人間のやうに見えた——

『すべての存在には、みんな意義があるものだ、どんなものをも蔑視することも、憤ることも出來ん。この最も不生産的な花柳街といふものが、何のために存在しうるか？　それはもう理窟ではないのだ。僕の解釋では花柳街といふものは、人生の苦痛の垢を洗ひ流すための大きな、ひどく大きな湯槽なんぢや。人間は適度にこの生温かい湯を浴びてぐつたりした魂をよみがへらせにやならん。君はこの世界が却つてわれ〳〵に毒と惱みとを與へることもあるといふのかね？　どんなにきく溫泉でもそりやあ同じぢやないか？　湯あたりといふものもまた、怖るべきものには相違ないよ』

季節の料理が出ると前後して、だん〳〵藝妓舞妓が集まつて來た。

しなやかな線、いかつげな線、激しいきらゝかさ、澁いきらゝかさ、金と銀と朱と綠と交錯——輝かしい紅燈の灯影に、微妙な美を織出して、めい〳〵の女たちはめい〳〵の媚で人の心を捉へようと、意識的にまた無意識的に、いはゞ彼女等獨得の蜘蛛の巣のやうなものを放射した。

無特長な、生人形のやうな冷たい美しさを持つた、例の絹菊といふ女は、べつたりと安倍の傍に坐つたが、なる程この人の胸に戀の火花を煽るには、なか〳〵手間がかゝるに違ひなかつた。

『な、これが京女ぢや』と、安倍はあけすけな態度で城木に話した。

『見い、外の連中を——ソラ、そこに坐つた東京から上つて來た笹彌なんていふ江戸ッ兒は別としてもな、その小さい舞妓たちだつてもう化粧の工合にも、着つけの好みにも、いや、目の動きや、唇の色にまで、古い京都はありやせんがな。みんな東京好のみになつてしまつた。みんな生々とはして來たよ。だが、もう大抵故郷を忘れてゐるんぢや。そして、歌へば、清元ぢや、歌澤ぢや、江戸小唄ぢや、だが、僕は京へ來れば京を求める——純粹の京をな。ソラ絹菊、京女の健康を祝はう』

安倍が突きつけた杯を、貝割葉のやうな爪のひどく美しい手で絹菊はうけた。そして輕く干して、口紅でうつすりとあかく染まつた緣を、器用に杯洗ですゝいで返した。

安倍はすつかり上機嫌で、あまり杯に手をつけぬ城木を顧みて紹介した。

『こちらはな、あんまり東京で女に持てたので、こんなに窶れて逃げて來た男なんぢや。もう激しい近代女は澤山と、女のげつぷをしとるんぢや。そこで君たちも、この男があはれと思ふなら、あんまりそばへ寄らんがいゝぞ、は、は、は。ところで城木、女は澤山としても、酒は飲めよ、僕といふ監督がゐる前なら、いくら飲んでもかまやせん。さあ、この男の杯にあとから〳〵つぐがいゝ』

『まあ、この旦那はん、そないに強うお見えなさらんが——』と、半信半疑で呟いて、仲居が酌をする。

『ところが、見かけ倒しの奴ぢやで――』と、安倍は仰山にいつて、
『酒なら三升、ウキスキイなら二本といふところが、まあ、ほろ酔ひで丁度いゝといふ始末だ』
『馬鹿な』
城木は苦笑して、それでもつがれる杯は片つぱしから空けて行つた。彼は安倍から話しかけられて、一々、ふさはしい答へをしようと試みるのだつたけれども、それが出來なかつた。まるで木偶のやうな自分を見出だす外はなかつた。彼の心境にはあまりかけ違つた周圍だつた。一切の美と色彩と輝きとは、彼には、悉く無意味だつた。幻想的なビラ繪をながめてゐる氣持さへも興へなかつた。
――いつもの僕なのだ、何のはつきりした目的もなく、だゞぼんやりと坐つてゐるのだ、それでいい――
彼は自らあざけつて、そして杯だけをむさぼる外はなかつた。
その城木を、かたはらからぢつとみつめてゐる一人の女があつたが、それは安倍が東京から下つて來た藝妓だと説明した笹彌といふのだつた。笹彌は、全く外の女達とは、柄の好みも化粧も違つてゐた。それは、いはゞ下町藝者が、だしぬけにそのまゝ祇園に駈け込んで來たといふやうな工合で、水に浮いた一滴の油のやうに感じられた。
その女は、明らかに城木に興味を持つたといふ風で、彼に近づいて、齒切れのいゝ江戸ッ兒辯で、
『ほんとにあなたは見かけによらない上りつぷりね。さあ、お酌』

城木はどんよりした目で、意味もなく相手を眺めて、注がれた杯をくいと飲んだ。
『頂戴』笹彌は杯をもとめた。
安倍はお菓子のやうに綺麗な舞妓と、夢を見てゐるやうな眼付の絹菊との間にはさまつて、肥つた仲居と芝居の變り目の見物の約束をしてゐたが、ふと、城木の横顔をぢつとみつめてゐる笹彌に氣がつくと、突然、カラ〳〵と笑ひ出した。
『は、は、は、こいつはいゝ。こいつはいゝ。は、は、は』
『何どすえ？　そないに笑ひなはつて？』と、仲居が、キョトンとした目で尋ねた。
『は、は、は。全く以て、こいつはいゝよ』と、安倍はなほも笑ひつゞけて、
『まるで二人の亡命者が、外國で邂逅したといふかたちぢや――なあ、まあ見い。笹彌がさもなつかしさうな眼付で城木を見とる、無理もないよ。この男だつて、笹彌と、あんまり變らん事情で、上方に落ちて來た身體ぢやものなあ』
笹彌はニツコリともしなかつた。彼女はいはゞ流れ渡りの花柳人の敏感さで、無口な城木の憂鬱に、何か祕密なものが隱されてゐるのを感じたに相違なかつた。
『もうひとついたゞくわ』と、彼女はいつた。
城木はすぐに干してやつた。

『こいつはいゝよ――二人とも人見知りをせんところは感心ぢや』と、安倍はまだ笑ひつゞけてゐたが、『同氣相求むるといつて、怖ろしいものぢやな。一たい、この城木といふ男はな、僕とは白いすぢの帽子を冠つてゐたころからの友人でな。僕とは違うて、そりや秀才だつたんぢや――うんにや僕とて凡才ぢやない。は、は、千人に一人といふ僕ぢやが、この男は萬人に一人の出來だつたんぢや。それがまあ、どないな魔が心にさしたことかなあ、女のために――女にほれて〳〵、どうにもならん程ほれて、それを堰かれたものだから、そら、失戀といふことになつて、相手は身を投げる、この男はもう世の中をあきらめて、明日は高野に上るというて上方へ落ちて來たんぢや。何と、あはれな話ではあらうがな。笹彌だつてさうだろ？　この女も嵯峨野で尼にならうと決心して、京へ來て、ついこの祇園に足を止めたんぢやといふ話ではないか。そこで城木も、もう高野や叡山に上るのはやめにして、笹彌を學んで、もうこの土地で暮したらどんなもんぢや？　え、城木？』

安倍は大分まはつてしまつて、べら〳〵と出鱈目に喋り退けた。

みんなはてんから冗談にしてしまつて、

『まあ、何といふたのもしい方どすやろ』

『今どき、お芝居の戀人見たやうな方どすえな』なぞと、笑ひさゞめくのだつた。

城木は相變らずだまり込んで、背のあたりを青くして、その癖、杯だけは重ねてゐた。

仲居のひとりが、さすがに氣にして、

『笹彌はんそないに上げて――』と、いひかけるのを、安倍は奪つて、

『いゝんだよ。今夜はこの男を死ぬまで醉はせたいのが僕の希望なんぢや。僕はこの男から、これまでの何も彼もを忘れさせてやりたいのぢやから――城木、飲め、さあ、僕も注さう』

安倍の言葉には、さすがに友情がこもつてゐた。城木は醉ひが昂じて、却つて澄んで來た目で、安倍を眺め返して冷たく笑つた。

『有難う』

――酒席が大分亂れて來た。女同士がべちや〳〵と止め度なく喋り出して、そして夜が更けて行つた。

安倍はプラチナの腕時計をちよいと眺めて、

『さあ、そろ〳〵席をうつしていゝ頃ぢやな。差し支へない妓達だけ、これからそこいらに遊びに行かうぢやないか――』

だれも、否むものはなかつた。初夏のこの美しい夜を、みんなは少し歩いて見ようといふ氣にならずにはゐなかつた。

『城木、歩けるか？』

『大丈夫』

――どうともなれ。と、城木の土氣色の唇がいふやうに見えた。

城木の足もとを氣にしながら、自分の方が少し千鳥足になつてゐる安倍を先き立ちに、一座はぞろぞろと通に出て行つた。舞妓のひら〳〵や、だらりの輝きが、ちら〳〵と軒燈にはえて、だらしのない足音が、往き來の人を振り返らせた。安倍は無遠慮に絹菊の手をつかんで、まるでステッキでも抱くやうに小腋にかゝへるやうにしてゐたが、ちつとも醉つてゐない彼女は、例のおつとりとした眼付で、平氣で歩いてゐた。

城木はふところ手をして、一ばんあとからついて行つた。例によつて何の中心もなく、望もなく、ただあたりの動きにまかせて動いてゐる張のない心であつた。醉ひは妙によどんでしまつてゐた。頭の心がちら〳〵と燃えるやうな感じがして、動悸が不整に打つのが自覺されるだけで、手足は氷のやうに冷え切つてしまひさへしてゐた。

その側に、笹彌が引き添うて歩いてゐた。彼女は江戸前に褄を高く取つて、少し蓮葉に卷煙草をふかしながら、時々、城木の方へ目を送るのだつた。

『大丈夫？　何だか元氣がちつとも無いぢやないこと？』と、彼女はさゝやいた。

『えゝ、大丈夫』と、無器用に答へる城木に、彼女は新らしい卷煙草を吸ひつけて渡した。城木は殆ど喫煙癖を持たなかつたが、それでもいはれるまゝに無意味に煙を吐いた。

先に立つた安倍の一群は、なか〳〵にぎやかだつた。初夏の深夜の紅燈街は案外にひつそりしてゐた

ので、はゞかりのない彼の笑ひ聲と、女達の甲高な叫びとが、一種の谺を含んでひゞくのだつた。

安倍は、少し引つ込んだ、洒落た構への前で、足を止めて振り返つた。そして城木と笹彌を待ちうけるやうにして、

『よう、御兩人――ちよいと、道行きといふ形だなあ』と、笑つたが、

『この新店のおかみには、少し義理があるんだ。ちよいと附き合つてくれ給へ。まだホヤ〳〵の新店なんだ。君達好みの東京風で賣り出さうといふんでね』

安倍達は意氣な丸ポチヤが庭の綠に煙つてゐる小門を這入つた。東京辯の切れる女中が出迎へたあとから、安倍の大きな聲を聞きつけたと見えるおかみが飛び出して來た。

東山の、のんびりした姿が、朝はさぞ良い眺めを見せるだらうと思はれる二階に一行は導かれた。

『何？　もういゝ程にせいだつて？』と、安倍は懇意な仲居が忠告するにもかゝはらず、

『酒はこれからぢや。酒は夜が更けんとまづいものぢや。今夜はこゝでよつぴて飲む。何も因果と、みんな附き合へよ』

城木に取つては、何の興味もない、徒らに賑しい會話がとりかはされてゐる間、彼は例によつて默々と杯をむさぼつてゐた。酒が變つたせゐか、今度は醉ひがおもてに出て來る氣がした。夕方以來の惡醉ひが、堰を切つて來るやうに感じられた。

安倍も、見る〳〵大醉して來て、舞妓をつかまへて、大阪流のダンスを敎へてやらうなぞと、フラフ

ラと立ち上つて踊り出しさへした。さうした騒々しさが、一倍城木の心の酔ひを煽つた。

何だか、胸ぐるしくなつて、手水に立つての歸りに、二間ほど離れたところに、暗い小部屋があるのを見出すと、義理にも元の酒席には戻れなくなつて、彼はその部屋に這入つて冷たい疊の上に打ち倒れた。火のやうにほてる頬を、その冷たい疊につけると快かつた。

ぐつたりと、長々と寢そべつたまゝ、彼は、自分をなくした。昏々たる眠りがやつて來た。

——彼はその深酔ひの眠りの中で、夢を見た。何でも、若々しい美しい娘とたつた二人で、けはしい山を攀ぢ上つてゐた。息苦しく胸をはずませながら、どうやら頂上までたどりつくと、怖ろしい颱風が吹き荒れて、手を取り合つてたゝずむ間もなく、二人は左右に吹き分けられて、急峻な崖を分れ〳〵に轉落するのだつた。

あつと、一と聲その瞬間叫んだ聲は、德惠子だつた！　彼は自分も斷崖を落ちながら、他の側の崖を落ちて行く德惠子の聲を聞いたのであつた。

びつしよりと、冷や汗にぬれて、彼は目をさました。一人の女が枕元に坐つてゐた。

惡夢に魘された城木が、長い呻吟の底からものうく目をあけて見上げた時、灯のない部屋に倒れたまゝの枕元に、しんなりと坐つてゐる笹彌を見出した。

『どうなすつて？　隨分魘されてゐらしつたわ。もうさつきからこゝに坐つてゐて上げたのよ』

笹彌は冷たい水を充したコップを進めた。城木はそのコップを呑みほすと、心がはつきりして、そして同時に、何ともいひがたい苦痛と寂寥とが胸を咬むのだつた。

『あゝ』と、彼は、呻くやうに言つて、またその場に突つ伏した。

笹彌は、兩手で頭を抱へるやうにして仆れてゐる城木の姿を、しみ〴〵した目で眺めてゐたが、ふと思ひ切つたやうに言ひ出すのだつた。

『ねえ、あなた、あなたは何をそんなに苦しんでゐらつしやるの？　え？』

彼女はほそい手を伸べて、やさしく城木の肩に觸れた。

『あたし、あなたにお目にかゝるとすぐ何だか氣になつてならなかつたのよ——たしかにひどい惱みに押されてゐるやうな姿をなすつてゐらしつたから——それにお酒のあがり振りを見たつて、隨分自棄だわ。いけないわよ——さ、何があなたをそんなに苦しめるのか、仰しやいな——あたし、惱んでゐなさる方のためには、どんな犧牲にでもなりたいのよ』

笹彌の手はしづかに城木の背で動いた。それは悲しみに充たされた若者を撫で慰める母か姉の手のやうに柔かゝつた。

『安倍さんも言つてゐらつしつたわね。あなたは失戀して高野とか叡山とかへお登りになるのだつて——勿論、あの方は出鱈目だわ、嘘吐きだわ。何の信用も置けやしないわ。だけど、どこにか何か眞相に近いものが含まれてゐる氣がしたわよ。あなたは世の中でいふやうな、失戀はなさらなかつたかも知れ

ないし、それどころか却つて女の戀をしりぞけて逃げてゐらしつた方かも知れはしません。でも、何か安倍さんの言葉にはほんたうな響きがあつたわ。だから、あなたを私はもつと良く知りたいの――ね、城木さん――城木さんと仰しやつたわね。私の氣持が多少はおわかりにならない。私だつて隨分苦しみや悲しみは見て來てゐるのよ。隨分殘酷な世の中を――』

笹彌の聲はかすれた。

城木は、大勢の前では無口な笹彌の、親しみに充ちた言葉をきいてゐるうちに、今までの苦痛と悲哀との傷口を、新しいきよらかな水で再び洗はれるやうな痛みを感じた。彼は舊友の安倍なぞに對するより、もつと正直な氣持になることが出來る氣がした。それは異性同士に流れる不思議な親和力のあらはれに相違なかつた。

笹彌のさゝやきに、苦惱のよどみをかき立てられて、城木は意氣地なく、冷たい畳の上にまた涙を落した。

『あなた、泣いてゐらつしやるの？』と、笹彌は、薄やみの中で、城木の横顔をのぞき込むやうにした。

『どうしてそんなにお醉ひになつたの？　何處がお苦しいの？』

悲しみに醉ひ、胸が痛む城木だつた。しかし、彼は、顔をそむけて、

『いゝえ、心配しないで下さい。どこも苦しくはありません。もうすつかり醒めました』

『お醒めになつて――でも、まあおつとしてゐらつしやいよ。あの人達は騒がしてお置きなさいね』と、笹彌はいつの間にか掛けてあつた搔卷をはねて起き直らうとする城木を押へて、

『あの人達はたゞ騒いでゐるのが面白いのよ。あなたが顔を出しても水に油でお互につまらないわ。私達は二人で話しませうね。苦しいことは一人にでも多く話せば慰むものだわ。私なんか、何も知らない、無智な、無教養な女よ。でも、人間の心はやつぱし持つてゐるの。だから、人間の苦しみや悲しみは分ると思ふわ』

『有難う、笹彌さん』と、城木は無限の信愛を、たつたさつき知り合ひになつたばかりの女に對して感じながら言つた。

『君はほんたうに今夜初めて逢つた人のやうには思はれない――』

城木はぺたりと俯伏して、兩手で顏をかくしたまゝ、咽び泣きの間から言つた。

『かんにんしてくれ給へ。僕は氣違ひです』

『さう昂奮しては駄目だわ。何がそんなにあなたのやうな方を氣違ひなんぞにしたのでせう？　可哀さうにねえ』と、笹彌は肩に觸れつゞけてゐた。

『僕は愚鈍な、無意志な、犬のやうな人間なんです』と、城木は吃りながら、

『僕はまるで下らないことのために、戀も人間も捨てたのですが――僕が自分の小さい良心を滿足させようとしたゝめに、一人の女を底の知れない不幸の淵に投げ込んでしまつたのです』

『まあ、底の知れない不幸の淵つて、どんなにおなりになつたの？』

城木はこの女の前に、もう何も彼もいつてしまひ度くなつた。あらはに正直に自分をさらけ出したら、どんなに心が慰むだらう――。

『君は今夜の夕刊を讀みましたか？』

『夕刊、えゝ讀んだわ』

城木はかすれた調子で、

『その夕刊に、ある富豪の娘が奇禍に逢つたことが載つてあつたでせう？』

『えゝ、讀みましたわ。東京の長沼さんの――』

『その娘が以前僕を戀してくれたのです。そして家出を迫つたのだが、僕は、あの家から恩義を受けてゐたので、それに應じることが出來なかつた――僕はあの家の門番の孤兒で、小學から大學まで、みんなあの人達の手で養はれたのですから――ところが、さういふ小さな良心が、却つてあの娘を殺してしまつたのです。若しあの時僕があの娘のいふまゝに、一緒に家出をしてゐたら、どんなに貧しさや乏しさが二人の上を襲つて來ようとも、こんな不名譽の泥であの娘を塗ることはなかつたらうに――』

城木の聲は響きを失つた。

笹彌は城木の背からまだ手を退かなかつた、姉らしい愛撫で彼女は言つた。

『それはいけなかつたわ。あなたはたしかに間違つてゐたわ。あなたはその時ほんたうに求めてゐたも

のをつかむ氣になればよかつたのに、少し卑怯だつたわね』

『君のさういふのを聞くと、僕はあの娘から責められるやうな氣がする』と、城木は暗い、憂鬱な焰を燃やした目で笹彌を見た。

『戀するものが、お互に離れてゐるのは一ばんいけないことなのよ――どんな場合でも――』と、笹彌は哲學者のやうな靜かさでいつた。

『私だつて、妙な浮世の義理を考へたために、戀人の死目にもあへなかつたの――それを考へると、かうしてゐても胸が痛くなるのよ』

城木は默つて相手をみつめてゐた。

『私ね、震災後この京都へはじめて來た女なのよ』と、笹彌は話しつゞけた。

『それまでは芳町の方で暮してゐたの――隨分深い男がゐて、土地でもいくらか浮名も流してゐたんですの。苦しい悲しい思ひもこのまゝで行つたら死んでしまふかと思ふほど繰り返したわ。それで、私の方の身體も、どうやら大目晴れてその人に逢へるやうになり、向うの奥さんだつて、まあ默認してゐてくれる位なことに運んだのですけど――まあ、よかつたと安心したのも束の間で、あの震災なの――私に取つて大事だつた人はあの地震で亡くなつてしまつたんですわ。それだけのことなら、あの地震で死んだ人はいくらあるか分らないのだからあきらめやうもあるけど、私にどうしてあきらめられないのは、あの地震の朝、私が奥さんにつまらない義理立てをして、歸して上げたものだから、それであの人

は大きな梁の下になつて潰されてしまつたんですの。あの人はあの朝、どうしても歸りたくないと、あんなに言つてゐたのに、私は無理に自動車を呼んだりして――』

笹彌は、胸がせまつたやうに口ごもつた。

――笹彌の話といふのは、大よそ次のやうなものだつた。

彼女は、瀬川敏太郎とさう古い馴染みではなかつたが、はじめてある場所で顔を合せた刹那から、運命的に、長年たづねてゐた未知の戀人はこの人だと思ひ込んでしまつたのだつた。敏太郎はさういゝ男振りといふのでもなく、家もさまで金持でもなさゝうだつた。多少の家作を持つた家に生れて、母親に、細君、子供が一人の家族で、自分はある丸ノ内の事務所につとめてゐた。ハイカラな若紳士でも、どこにか東京ッ兒らしい堅氣なところが見えて、見るからたのもしげな、杯を重ねても唄ひとつ唄ふではなく、ニコリ〳〵と笑つてゐるといふやうな氣風だつた。勝氣な、張りの強い笹彌が、どうして一目見て、その人にほれ込んでしまつたか自分にもわからなかつた。しかし、戀といふものは不思議なもので、彼女の激しい瞳は、その晩すでに物がたさうな、几帳面らしい敏太郎を動かしたに相違なかつた。なぜなら、彼は、その翌日、近間の會席に友達と連れて來て、彼女をかけてくれたのだつた。

單純な親しみだけが重なるやうな夜が幾晩かあつて、はじめて知りあつてから廿日ばかりしたある夜、笹彌はたつた一人で遊びに來た敏太郎の歸りを自動車で送ることになつたが、その夜の自動車から、お

互にいつまでも降りる氣になれなかつた。

『女房には濟まないが、今夜は歸りたくないなあ』と、敏太郎は、春夜の星が夢んでゐる山ノ手町の坂を上る自動車の窓を透かすやうにしながら呟いた。

笹彌はたつた一人で遊びに來た敏太郎の歸りを自動車で送ることになつたが、その夜の自動車から、お

『もうお宅も直ぐねえ。何だか私もお別れしたくない晩だわ』

彼女も惱ましく吐息をした。彼女は義理の深い旦那と隨分長く續いてゐたので、今更その人と切ることも離れることも出來ない身だつたが、しかし、この晩、その義理の深い人が自分の家で待つてゐるのを忘れる程、心がどうかしてゐた。

で、二人はその晩、山ノ手の、靜かな小さな家に、惱みと喜びとに充ちた一夜を送つてしまつたのだつた。

――お互に用心深い氣性の二人が、一度思ひ切つて心と心、身體と身體を觸れ合せてしまつたあとでは、激烈な加速度でもつと激しく心と身體とをつかみ合はずにはゐられない氣がするのだつた。二人はもう、まるで外の世界のことは忘れつゞけした。夢のやうな――丁度世間知らずの

娘と息子との戀でゝもあるやうな日がつゞいた。

それで、あの恐るべき天變地異の日が近づいて來たのだつた。

翌日、あゝした大事變が起らうと知るによしもなかつた戀人同士は、その前夜、土地のある奥まつた待合の離れにゐたのだつた。二人とも、風通のいゝ部屋の縁ばなに坐つて、冷たいビールを飲んで、夜風が黑く庭の綠をそよがしてゐるのを見てゐるだけで、もう十分だつた。遊蕩らしい賑しさもいらなければ、お互に口を利き合ふことさへいらなかつた。二人は、二人だけでゐれば滿足だつた。

『今夜はこゝで寢て行くよ』と、男が腕時計をながめながら突然いつた。

もう十二時をいくらかすぎたころだつた。女も歸しともないのであつた。しかし、彼女は今夜敏太郎から、細君がこの四五日肋膜が痛むといつて寢てゐるといふ話をきいてゐたので、その人への義理立てから、えゝ、お泊んなさるがいゝわ――とは、答へられなかつた。

『駄目よ、今晩はお歸りなさいね。奥さま御病氣でふせつておゐでだといふのに――誰だつて病氣の時は、一人でゐるのはさみしいわ』

敏太郎は苦さうに注ぎ置きのビールを干した。

『いや、泊つていく』

『お歸りなさいよ。駄目よ、私、どうしたつて今夜はお歸しするわ。私にだつて奥さまの氣持は分りますもの』

――さうした押問答のあげく、敏太郎は、ひどく氣を惡くした風で、このごろ口にしなかつた笹彌の且那の名なぞ持ち出して、その人への義理を自分こそ守らねばならぬ人だなぞと厭味をいつて、別れの握手もせず、送らうといふのもことわつて、自動車上の人となつたのだつた。

その翌日が、あの地震だつた。

――笹彌は心が寒くなるやうな調子で、しかし靜かに語り續けるのだつた。

『で、あの恐ろしい日の白々あけに、私達はめい〳〵妙な腹立たしい氣持でうちへ歸りましたの。私にすれば、人がこれ程までに奥さんに義理を立てるのも、みんなその人のためを思へばではないか――男といふものは、折角世間の信用が出來て、仕事の方にも位がつくころになると、兎角自分勝手が出て、そのために、ほんのつまらないつまづきから、折角築きあげた位置を滅茶々々にしてしまふ――隨分多くそんな例を見て來てゐるから、若し家庭の中に不愉快な問題でも起つて、その爲に會社の方や世間をしくじりでもしてはと、死んでも離れたくないやうな氣持を無理に殺して歸して上げようとすれば、意地にかゝつてそんなわがまゝをいふのだもの！　もういゝわ、決してこれからほんたうの心で思つてなんか上げはしない――そんな風に、私はひと晩じゅう〳〵とおこつて、曉方になつてやつとうと〳〵眠りましたの。何度も不愉快な夢を見たり、魘されたりして、熟睡が出來なかつたものだから、やつと目がさめて床を離れたのは十時すぎだつたでせう。でも、起きると、すぐその人との別れ際のことを考へ出

して、つまらないことで喧嘩した自分が馬鹿らしくなつたものだから、早速あやまつて、夕方には是非出直して來てもらはうと、會社の方へ電話をかけましたのよ。すると、ついぞ休んだことのないその人が、今日は頭痛がひどいから休むといふ屆けだといふ返事ですわ。私、すつかり氣になつてしまつて、髪も顏もそのまんまで、一時間も鏡臺の前に坐つて考へ込んでゐると、あの地震でしたの――お母さんは泣き出す、妹は怪我をする、といふ始末で、そのうちに火事ですわ。夢中で、逃げて、逃げて、上野まで來て、まるで戰さ場よりもひどい中にちゞかんでゐましたけど、私の心はその人がどうしたらうといふ心配で一ぱいでしたわ。會社の方はすつかりビルディングが崩れて、死人も大分出たといふ風説でしたが、休んでゐたといひますし、殊に山ノ手ですから別に火で燒けた模樣もなし、大丈夫だらうとは思つて見ても、やつぱし居ても立つてもゐられなくなるので、お母さんと妹を近所の人にたのんで、たつた一人で、あの中を上野から牛込まで歩いて行きました。まだ町の火はすつかり消え切らずに、土藏からは火が吹いて、道は草履の裏が燒ける位にほてつてゐました。朝鮮人が押しよせて來るの、主義者が掠奪に來るのと、自警團が物々しい容姿で、要所々々を護つて、今考へるとそつとするやうな世界でしたけど、戀のためには怖れもつらさも忘れて、私は一人ぼつちで歩いてゆきました。やつと、その人の近所までたどりつくと、方々のお屋敷の植込みが青々と茂つて、瓦ひとつ落ちない屋根がつゞいて燒野原の下町から來た私には淡ましい氣がしました。でも、これでまあ安心だ――と胸をさすりましたわ――ところが――』と、いひかけて、笹彌は當時の苦痛を思ひ出して、それを押し伏せようとするやうに唇を

かんで、あらぬ方をみつめたが、

『ところが、あんまり咽喉が乾いて死にさうなので、何氣なく小さなカフエへ這入つて、ソーダ水をもらつて飲みながら、聞くともなくあたりの話を聞いてゐると、ふと、氣にかゝる噂をしてゐるのです。××町では住宅には潰れ家は一軒もないが、古い土藏や煉瓦藏が大分やられたやうだ。中でも、何とかいふ會社員の家の藏が崩れて、つい下の離れ座敷を押し潰してお午餐を食べてゐた夫婦がモロにやられたさうぢやあないか――といふやうな話をしてゐますの。私は耳を澄ましました。何かなしにハツとして、そばで見てゐたらたしかに顏色が變つたらうと思ひますのよ。でも、その話はそれなりで、もつと物すごいほかの話に移つてしまひました。私がはつと思つたのには原因があるんですの。敏さんは、去年新築したばかりだといふ離れの書齋の話をして聞かせてくれました。電話をかけてくれるのもいゝが、離れの卓上でないと困る。なんて、その番號を敎へてくれてゐました。何だか、その不仕合せな夫婦が、敏さんたちに相違ない氣がして、私はもうソーダ水も咽喉に通らなくなりました』

笹彌は語り續けた。聲はかすれ、咽喉は乾枯びたやうに見えた。しかし、目には涙もなく、瞳は寧ろ冷たく沈んでゐた。

『私は、その人の住居に近づくに連れて、胸が破けさうに躍るのはまだしも、膝がしらがすつかり力をなくしてしまつて、今にもその場に突んのめつてしまひさうな氣がして來るのでしたけれど、やつとの

思ひで、かなり急な坂を上つて、白煉瓦の塀續きのあたりまで來ました。白煉瓦の塀の内に、その人の家があるのです。しかし、見上げると植込みの中の二階家はいつものやうに無事に建つてゐるので、まあ――と、胸を撫でおろしましたが、いよ／＼鐵門の中をのぞき込んだ時、私は、その場にくた／＼と膝を突かうとして、やつとこらへました。丁度その時、突き當りの玄關に、どや／＼と人が込み合つて、質素な、白布で卷かれた二つの柩が、そのまゝ自動車にかき載せられようとしてゐるところだつたのですもの――頭も目も眞暗になつて、唇はわな／＼と震へました。あゝ、もう駄目だと思つた刹那、胸の心が破けさうに痛んで、門の柱にすがり寄つたのは覺えてゐますが、それからのことは、まるで解らなくなつてしまひましたの――氣がついた時には、その家の脇玄關の一間に横にされて、女中さんに介抱されてゐました。勿論、私とあの人との間のことは誰も知つてゐる筈がありませんから、たゞの通りかりの女が、疲れと暑さで、眩暈でも起したものと思つたのでせうけれど、親切な人達で、手厚く看護つてくれたわけなのです。私はその人達から、主人夫婦の不幸について、詳しすぎる位に說明されました。カフェで聞いて直覺した通り、あの人夫婦は、煉瓦藏が崩れかゝつたゝめ、一とたまりもなく離れが潰れて、梁の下になつてしまつたのでした。お二人は抱き合ふやうになすつたまゝ、傷ひとつ見えず、さも安らかさうにお亡くなりになつてをりましたわ！　と、小間使がはなしてくれるのを聞いて、私は泣くことも出來ませんでした。私があの曉方、あの人のいふまゝに芳町に一緒にゐさへすれば、何事もなかつたのに――實際、あの人を殺したのは私だつたのです。さあ、さう考へると、自分のつまらない

義理立てが憎らしくつて、憎らしくつて、思ひ切つて自殺しようと、何度思つたか知れなかつたのでしたが、お母さんと義妹にひかされて、死にも兼ねてゐる間に、とう／＼、あんまり心の苦痛に責められ通しに責められたゝめ、頭がどうかしてしまつたと見えまして、お恥かしい話ですけど、三月ばかりの間、氣が違つたやうになつてゐましたの――そのあと／＼のことは、お話したつて仕方がありません。以前、私の世話をしてゐてくれた人は、私が氣違ひになつてゐる間あんまりあの人のことばかり口走つてゐたので、愛想をつかしてしまひましたし、家族をかゝへてもう少しで路頭に迷ひさうになつたのでしたけど。でもその後、正氣に返ると、すゝめてくれる人があつて、思ひ切つて上方に來てしまつたんですの。――まあ、つまらない身の上話で、さぞお聞き苦しかつたらうと思ひますが、嘘もいつはりもなく、私は自分の、あなたのお言葉の『小さい良心』とかいふものを滿足させるために、無理に喧嘩仕掛けて戀人を殺してしまつた、わるい／＼女なんでございますわ』

笹彌はさすがに、もう自分を冷たくおさへ續けることが出來なくなつたやうに、襦袢の袖口を顏に押し當てゝ、しばしの間せぐくり上げるのだつたが、やがて涙をふいて、姉らしいやさしさに充ちた微笑をうかべて、

『だし抜けに泣いたりして、變な女だとお蔑すみあそばすでせう？　でも、私はその後、戀人といふものは、死ぬまで一緒にすがり合つたまゝ、一日でも離れてはならないものだ――ほんたうに戀し合つた以上義理なぞのために負けてはならぬものだとはつきり決心してしまひましたのよ。もつとも、その後

まだ一度も、戀を感じたことがないから、その決心を役に立てたことはありませんけど――』

――笹彌はその時の自分のすがたを思ひうかべるやうに續けるのだつた。

『私の胸は悔いで一杯でした。どんな寶でも手から放してしまへば、もう自分のものではないのだといふことをはつきりと知つた時、つく〳〵人の世がはかなくなりましたわ。私は何も事情を知らない敏さんのお宅の方々から、少し靜養して行つたらとすゝめられるのを振り切つて、しをたれた浴衣の裾をはしよつて、竹の杖をついて、とぼ〳〵上野の山に引返しましたが、あの時のことを思ひ出すと、今かうして生きてゐる自分の氣が知れなくなりますわよ。もし、母や義妹がない身だつたら、あの晩のうちに私だつて死んでゐたかも知れないのですけれど――』

城木は、笹彌の物語りの中に、いつか起き直つて、兩手を膝に、きちんと坐つてうなだれてゐた。彼には、このはじめて逢つた無智な藝者の言葉が、これまで讀み聞きしたどんな哲學者のそれより痛切に思はれるのだつた。

彼は呟いた。

『いや、大きに有難う。君の話を聞いて、實に思ひ當ることばかりです』

『あら、そんなに尤もらしく仰しやつてはいや。私、こんな、なにも知らない、流れ藝妓なんですもの――でも、私、あなたがあんまりお苦しさうだから、あなたよりもつとひどい運命に逢つた私の經驗を

お話したまでゝすわ。あなたの場合は、まだどうともなされば出來る狀態ですもの、そんなにお力を落しなさるなと申し上げたかつたゞけなのよ』と、笹彌はさらりとした口調になつていつて、

『でも、私の悲しい話を、しんみり聞いて下すつたのはあなたゞけでしたわ。世の中の人は、人間のほんたうの悲しみの姿さへ知らずに生きてゐると見えて――』

城木は、きちんと揃へた膝頭をみつめるやうにしながら呟くのだつた。

『ほんたうに、戀するもの達は離れて住んでは駄目だ――寶は手放すことは禁物だ。お互に、神でも、木でも、石でもないのだから、いつどんな魔の誘惑をうけるか分らない。戀人達は、いつも一緒にゐなければ駄目だ』

『さうですわ。それがほんたうの良心で道德ですわ』と、笹彌はまるできよい言葉を口にするものゝやうに言つた。

『私にしても、下らない義理を立てようなぞとせずに、いつそ奥さんの膝にすがつて、叶はぬまでも敏さんのそばに置いていたゞけばよかつたんですけど――どうせ私達は水商賣で育つてゐたから、あの人が死んでしまふまでは、戀なんてものは何度も經驗出來るものでもあるやうに考へてゐたらしいんですの。淺間しいことね。ほんたうの戀がたつた一度のものだと知つてゐたら、生きるも死ぬも一緒に出來る筈なのに――』

城木は顔を上げた。そして薄やみの中で、笹彌の方をぢつと透かし眺めた。

『笹彌さん、君のおかげで、僕の決心が出來ました。僕はこれから、思ひ切つて東京へ歸りませう』

笹彌は驚かなかつた。

『えゝ。それがいゝわ。それがようござんすわ。一日も早く、あのお嬢さんのおそばにゐらつしやい。お嬢さんを慰めて、愛してお上げなさい。屹度、その方に取つても、あなたゞけがこれからは生命の綱ですわ。生命の火ですわ』

城木は繰り返した。

『思ひ切つて東京へ歸りませう。僕は自分の失策を初めてはつきり知ることが出來ました。人間はやつぱし自分の一ばん強い欲望を、ひた向きに追ふ外はないんだ——』

安倍の座敷では、もうそろ〳〵外が白まうといふのに、まだなか〳〵眼はしかつた。

『さ、あちらへ行きませう』と、笹彌がさゝやいた。

『えゝ』

城木は氣力が久し振りで返つて來たやうに生々と立ち上つて、友人の部屋に戻るのだつた。

城木と笹彌とが元の廣間に歸つた時、そこにはまだ無意味な笑ひと戯れとの世界が續いてゐた。さすがに安倍も泥のやうに醉ひどれて、杯を取り上げやうにも指が利かなくなり、そばにゐる仲居の手で脣に運んでもらふ有樣ではあつたが、それでも這入つて行つて城木たちを眺ると、ぎよろりと赤濁つた眼

で眺めて、酒にぬれた脣にいたづらさうな微笑をうかべて、

『よう、君達はどこへ行つてゐたんだね、さつきからお揃ひで隱れてしまつてさ。よ、いかんぞ。城木の奴、小鬢に寢癖がついとるぞ。笹公だつて、怪しからん。まあ、坐れよ——並んで坐れ。糾問して遣はさう——あは、は、は』

『あんまりあなたがおすゝめになるから、こちらは苦しんでゐらしつたんですわ。もう、駄目よ、そんなに大きなものなんぞですゝめては——』

笹彌は、安倍が水呑コップを取り上げて、まづ自分が一ぱい飲んで、それを城木に突きつけるのを横から奪つた。

『こりやあ、なほ更もつて怪しからん。これ、笹公、その城木といふ男は、一たい、君の良人なのか？ それとも僕の友人なのか？ 良人だとあるからには、その差出たふるまひも見のがし遣はさうが、さもないなら僭上至極、手討ちにして取らせる』と、ヨタ〳〵と立ち上らうとして、またべたりと尻餅をつく安倍を、笹彌はほゝ笑みの目で眺めて、

『いゝえ、私はこの方を良人だなんて、そんな生意氣なことは申しませんわ。でも、お友達にはなりましたのよ——たつた今——あなたよりぐつと良友になりましたのよ。ほ、ほ、ほ。あなたは誰にでも惡友ですもの。こちらにだつて良友、益友が一人位なけりやあ駄目ですわ』

『何ぢや？ 僕が惡友——』

『さ、惡友さん、こちらはもうお酒はいやだと仰しやるから、私が代理に飲んで上げますわ』

笹彌は、受けた水呑みコップに、仲居が遠慮して半分ばかり注ぐのを、

『いゝえ、大丈夫よ。一杯注いで頂戴。大丈夫よ』と、一杯に充したのを、城木の方を向いて目まで上げて、

『ぢやあ、あなた、これ別杯よ。お達者でおゐでなさい。東京へお歸りになつたら、たとへハガキの一枚もね』

『有難う』と、城木は手を膝に、眞面目で頭を下げた。

笹彌はぐい〳〵と、コップのふちに唇をつけたまゝあけて、ポンヤリと眺めてゐる安倍に返した。

『さあ、あなたもお友達のために乾杯あそばせよ。こちらは、これから東京へお歸んなさる方ですから――』

『何だつて？』と、安倍はコップを受けたは受けたが、キヨトンとして、

『城木が東京へ歸る？』

『えゝ、もうすぐにお歸りになりますのよ』

『城木、そりや、ほんまかい？』と、安倍は醉眼をみはるやうにして友人にたづねた。

城木はうなづいて、

『うむ、僕は歸京の決心をしたのだ。僕はもう逃げまはらずに、ほんたうの世界に直面するつもりなんだ――』

『ぢやあ、德惠子さんにあひに行かうといふのかね？』

安倍は、どんなに醉ひ溺れてゐても、心までは醉ひつくせぬ男の一人だつた。放蕩ものゝ常で、神經はいつでもよみがへつて來るに違ひなかつた。

『さうだ』と、城木はきつぱり言つた。

『僕は一度はわびたくなつた。明日の朝、すぐに立つ積りだ』

『うむ、それもよからう』と、安倍は案外止めなかつた。

彼は濁つた目で眞すぐに友人をみつめて、その目をもう薄白く明けそめて來た外に移して、

『ぢやあ、氣が變らぬうち、夜が明けたらそのまゝ汽車に乘るがいゝ。大阪の始末が殘つてゐれば僕がつけて上げる。細かしいことを、その新らしい友達さんに話して置き給へ』

白々と外が白んで來ると、さすがに安倍をはじめ遊蕩ごとに生れついたやうな妓たちも、めつきりつかれが出た風で、ほんの横になるだけの支度をした部屋の方へ引き取ることになつたが、城木と笹彌とは、廣間の疊廊下に坐つて、二枚だけ開けた玻璃戸のあはひから、冷たく涼しく流れ込んで來る朝の微風に顏を吹かせてゐた。和らかな四條派の繪のかたちで横たはつてゐる山々も、どうやら眠りから醒めつゝあるやうに、紫ばんだ綠を朝霧がしつとりと靄いてゐるあたりを見せてゐた。

笹彌は城木が、安倍から渡された紙入を、膝の上で持ちあつかつてゐるのを眺めて、はげますやうに言ふのであつた。

『あなたの御氣性では、さういふこともお氣にかゝるか知れないけど、あたしは構はないと思ひますわ、高の知れたお金ですもの。旅費におつかひになつて、あとで東京からお返しになればいゝぢやありませんか！　何よりも、あなたに取つて大事なことは、一刻も早く歸京なさることですわ――汽車へお乘んなさることですわ。ね、もう、躊躇なさらずに、こゝからすぐに停車場へいらつしやいよ。もうぢき急行が出る時間になります。こんな場合だから三等急行でもいゝわねえ。私、汽車までお見送りして上げますわよ』

城木は突然現れて、自分にまるで姉のやうな態度を見せる一個の歌妓に對して、今は少しも抗がふ力を持たなかつた。

『何から何まで、みんな君のお蔭です。僕は一生君を忘れませんよ』と、無器用に彼はいつた。

『あれ、またそんなことを』と、笹彌は笑ひ消して、

『旅は道づれ、世は情――つてね。ほ、ほ、あなたも私も、同じ都落の旅烏ぢやありませんか。お互様よ。私がまたいつあんたにどんなお世話にならないとも限りませんわ』

笹彌は家の人達がまだ起き出さないので、勝手を知つた廊下を洗面所の方へ城木を導いて行つた。

城木が顏を洗つてゐる間に、自分も姿見に向つて、髪を直し、やゝ浮いた白粉を落した。ほつそりした姿に、化粧の落ちた淺黑い肌色がよくうつゝてゐた。

いざ、朝の急行に間に合せるとなると、もう愚圖ついてはゐられなかつた。笹彌は番の女中だけを呼び起して、自動車をいはせた。

『安倍さん達はとてもお眼ざめにならないから、このまゝ默つて出かけませう――』

それでも、女中がそれだけは淹れて來た香ばしい茶を城木のためについで、笹彌はいつた。

『お顏の色が惡いけれど、汽車へお乘んなさると、疲れてゐる方がすぐお眠れて、却つていゝかも知れないわ、ね。おや、もう自動車が來たやうよ』

――城木はどんよりよどんだ頭で、しかし何がなしに突き進められるやうな氣持で、自動車に乘つた。笹彌も並んで腰を下した。

『おゝ、いゝ朝――』と、彼女は呟いた。

朝靄はもううつすりと晴れかゝつて、夏めかしい朝の光が大空に流れた。

白動車がはつきりと眼醒めてゐる巷に差しかゝると、笹彌はちよいと止めさせて、唐物屋で何か買物をして來た。彼女は男ものゝハンケチの雪のやうなのを二枚、それに手を背後にまはして、帶の間から鼻紙を一折、それを城木に渡した。

『紙は女のでいけないわね。でも、間に合せて頂戴』

やさしく笑つて、さういはれた時、城木は目の裏が熱くなるやうな氣がした。全く、この流れの歌女

は、不思議な自然さで人の心を慰めはげます術を知つてゐるのだつた。

丁度いゝ時刻に、二人は停車場に着いた。

城木が車室に這入つて、窓から顔を出した時、笹彌は奇妙な微笑で唇をゆがめた。

『あなたは、でも、淡ましいわ。きつといゝ事が待つてゐてよ——車の中でよくおやすみなさい。ぢやあ、左様なら、私もこれから家へ歸つてやすみませう』

城木はだまつて頭を下げた。

汽車はのろ〳〵と動き出した。間もなく見送る者と見送られる者とはお互を失つた。

城木は、硬い三等車のクッションに腕を組んで、かたく眼を瞑つた。

見果てぬ夢

城木が半年ぶりで首都東京の空の下に立つた時、黄昏はもう美しい灯で窓々を輝かしてゐたが、まだほのかな夕映はビルディングの森の上に高く流れてゐた。

彼は東京驛前の廣場にたゝずんで、悲しみと、望みとの錯綜した、言ふに言はれない氣持であわたゞしい夕べの都の擾亂した動きを眺めた。

——とう〳〵歸つて來た！

彼にはやつぱり一ばん魂をとらへる者が住んでゐるこの都だけが、彼自身の生活の故郷でもあれば

目的地でもある氣がした。何の積りで、この生々した、激しい世界を捨てゝ、無目的な放浪の旅になぞ上つたのであつたらう！

奇妙な性格者戸田を、彼はこれから訪ねようとするのであつた。彼は東京の知人と一切交渉を絶つてゐたが、あの平民的詩人とだけは、一月に一二度は手紙をやりとりしてゐた。戸田はいつもすゝめてゐた——氣が落ちついて東京へ歸つて來るやうなことがあれば、必ず第一番に自分の宿をたづねてくれ。君のやうな性質の男は、僕のやうな腕白な氣性の人間の忠言に、多少負ふところがあつてもよい——とそんな風に、露骨なことを書いて來るのだつた。

城木は神田への電車を選んで乘つた。彼は德惠子の入院してゐるといふ病院を新聞で見てゐたので、直ぐにもそこへ駈けつけたかつたのであるが、しかし、戸田に一應決心を打ち明けねばならぬ心の責任を感じた。あの常識を拔け出ながら、その癖浮世の辛酸の味をどこまでもかみしめる友人は、必ずうまい考へをきかせてくれるであらう。

——神保町裏の安下宿の入口に立つて、見覺えのある小女に自分の名を名告ると、間もなく、ペンをつかんだまゝ、蓬髪の戸田がいくらかあわてたやうに階段を駈け下りて來た——彼は城木を見て叫んだ。

『やあ。やつぱり君だつたのか？　やつぱり出て來たのか？　どうせ最近歸京するとは思つたが、こんなに早く來るとは思はなかつたよ。さあ、上り給へ』

戸田の貧しい部屋は半年前と少しも變つてはゐなかつた。座蒲團がはりには、相變らず薄汚ない毛布をたゝんだのが敷かれ、電氣の笠には罅が入つてゐた。

『でも、よく早く決心して出て來た。新聞を讀んで、君のことだからどんなに惱んでゐるだらうと、實は、今、慰めの手紙を書きかけてゐたところだよ。ほら、この通り――』と、戸田は机の上の原稿紙をちよいと示して、

『僕も、この場合、一刻も早く上京するやうにとすゝめようと考へてゐたのだ。何にしても君、世の中は思ひもかけぬことの連續なんだ。それは今更のことではない。しかし今度の事件は、きつと君のためには決定的なものをもたらすだらうと僕は考へる。むしろ、君の魂に取つては祝福すべきことかも知れん』

戸田はさういつて、ぢつと、城木を見つめて、

『相變らず蒼ざめた顏をしてゐるなあ。氣つけにお茶がはりだ』と、茶碗に四合瓶から冷酒を注いでやつて、

『どうだつたね、上方は？　なか〳〵面白い土地なのだが、さつぱりその面白さも經驗せずに來たらしいなあ。もつと君、生活に慾を出して、いろ〳〵な刺戟を攝取しなきやあ駄目だよ』

『僕も、しかし多少修業はして來ました』と城木は答へた。

『さうかな、それなら結構だが――』と、戸田は微笑した。

『僕は自分といふものを、かなりはつきり見出すことが出來た氣がします。そして人間の生活の基點に關して、いくらかしつかりした考へを持つことが出來ました』と、城木は注がれた酒に唇をつける前にいつた。

『結構。それを机の上で考へたゞけでは何にもならんが、少くとも、君が弱々しいながら生活で感知したのだ――』と、戸田はいつて、

『兎に角、君を久しぶりで見ることはうれしいよ。今夜は大いに痛飲しながら相談するかな』と、彼の話は酒といつも離れるわけには行かない。

戸田はひしやげた眞鍮の鉈豆ぎせるを取り上げると、亂暴に破いた萩の五匁包みから莫をつまみ出して吸ひつけて、脂くさい煙を吐いたが、

『うむ、まあ、かう見かけだけでも、どこか半年前とは違つたところが出て來たよ。どうせ君、人間なんてもなあ、八方美しくさはりなく生きて行けるものぢやあないんだから、善なり、惡なり、自分の性根でぐん〳〵やり拔くほかはないさ。神や、聖徒ぢやあるまいし、教會の彩色繪玻璃の一代記見たいに綺麗にすごして行けるもんかい。いや、その神や聖徒だつて人間の心があみ出した傳說である以上、隨分わがまゝで、自己的で、怒りつぽくつて、血腥くさいものではないか？　以前の君は、どこかゝう、おたまじやくしの尻尾のついた、若い蛙のやうなところがあつたが、あんな尻尾は一日も早く切つて取

るが賢明なんだ。僕あ、君の變化を喜ぶね。上方の流浪も、やつぱし無意義ぢやあなかつたんだ』と、戸田は例の詭辯的な言葉を重つたるい饒舌で喋つてゐたが、そのグリ〳〵と眞圓な瞳は、子供のやうな素直さで友達の顏をなつかしげに見つめてゐた。

城木はこの戸田の前に坐ると、思ひがけなく京都で最後の世話になつた。あの笹彌といふ藝者に對して感じた氣持に似た、はげまされ、慰められ、突き進まされるやうな喜びを覺えるのだつた。

『えゝ、決して無駄ではありませんでした。あなたがあの時都落をすゝめて下すつたのは有難かつたと思ひます。あのまゝこの東京にゐたら、どんなに亂れてしまつたか分らなかつた――』

『さうだ。大手術を受ける前には相當の準備をしなければな――だが、もう今度こそは覺悟がついたといふなら、思ふ存分に望みを追ふのだな。ほんたうの欲望の前には、不自然もない、無理もない。どんなことだつてすれば出來るのだ――して見て、それが君を生かす結果を持つて來るか、殺す結果を持つて來るかといふことは別にしてね。第一、そんな成敗の打算なんか下らんぢやないか。打算によつて贏ち得られるものは、金か株券か博士號、または教授の地位ぐらゐなもんぢやあないか？　生き動いてゐるものは、二で割切れたり、五をかければ必ず答へが出たりしてたまるもんか。氣にかゝつてゐる病氣があれば、思ひ切つて大手術をうけるか、それとも病苦をすつかり忘れるか、この二つしかありはしない。僕の友達に、痔を持病にして、毎日血の涙を流して泣いてゐる癖に、コカイン座藥で誤魔化してゐる奴があるが、僕あ、いたい〳〵と泣きながら、臆病で手術も受けられないあいつの氣持がいやなん

だ――でなけりやあ、僕のやうに、出來るだけ持病なんか忘れりやいゝのに――』と、戸田は突然そろそろと、右足を踏みのばして、

『そら、また今年もこんな脚氣だ。結局、こいつが僕の命をとるかも知れん。でも、かまやせんさ。といはいふものゝ、僕の修業もまだ〳〵さね。病を忘れるといひながら、その口の下からふくれた足なんかに觸らずにゐられないんだからな』と、彼はニヤリと苦笑して、

『時に、まだ夕飯前だらう？　僕もこれからといふわけだが、下宿の水くさい飯もつまらん。といつて、この足では暢氣に歩きまはれないし、靴の底のやうな肉でも我慢してもらつて、洋食でも食ふことにするか』

戸田は小女を呼んで、酒と料理を註文した。そして、間を置いて、

『長沼の令嬢は、世間の噂では――自分の足で思ひ出したが――左の足を切つたとかいふ評判だが、その人は、片足を惜しがりはすまいよ。もつと立派な、力になるものを自分のものにすることが出來るわけだ』

『僕は明日にも、たづねて見ようと思ふのです』と、城木は眞直に戸田を見つめた。

『そのことだ。それが、君には一番の急務だ。一番の急務なことをして退けるのが道德なんだ』

洋食が來ると、戸田は思ひ出したやうにいつた。

『この不味い皿は、いつか君に初めて邂逅した安カフエから取るんだぜ』

城木はなつかしげに、ナプキンをひろげて見た。

一閑張りのはげちよろの机から、インキ壺や、原稿紙や、外國雜誌なぞが取り下されると、それが早速、食卓がはりになつて、戸田と城木とはそれに向ひ合つた。豚脂のにほひのプンと鼻を衝くやうな料理の皿が積まれ、四合瓶をまるごと燗をしたのが、屹然としてそのわきに峙つてゐた。戸田は猪口はつかはずに、いつもの通り、茶飲み茶碗を二つ、それへなみ〳〵と酒を充たした。

酒と饒舌とだけで自分をくらましてゐるやうな男は、琥珀色にあふれやうとする茶碗を、ちよいと目のあたりに捧げて、

『兎に角、お互に生きてゐるものは惡くないことだ』と、祝福して、ぐつと干した。そしてぬれた唇を、褪せた紺絣の單衣の袖で横なぐりに押し拭つて、

『あり様は、この人生なんてものあ、出たとこ勝負なんだ。金持の令嬢が、戀人を追つ駈けて家出をして、さんざ苦勞をした末、片足を失くするといふことは、あり觸れた目から見りやあ不幸な話よ。全く以て賞められたわけのものではないかも知れん。今日この頃は全國の女學校で不心得娘、墮落令嬢の見本として、倫理の先生がやかましくこきおろして、その令嬢の戀人になれなかつたのはおろか、顔さへ見たことのないやきもちの鬱憤を晴らしてゐるだらうよ。それがあたりまへなんだ。しかし、令嬢その人にして見れば、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、スカンヂナビヤ、あらゆる國々の女子大學

を千も卒業したよりいゝ修業にもなつたらうがね。自分の血で、自分をあがなひもすれば清めもする外に、どんな飛躍も向上もないと僕あ思ふんだ。打算や計畫が、畢竟何をもたらすもんか。そんなことが、ほんものゝ生活に役に立つとすれば、不幸といふものはこの世にある筈がないぢやあないか。人間はてんでに望んでゐるんだ。貧乏人は金を、金持は名を、男は女を、女は男を、子だの稱號だの爵位だのを望んでゐるんだ。しかし、どんなに打算や計畫が十分だつたところで、ナポレオンは一人ぢやないか？ バイロンは一人ぢやないか？ 低きことダンヌンチヨオだつて一人ぢやないか？ そして、成功者のやうに見える彼等だつて、彼等が望んだものを、遂にどこで占有し續け得たのだ？ 馬鹿くさい——彼等としたつて、打算や計畫なんて小面倒くさいもので、彼等の一生を得たものぢやあないんだよ。みんな、行きあたりばつたりの運命をつかんで生きたゞけよ。運命なんて言葉さへ重苦しくつて、しかも無意義で、僕あ大嫌ひさ。生活なんて成りゆきまかせで生きてゆく外、誰にだつて仕方はないぢやあないか？ 大倉喜八郎がどんなにうまく成り上つたつて、それを學んで他の喜八郎があり得る筈はないんだ。なあ、成りゆき一つで、人間は千差萬別に、めい〳〵のほんものゝ一生をつくり出すんだ。人力以て、いかんともすべからずさ。たとへばさ、君と僕とが、あの安カフエの雪の夜更に、だしぬけに廻り合つたことが、君にも僕にも、少くも君には一種の意義を持つてゐたぢやないか！ 何程かの意義を有すればこそ、君だつて歸京早々僕の部屋を訪づれたのぢやないか？ ねえ？ しかも多少の意義を持つ邂逅を、君はあの瞬間まで打算したり計畫したりしたことがあつたかい？ 君に取つては、あれまでは僕はたゞ活字

の署名者としていくらか記憶されてゐたゞけだつたらうぢやないか。その僕が、或ひは君をあの晩自殺から救つたかもしれないのだ。あの晩の君は、あのまゝで行つたら、留置場かレールかへ身のきまりをつける外はないやうに見えたからなあ——は、は、僕あ、例によつて喋りすぎる。併し、僕のいひたいのは、もう今度は、キナ〳〵考へ込むなと忠告したいだけなのさ。君なんかの生ぬるいあたまで、どんなに考へたつて仕方があるものか。それより、現前する對象につかみかゝるんだ。飛びかゝるんだ。或は抱きしめるんだ。その一刹那でも、君は多少幸福であるべきだよ。な？　さ、そこで今のところ、まづ、その茶碗に飛びつけよ。は、は、は』

戸田の饒舌は、馬鹿らしさのつらなりではあつたが、城木にとつてはいつも妙な鼓舞と激勵とを與へることは確かだつた。

——戸田の氣焰を聞きながら茶碗酒を重ねてゐるうちに、長い間の旅疲れのやうなものが一度に出て來て、これから大きな用を控へてゐるのだと氣を張りながら、いつか身も心も萎え〳〵として、城木は割に早く狹い部屋の一隅に、煎餅蒲團にくるまつて寢込んでしまつた。

翌朝、大分日が長けてから目を醒ますと、枕元の机の前に、胡坐をかいた戸田が、髯づらにゴシ〳〵と裸しやぼんをこすりつけて、髯剃にとりかゝつてゐた。

『やあ、やつとお目醒めかい？　僕あおめかしをしてゐるんだぜ』と、ひどく柔しい目で笑つて、

『僕あ一週間も顏を剃らなかつたが、今日は特別な役目があるんだから、大いに身綺麗にしようと思つてね。今朝早く銀行へ行つて、着物だつて一張羅を出して來たんだ』

『特別な役目？』と、城木が寢ぼけた眼で訊ねた。

『わからんかい？　今日は僕だつてお婿さんのお供ぢやあないか？』

城木は思ひ當つた。昨夜彼は德惠子の病院へ一緒に行つてくれることを約束したのだつた。

『飯をすましたらすぐに出かけよう』と、戸田はつけ足して、パリ〳〵と音を立てゝ剃刀を使つた。

——美しい日は、夏らしい底白さで大路に輝いてゐた。二人は駿河臺の山田病院の方へ巷を急いだ。

城木は出來るだけ確かりした氣持を保たうと努めながら、しかし、病院に近づくに從つて、膝頭が力を失つてくるのだつた。目的のところに着いて、どんなに變り果てた戀人の姿を見出すことであらう？彼女はたつた一人ぼつちでゐるのであらうか？　新聞紙は一緒に家出をした青木に捨てられたとか書いてゐたが、それが事實であらうか？　それにしても、あの誇りの高い彼女が青木風情と？

城木は苦い、重い心で、思ひ沈みながら、戸田と肩を並べてトボ〳〵と緩い坂路をのぼつて行つた。

間もなく、灰白色の病院建築は彼の目の前にあつた。

戸田は、ひとまづ、院長に面會を求めた。すぐに面會を許すかどうか危ぶまれたが、それでも、間もなく小さな應接間に通された。

『やあ、あんたが戸田さんで？』と、白い上つぱりを着た、名聲の割には年配にも見えない山田博士は、

着物に染み込んだ藥の匂ひと一緒に這入つて來て言つた——

『僕は長いことあなたの愛讀者ですよ。あなたの現代文明に對する皮肉は全然同意です』

貧乏下宿に孤獨で棲んでゐる戸田も、かうした知己を澤山持つてゐるらしかつた。それで多忙な院長も、すぐに面會を許す氣になつたものであらう。

戸田は差し伸ばされた手を握つた。

『お忙がしいところを恐縮でしたが、是非お目にかゝり度いことがあつたものですから——院長、この男は友人の城木といふ法學士です』

戸田はさうひき合せて置いて、

『早速ですが、新聞が傳へてゐる通り長沼男爵の令嬢はお宅にお世話になつてゐるのでせうか？』

『えゝ、丁度この娘が奇禍にかゝつた時、通り合せたものですから——』と、博士は答へて、いぶかしげに、

『ですが長沼の令嬢と、あなたは何か御交渉があるのですか？』

戸田は笑つた。

『は、は、は。僕の側へは、女性諸君はあんまり寄りつきたがりませんがな、この男の方は、その方へ大分氣受けがよいのでして』と、城木をいたづらさうな目でかへりみて、

『それで、この男は令嬢を見舞ふためにわざ〳〵大阪から出て來たのです。それにしても、令嬢はどん

な具合です？』

——城木は博士が何と答へるかと、魂が凍つた。

案の定、博士の眉根は曇つた。

『兎に角、手術はすみました。しかし、意識がどうも不鮮明で心配してゐます。脊髓が打撲と一緒に震盪されて故障を起してゐるらしいのですな——』

戸田はズバリといつた。

『で、回復の見込は？』

——城木の腋の下から冷たい汗がタラ〳〵と流れた。

戸田はどんな場合にも決して元氣を失はぬ男であつたが、院長の眉間にたゞよふ憂色を眺めると、これも暗い顏をせずには居られなかつた。

『さういふ場合、そのまゝ何時までも意識が返らぬこともあるのでせうか？』

『現代の醫學といふものはね』と、博士は率直に懺悔し謝罪するものゝやうにいつた。

『人間の死生をはつきりと豫言し得る力がないのです。最後は何時も人事をつくして天命をまつ、とでもいふやうな宿命說をあざけることが出來なくなるのですね』

今まで、だまり込んで、次第に大粒な汗さへ浮べてゐた城木は、自分の膝頭を兩手で摑むやうにして

突然いつた。

『先生！　德惠子はもう助かりますまいか？』

博士は城木を哀れむやうな目で眺めた。彼は城木と彼女との仲を詳しく知つてはゐなかつたに相違ないが、人間の苦痛ばかりを眺めてゐる目で見た、醫者獨得の直感力で、何程かの眞相をもう見極めてゐるやうに見えた。

『僕は絶望はしません』と、博士は宥めるやうに微笑した。

『僕はまだ自信を失つてはゐません。あの患者は負傷後、たつた短い時間でしたが、はつきり意識を回復して、問ひに答へ、苦痛を訴へる力を持つたのです。だからあの患者は全然復活力を喪失してゐるとは斷言出來ないのです。何物かゞたゞ邪魔をしてゐるのだ……古風な、占星學的な言葉でいへば、彼女の星はある惡い星が蝕してゐるのだ。僕はその惡い星を退けて、何うにか、再び大事な星の光芒をよみがへらせようと努力してゐる。多分成功するだらうと考へてゐますよ』

博士は紙卷煙草の灰をはじいた。

『あの患者は、あなた方が御覽になつたところ、とてもこの世の者でないやうに――天國にもう遊んでゐる者のやうに、深く〳〵熟睡してゐますよ。何の苦痛も慾望も感じてはゐないのです。生存慾も食慾もない――吾々はその慾のない身體に强ひて食餌や醫藥を注ぎ込んで上げてゐるのです。あの患者はもうこの人生を求めないかも知れぬが、この世にはまだあの人を求めてゐるものが多少とも殘つてゐると

すれば、どうにかして命を引留めねばならぬ義務があるのですからねえ』

『長沼家では新聞紙が傳へてゐるやうな態度をほんたうに見せたのですか？』と、戸田はたづねた。

博士は苦笑した。

『金持の心理といふものは、殊にあの一家の主人のやうな、力だけで經上つた富豪といふものは、一種特別の心理狀態をもつてをるらしいですね。たしかにあれも變態心理學上の研究資料に相違ありません。あの一家では自分の家に生れた娘が不具となり、白痴となり、或ひはそのまゝ死んでしまふことさへ望んでをるやうです。さういふ場合は法律的に廢嫡の方法が容易ですからね』

『獸はどこにも多いのですが……』と、戸田は眉をしかめて、さうして思ひ切つたやうにたづねた。

『新聞では運轉手の某といふのに誘惑されたと書いてゐますが。その男は見舞にでもやつて來ますか？』

『はん、あの野郎ですか？』

博士の口から野郎といふやうな言葉を聞くのは思ひがけなかつた。しかしその口調はきはめて自然に聞えた――それ程博士の心に侮辱がみなぎつたのである。

『はん、あの野郎ですか？　いやもう煩さい奴でしてな、一日に三度もやつて來てどうしても病人に會はせろとか當然自分が保護の責に任ずべきだとかいろ〳〵並べ立てるのですが、僕は最初からちと腑におちない點を直覺したので嚴重に謝絶してゐるのです。いゝことに彼は何か後ろ暗いことをしてゐるらしいので、警官立會の上ならと、きつぱりいふと、歸つて行くのですが――それについてたつた今朝少

なからず興味のある親展書をもらつたのですよ』

『ほー、あなたへの親展書をね？』と、戸田は好奇的にいつた。

『えゝ、見知らぬ男から青木といふ運轉手と令嬢とに關する眞の内情を詳しく知らせて來たのです』

山田博士は内衣嚢から取り出した一通の手紙を、戸田に手渡していつた。

『これが今朝受けた手紙なのです。全然匿名で、どんな人物が書いたものか解らんが、青木とかいふ運轉手に對して、よほど深い恨みを抱いてゐる人間に相違ないです。そしてその恨みが、やがて令嬢への同情に變じたものらしい。讀んで見て下さい』

戸田は手紙をひろげた。達筆な、しかし、どことなく事務的な低調さを見せてゐる手蹟だつた――戸田は、城木にはつきりと聽かせようためか、聲を出して讀んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

山田國手貴下。小生は貴下が、單に技術者として第一流の榮譽をほしいまゝにせらるゝにとゞまらず、人格と任俠とにおいて、刀圭界稀有の人物なることを夙に傳聞せり。今回、不幸なる一女性が道路に奇禍を負ふや、進んでこれが救護に盡力せられしに徴するも、世評の遂に眞なるを知りて益益尊敬の念を深うせざるを得ず。

不幸なる女性の負傷は、幸にして貴下の慈惠と手腕とによりて救はれん。しかも彼女のために悲し

むべきは、その貞操と品性とに關して、虚構にして醜悪なる流説の、誤まつて新聞紙に記載せられ、彼女の白玉の如き面上に、終生、或ひは遂に拭ふべからざる汚點を加へしことこれなり。

新聞紙はいふ。德惠子は運轉手青木の甘言に誘惑せられて、長く彼と醜行あり、その後自ら進んで長沼家を脱出し、青木と共棲すること久しく、更に彼に倦みて放肆なる生活に深入りせしものなりと。これ甚だ誤まれる風説なり、余は。いさゝか當時の事情に通ぜるを以て、彼女の貞淑に關して簡單なる辯護を試むべく義務を有す。しかも、余よりこれを新聞紙に訴ふるも、恐らく世人の嘲殺に逢ふのみにて何等の效力なからん。せめては貴下に一言し、貴下の信用と人格とに依つて、これを天下に强ひて信ぜしめたき意圖に出づる外なき也。

るや、學士は放逐せられて所在を失へり。戀を失うて日夜煩悶せる孃の心裡を熟知せる青木は、學士は放逐せられて所在を失へり。

眞相は下の如し。德惠子には長沼家に長く關係を有する一年少學士の戀人ありき。この戀愛の家庭に暴露す

士よりの傳言なりと稱して、一夜彼女を密室に誘拐し、脅迫誘惑いたらざるなかりしも情を通ずるを得ず。しかれども彼女が現に相當の財寶を身につけ、且彼女を餌として長沼家を脅喝する望みあるを以て、强ひて彼女を某所に禁錮したるにすぎず。孃は靑木のために身邊の財寶をこと〴〵く奪はれたるも、貞操をば全うして虎狼の檻をのがれ、自由なる世界に突進せしなり。

その間の事情を詳しくするもの、一人、余のみ。しかるに、不幸にして余は目下靑木の奸計に依つて當局の忌諱に觸れ、白日の下に實名を以て橫行するを得ず。すなはち一書を裁して貴下の明鑑に遙かに供ふるのみ。百事推了を乞ふ。

尙、この事件に關して詳細を知られんとする場合は、靑山局留置山川源吉宛にて、三日以內に貴書を賜はりたし。祕密會見の危險を冒すも可也。

『署名は單にIとしてありますな？　城木君、君、Iといふ頭文字の人間に心當りがあるかね？』

憂鬱と苦痛とに先程まで引き歪められてゐた城木の表情は、匿名書簡がもたらした光明に依つて大層明るくなつてゐた。彼にすれば、今は德惠子の貞操すら問題ではなく、どうにかして彼女の生命を此の世に呼び戻し、自分の力で晴れやかな世界に更生させたいと望むばかりであつたが、彼女の一生に取つて最も大事な節操が、幸にして汚れなかつたとすれば、それに越したよろこびはないのだつた。たとへ山田氏の努力が空しく、戀人がこのまゝ此の世から消え去らうとも、魂は惠まれるであらう。惠まれた魂のために、甘んじて自分も此の世を捨去ることが出來るであらう——やつぱり彼女は自分を戀し

てくれてゐたのだ！　强く〳〵。自分も死を以てその思ひに歡んで酬いよう。

『さあ、さしあたり少しも心當りがありません』と、彼は頭を上げて答へた。

——だれもが今野については知らなかつた。今野を知つてゐれば、當然、Iといふ頭文字について思ひ浮かぶ筈だつた。その正體がまるで見當がつかないだけ、彼等には好奇的でもあれば、賴もしげでもあつた。手紙は三人の前にいつまでも展げられてゐた。

『全く奇怪な手紙ですな』と、戶田は考へ込みながらいつた。

『この男にも何か後暗いことがある。それで公に名告つて出られないといつてゐるが、大方、その後暗い問題についても、靑木といふ奴なぞと關係があるに相違ない。どうです？　院長、あなたの御盡力で此男に會見して見たいのですがなあ』

『いゝでせう。僕も會つて見てやらうと思つてゐたのです。この手紙にはどこかに眞實味がある。出鱈目では書けない韻がある。指定してある留置局へすぐに返事を出してやらう』

院長は鈴を押して、這入つて來た看護婦に紙や封筒を持つて來させた。そして手術着の衣囊から萬年筆を取り出して、戶田に渡した。

『ぢやあ、君が何とか書いて遣つて下さい』

戶田はペンを取り上げた。

『時と所は？——』と、彼は尋ねた。

『明日午後八時。當病院で――』と、院長は答へた。

戸田は書いた。

＊　＊　＊

懇切なる貴書一讀せり。拙生として當然御忠言を感謝すべき義務を有するものゝ如し。明×日午後八時菊岡なる名義にて來訪せられたし。よろこんで迎接すべし。拙生を一紳士として信用せられんことを希望す。以上。

＊　＊　＊

『結構ですな。早速速達郵便で送らせませう』

看護婦は院長の命を受けて去つた。

院長はしばらくして言つた。

『では、患者にお逢はせしませうかな。しかし全然意識をなくしてゐるのだから、その點はよく知つてゐて下さらんと――』

博士は立ち上つた。戸田は城木をぢろりと不安氣に一瞥した。だが、城木は思つたよりもしつかりしてゐた。蒼白めて、唇を土氣色にしてはゐたが、眼付は落着いてゐた。

三人は階段を上つて、二階の廊下を角部屋の方へ歩いた。院長は白い扉をノックして、やがて這入つた。

窓からは下町が一と目に見晴らされて、涼しい微風が白紗のカーテンに濾されて這入つて來る部屋の壁沿ひに、雪のやうな白さに埋もれて、萎れ朽ちようとする花のやうな德惠子は、豐な髪を寢帽に包まれて仰向きに目を閉ぢて横たはつてゐた。さすがに城木は入口近くで立ちすくんだ。

『どうだね？　變りはないかね？』と、博士は附き添ひの看護婦にたづねて、その返事は待たず枕元に近づいた。

『うむ、いくらか血色がよくなつた――今朝の注射が利いたのかも知れん。ねえ、戸田君、僕は今朝思ひ切つてかなり危險なある新藥の注射をこゝろみたのです。もうかうなると、用心ばかりはしてゐられないのでね』

『城木君』

戸田はためらつてゐる城木をかへりみて、勵ますやうにいつて、ベッドに伴つた。

城木の食ひ入るやうな目が、德惠子の無意識な寢顏を眺めた。近づいて見ると驚くばかりな變り方だつた。博士は血色がよくなつたといつたが、削け凹んだ頰はまるで蠟石のやうで、閉ざされた眼のまはりには、薄墨色の環がぐるりと出來、唇は紫色に萎み皺んでゐた――息も聞えない――これでも生きてゐるのだらうか？

城木はあの華やかな夜會着の、生々とした德惠子と、あのやうな不思議な別れをしたのだつた。そして、今半年目に、僅に息がかよつてゐるだけの、屍のやうな彼女を見たのである。しかも見えないが、

あのすらりとした脛はないのだ。

おつとみつめて、さすが胸が痛れて來た風で、うつろのやうな眼付になつて、二三歩後ろにさがると、壁に凭れかゝつてしまつた。

『まだ僕達は絶望しないのです』と、博士は自他をはげますやうに言つた。

『この病院には、ごく若いが脊髄の名手がゐます。伊井君がその方の責任を持つと言つてゐるのだから――』

戸田も、項垂れて、美しい、頽れた花をみつめてゐた。

現代の醫學そのものに、全然誇負する程の妄信家ではなくとも、しかし、瀕死の人々を數あまた救つて來た經驗のある博士は、兎に角さうした事實に殆ど接觸したことのない戸田や城木に取つては、呼吸も心音も殆ど感知出來ずに、まるで死そのものゝやうに青ざめて横たはつてゐる德惠子は、たとへば水の絶えた花壇に朽頽れて行く薔薇の花より、より以上救ひなきものに思はれるのは當然だつた。はじめてこの女を見る戸田でさへ眼を伏せて、おつと立ちつくしてゐる外はないのである。自分が遙々と西の都から、燃え立つ戀を抱いて歸つて來たのを、夢にさへ悟る力もなく、昏々として無意識の深淵に沈んでゐる彼女を眺める城木の胸は、押しはかるに餘りがあつた。

この絶望的なありさまを、長く目擊させて置くのは、城木のために惡いことだと考へて、戸田は呟く

やうに言ひかけた。

『君、あちらへ行かう――博士とまだお話したいこともある』

博士は二人を元の應接間に導いた。

『どうもお手厚い待遇で、患者も後でさぞ感謝することでせう』

戸田は城木の代理のつもりであらう。肅然として頭を下げたが、『さて、先生、僕からお願ひがあるのですが――』

博士は戸田を眺めた。

『どんなことでも――』と、彼ははつきり言つた。

『有難う』と、戸田はおつと博士を見た。

『外でもありませんが、この城木君を、あの患者のそばに置いてやつて戴きたいのですが――』

『いゝですとも』と、博士は見えない程に微笑してうなづいた。そして城木を眺めて、

『丁度あの隣の部屋が空いてゐますから、心置きなくお使ひなさい』

城木は口では何ともいふことが出來ずに頭を垂れた。

戸田はいかつげな眼付で城木を見ていつた。

『これほど先生が一生懸命になつてゐて下さるのだ。君も、たとへどんな結果になつても思ひのこすことはないだらう？』

『勿論です』城木は、今は不幸な德惠子のためではなく、女々しく、力弱く、人生の大道を突破する意氣さへなかつた賤しむべき自分を、なほ且つこのやうに心にかけてくれる人達に對する感謝に、熱い涙を床に落した。

——戸田は歸りしなに、城木に聞えぬ聲で博士にさゝやいた。

『博士、あの女一人を救ふことは、もう一人の命を救ふことになります——あの女が萬一のことがあつたら、殘された一人も生きてゐないでせう』

『うむ』と、博士はうなづいた。

戸田は持前の高い調子になつて、

『全く滑稽なことです——。しかし、滑稽な現象の實相はいつも悲哀です』

『僕は多分君に滿足をあたへ得ると思ふ』と、博士は答へた。

——城木はその時から、博士の溫情で德惠子の枕邊に坐つてゐることの出來る人となつた。醫員達や看護婦達は、この不思議な青年の出現を怪しんで、博士に何かと裏問ふことがあつても、確とした答へを得たものはなかつた。

で、多分、長沼家から、捨てゝも置けず派遣された附添ひ位に一般は思つたらしかつた。

——その日の夕方、德惠子の切斷された左脛の繃帶の卷き替へを見るに忍びなくなつて、城木が隣室の椅子に無理に魂を石にして坐つてゐたころ、青山郵便局から、一通の手紙を手にして出て來た一人

の紳士風な男があつた。眞白なパナマの下から見える横顏は、疑ひもなく今野だつた。

彼は留置き郵便を受け取つたばかりである。

電車停留場の方へ歩みながら、彼は封書の封を切つた。一讀してどす黑い唇に人間的な微笑を浮べた。そして——

『青木の奴への復讐——德惠子への謝罪——一度に二つを濟ますことが出來さうだ』と、さう呟いて、來合せた電車にひらりと飛び乘つたのである。

——翌日の宵の口、白パナマの鍔をぐいと引き下し、どんよりと蒸し暑く曇つて今にも雨が落ちて來さうなのを幸ひ、鳩羽色の雨外套の襟を立てゝ、うつむき勝ちに駿河臺の傾斜を上つて來る男があつた。病院の門の前まで來ると、伏目になつて、ぎらりと輝く瞳で前後を見廻したが、別に人影がないのを見て、ほつとしたやうに玄關の方へ敷きつめられた細かい砂利を踏んで行つた。

玄關の鈴を押す。白い服裝の看護婦がつい側の窓から顏を出した。

『お手紙をいたゞいた菊岡だと院長に申し上げて下さい』と、皺枯れた低い聲で答へたが、それは例の今野の聲にまぎれもなかつた。

『あゝ、菊岡さん——菊岡さんならお待ち兼ねでゐらつしやいます』

白衣の女は自分で出て來て、